鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（211）

鹿児島第３合同庁舎整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

かごしまじょうあと

鹿児島城跡

いぬおうものばば　ひよけち

(犬追物馬場・火除地)

（鹿児島市山下町）

2021 年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）出土　加治木・姶良系陶器（山元窯・元立院窯・初期龍門司窯）

序　文

本報告書は，鹿児島第３合同庁舎整備事業に伴って，平成29度に実施した鹿児島市山下町に所在する鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）の発掘調査の記録です。

本遺跡では，近世から近現代にかけての多くの遺構・遺物が発見されました。狭小な調査範囲にも関わらず，近世期の造成面や遺構，遺物が多く出土しました。出土した瓦や陶磁器等は，鹿児島城内の様子を示す重要な成果です。

これらの考古学的成果は，これまで知られていなかった鹿児島城の築城時の状況や城としての機能・構造を解明し，既存の文献や絵図等を裏付ける基礎資料となるものです。本報告書が鹿児島城跡の保全整備と，これまで明らかにされていなかった地域史の再発見やまちづくりの一助となれば幸いです。

結びに，円滑な埋蔵文化財発掘調査にご理解・ご協力をいただいた地域の皆様，ご支援・ご協力いただいた関係者の皆様・関係機関に厚く御礼を申し上げます。

令和３年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　前迫亮一

報　告　書　抄　録

ふりがな	かごしまじょうあと（いぬおうものばば・ひよけち）
書　　名	鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）
副 書 名	鹿児島第３合同庁舎整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	211
編著者名	黒木梨絵
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 在 地	〒 899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　　TEL 0995-48-5811
発行年月日	2021 年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m^2)	調査起因
		市町村	遺跡番号					
かごしまじょうあと 鹿児島城跡 いぬおうものばば （犬追物馬場・ ひよけち 火除地）	かごしまけん 鹿児島県 かごしまし 鹿児島市 やましたちょう 山下町	46201	201-411	31° 36′ 01.22″	130° 33′ 21.85″	20171204 ～ 20180223	200	鹿児島第３合同庁舎整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鹿児島城跡 （犬追物馬場・ 火除地）	散布地	中世	杭列	中国陶磁器・国産陶器（備前） 杭	
		近世	溝状遺構　３条 土坑　２基 柱穴群 杭列 瓦溜	土師器，瓦質土器 中国陶磁器，国産陶磁器（肥前・薩摩・志野・瀬戸），琉球陶器 瓦（平・丸瓦，軒丸・軒平瓦，陶器瓦，鬼瓦等） 木製品（杭，下駄，部材，漆器）， キセル，硯，獣骨・獣歯	
		近代	凝灰岩建物基礎（知業）	エンフィールド銃弾 土管・陶磁器等	

遺跡の概要	本遺跡は鹿児島城御楼門正面（本丸）に位置する，中世～近代の複合遺跡である。 特に近世期が主体で，近世の包含層が４面確認された。近世最上層のⅢ層（砂層）からは，遺構が確認されなかったが 18 世紀後半以降の遺物が出土した。Ⅳ層は，大量の焼土・炭化物・漆喰片を含む造成面で，層位・遺物・文献から，元禄９（1696）年の大火の処理層であることが明らかとなった。この層は，正徳３（1713）年にこの地を火除のための明地（火除地）に相当する。 その下位のⅤ層面からは多くの遺構が検出された。近世最下層（Ⅵ層）では，本丸に垂直方向に延びる溝状遺構に伴う六角形の杭列が検出された。この杭列は，本丸前に設置されていた犬追物馬場の柵列の可能性が高いことが明らかとなった。なお，Ⅴ･Ⅵ層は 17 世紀後半～ 18 世紀前半の遺物が主体である。 本遺跡最下層のⅦ層からは，湧水する砂層から中世に相当する杭列が本丸に平行した状態で２列検出された。鹿児島城築城以前の姿を知る重要な成果である。 調査の成果から，本遺跡が中世～近世にかけて鹿児島城築城以前～廃城となる近代までの状態が良好に残存していること，鹿児島城内の変遷が追える重層的な成果が得られている。

鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）位置図（S＝1：50,000）

例　言・凡　例

1　本書は鹿児島第３合同庁舎整備事業に伴う鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本遺跡は鹿児島市山下町に所在する。

3　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

4　発掘調査は平成29年度に実施し，整理・報告書作成作業は令和２年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。

5　掲載遺物番号は通し番号とし，本文，挿図，表，図版の番号は一致する。

6　遺物注記等で用いた記号は「HY」である。

7　挿図の縮尺は，挿図ごとに示した。

8　本書で用いたレベル数値は海抜絶対高である。

9　本書で使用した方位はすべて磁北である。

10　本書で使用した測量原点の座標値は，世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅹ系による。

11　調査区を５ｍ間隔のマス目（グリッド）で区切った鹿児島城跡の調査グリッドを使用した。鹿児島城跡のグリッドは御角櫓南東角を基準として東（国道10号線）側の石垣に平行に軸及びグリッドを設定している。

12　発掘調査における実測図作成及び写真撮影は，調査担当者が行った。

13　遺構図等の作成及びトレースは黒木梨絵が会計年度任用職員（整理作業員）の協力を得て行った。

14　遺構名については調査時に遺構名を付与後，欠番にしたものがある。また，報告書掲載のため便宜上新たな遺構名を付与し，掲載番号とした。下表を参照にされたい。なお，原資料（図面・遺物・写真等）の注記には，調査時の旧遺構名で記載されている。

遺構名新旧対応表

旧遺構名	掲載遺構名
SD1	SD2
SD2	SD3
SD3	SD1
SK1	SK1
SK２	SD2
SK3	欠番
SK4	SK2
P32	P1
P33	P2
P34	P3
P35	P4
P36	P5
P37	P6
P２	P7
瓦溜１	瓦溜２
瓦溜２	瓦溜１

旧遺構名	掲載遺構名
SX1	SX1
SX2	SX2
SX3	SX3
SX4	SX4
SX5	SX3
SX6	SX5
SX7	SX6
SX8	SX7
SX9	SX11
SX10	SX8
SX11	SX9
SX12	SX10
SX13	SX11
SX14	SX11
SX15	SX12

15　出土遺物の実測・トレースは，黒木が会計年度任用職員（整理作業員）の協力を得て行った。

16　陶磁器の実測は（株）イビソクに一部委託した。

17　挿図の縮尺は，挿図ごとに示した。基本的に瓦はS=1/4，陶磁器はS=1/3とした。

18　本書で用いた陶磁器の表現は右図のとおりである。

19　本書で用いた瓦の部位の名称，計測部位は右図のとおりである。

20　遺物観察表で示した部位ごとの計測値は欠損している場合は（）で記している。

21　出土遺物の写真撮影は，西野元勝・鮫島えりなが行った。

22　本書に係る自然科学分析は，炭素年代測定・樹種同定は（株）古環境研究センターに委託し，漆器の樹種同定は東都文化財研究所に委託した。

23　木製品は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保存処理を行い，一部脆弱品等については東都文化財研究所に保存処理を委託した。

24　発掘調査成果の内容及び土層の色調等の表現については，原則として現場担当者による注記を用いた。また，土色の記述にあたっては，『新版　標準土色帖』に基づき，掲載した。

25　観察表に記した胎土の色調は，農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』のマンセル記号で表記している。

26　観察表に記した陶磁器の釉色は『標準色カード230』（いずれも日本色研事業株式会社発行）で表記している。

27　本遺跡は通称「鶴丸城」と呼称される場合もあるが，他の機関等で使用している場合等を除き，本書では文献にある「鹿児島城」を使用する。

28　本遺跡の調査時の遺跡名称は「火除地跡」であったが，調査成果から令和２年度に「鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）」と名称を変更した。

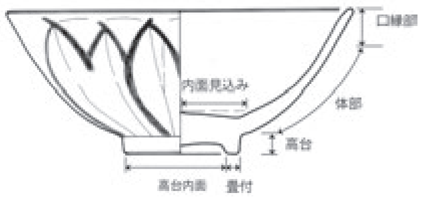
29　本書の編集は黒木が担当し，執筆分担は下記のとおりである。

第１～３章　黒木
第４章　　　各分析者
第５章　　　黒木

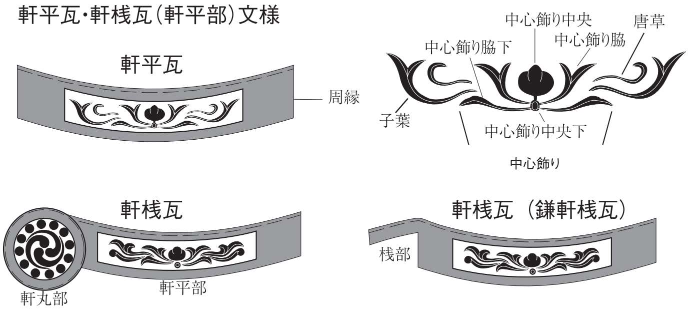
30　本書に係る出土遺物及び実測図，写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示活用を図る予定である。

凡　例

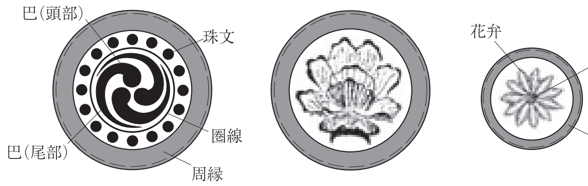
陶磁器部位



軒平瓦・軒桟瓦（軒平部）文様

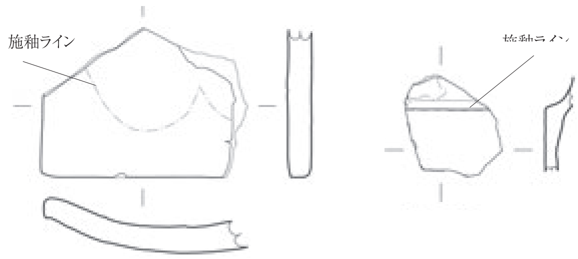


軒丸瓦文様　小菊瓦文様

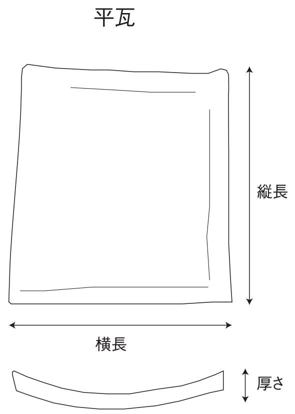


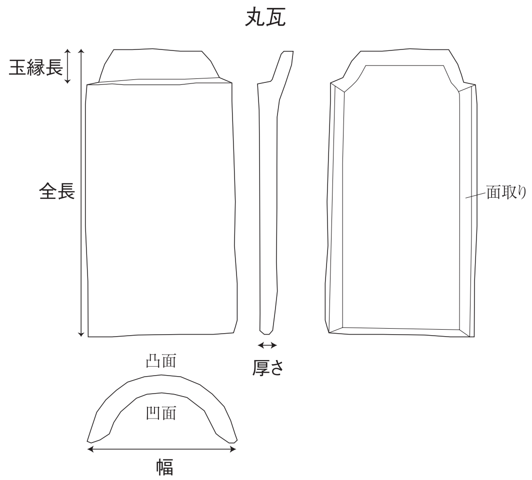
連珠三つ巴文　牡丹紋

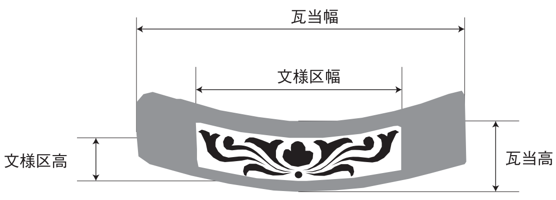
陶器瓦

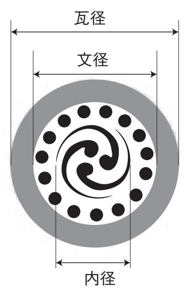


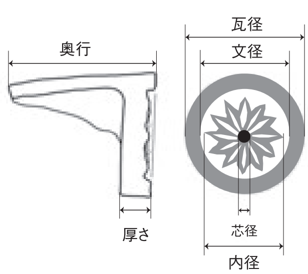
計測部位











本　文　目　次

挿　図　目　次

表　　目　　次

写真図版

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図っている。

鹿児島第３合同庁舎整備事業対象地は，「鹿児島（鶴丸）城跡保存活用計画」（鶴丸城御楼門建設協議会，鹿児島県：平成28年３月）で，鹿児島城域内に指定されている。これを受け，国土交通省九州地方整備局（以下九州整備局）と鹿児島県教育庁文化財課（以下，県文化財課）は事業対象地の取扱いについて事前協議を行い，事業予定地の遺跡の有無とその内容の把握のため，文化財保護法99条に基づいて平成28年５月24日に県文化財課が試掘調査を実施した。

試掘調査の結果，２か所設定したトレンチの内，１か所から近世の遺物が出土したことから，県文化財課は事業予定地を周知の埋蔵文化財包蔵地とした。

試掘調査結果をもとに九州整備局・財務省九州財務局と県文化財課が再度協議を行い，発掘調査を実施することとなった。発掘調査については，鹿児島市教育委員会と県文化財課の協議の結果，県立埋蔵文化財センターが本調査を実施することとなった。

調査を実施するにあたり，事業主体の九州地方整備局と鹿児島県が鹿児島第３合同庁舎整備事業に伴う「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を締結した。本調査の当初計画は，調査面積360㎡であったが，地下埋設物や調査期間中の安全面を考慮し，200㎡の調査を実施した。

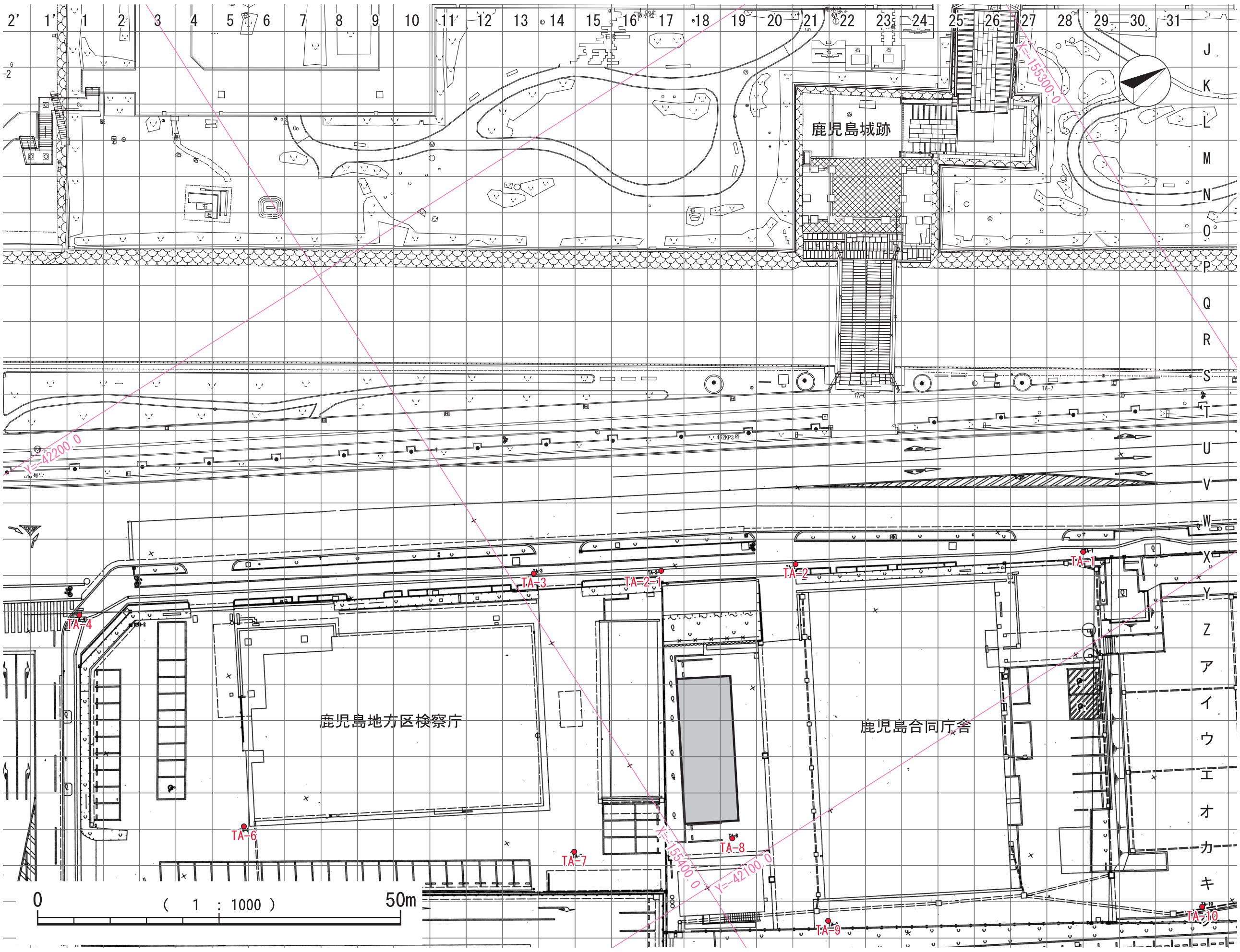
調査期間は平成29年12月４日（月）～平成30年２月23日（金）（実働44日）である。

第２節　調査の体制と経過

１　試掘調査

平成28年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局　営繕部	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査担当	県教育庁文化財課	
	主任文化財主事兼埋蔵文化財係長	寺原　徹
	文化財研究員	阿比留士朗
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	文化財主事	永濵　功治
	文化財研究員	西野　元勝
調査協力	鹿児島市教育委員会	



第１図　調査範囲

主幹兼文化財係長　内山　伸明
指導主事　新保　朋久

立会者　財務省九州財務局鹿児島財務事務所
総務課長　大和　誠五
合同庁舎管理係長　小田　輝美

２　本調査

平成29年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局　営繕部
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　堂込　秀人
調査企画　鹿児島県立埋蔵文化財センター
次長兼調査課長　大久保浩二
総務課長　髙田　浩
第一調査係長　中村　和美
調査担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財主事　樋之口隆志
文化財研究員　黒木　梨絵
事務担当　総務課主事　丸野　将輝
調査指導　鹿児島国際大学　教授　太田　秀春
東北芸術工科大学　教授　北野　博司

３　調査の経過

平成29年度

11月　環境整備，アスファルト除去，表土除去

12月　調査区1　Ⅰ層掘り下げ，近現代建物基礎（セメント），近代建物基礎跡（凝灰岩地業）検出，近現代建物基礎除去，Ⅱ層掘り下げ

１月　調査区１　Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ，Ⅳ層遺構検出，遺構調査，遺物取り上げ，実測，Ⅴ～Ⅶ層掘り下げ，一部下層確認，調査区１埋め戻し

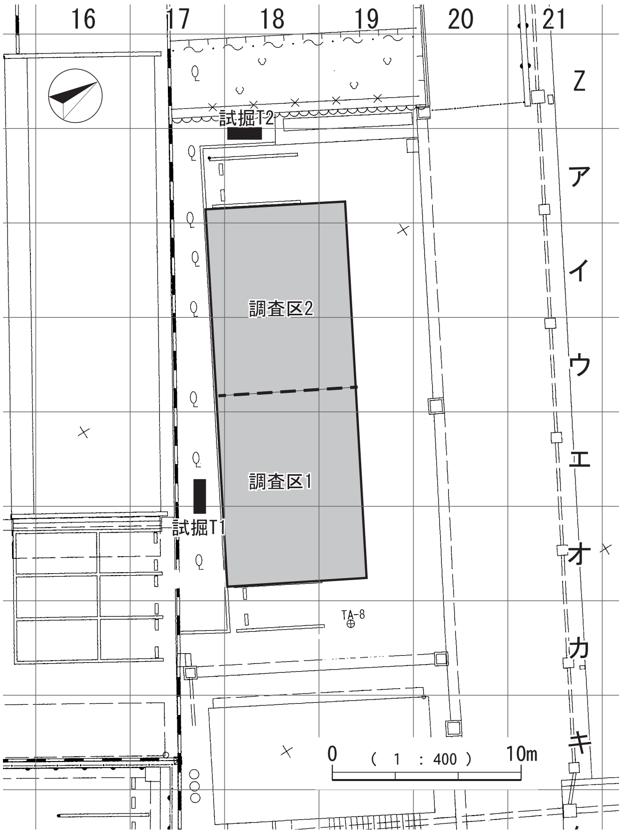
２月　調査区２　Ⅰ層掘り下げ，近現代建物基礎（セメント），近代建物基礎跡（凝灰岩地業）検出，近現代建物基礎除去，Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ，Ⅳ層遺構検出，遺構調査，遺物取り上げ，実測，測量委託，Ⅴ～Ⅶ層掘り下げ，一部下層確認，調査指導，調査区２埋め戻し

第３節　整理・報告書作成

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業にあたり，事業主体の九州地方整備局と鹿児島県が鹿児島第３合同庁舎整備事業に伴う「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を締結し，令和２年度に県立埋蔵文化財センターで行った。

整理・報告書作成作業として，出土遺物の水洗い，注記，包含層遺物の仕分け，接合作業，遺物の実測，図面のトレース・レイアウト，遺物写真の撮影，原稿執筆等の編集作業を行った。整理・報告書作成作業に関する調査体制は以下のとおりである。

なお，遺跡名については，県文化財課と協議し，調査成果に則して「鹿児島城跡」（犬追物馬場・火除地）」と名称変更を行った。



第２図　調査範囲

１　作成体制（令和２年度）

事業主体　国土交通省九州地方整備局　営繕部
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　前迫　亮一
調査企画　次長兼総務課長　野間口　誠
調査課長　中村　和美
主任文化財主事兼第一調査係長
三垣　恵一
作成担当　文化財主事　黒木　梨絵
事務担当　総務課主査　新穂　秀貴
整理指導　鹿児島大学法文学部　教授　渡辺　芳郎

報告書作成指導委員会
令和２年６月11日
中村課長ほか７名
令和２年８月7日
中村課長ほか７名
令和２年10月6日
中村課長ほか７名
令和２年11月4日
中村課長ほか７名

報告書作成検討委員会
令和２年11月10日
前迫所長ほか６名

第Ⅱ章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）は鹿児島県鹿児島市山下町（現鹿児島第３合同庁舎内）に位置する。城山の麓で，鹿児島城跡御楼門のおおよそ正面に位置しており，御楼門との間には国道10号線が走る。

遺跡は城山東南部の標高約４ｍの低地部に立地しており，城山台地（シラス台地）の麓の小段丘から海に向けての沖積地にある。

遺跡が位置する鹿児島市は，シラス台地と低地部に分けられる。シラス台地は100～200ｍの標高で広がっており，市北東部は200～400ｍの急崖が鹿児島湾に接している。市の西部から南部にかけては，薩摩半島を南北にはしる南薩台地から東の鹿児島湾側へ緩やかに傾斜し，丘陵部から低地部が形成されている。市の低地部は，シラス台地を浸食する狭い谷や舌状の台地，独立丘陵等の様々な変化に富んだ地形を有し，鹿児島湾へ注ぐ甲突川，田上川，稲荷川，永田川等の中小河川によって形成された沖積地である。

鹿児島城跡周辺の標高は城内本丸（黎明館）が約11m，御楼門橋から御楼門に入る位置が標高約５ｍ，遺跡は標高約４ｍの低地部に立地しており，東側へ鹿児島湾に向けて傾斜する地形に位置している。

第２節　歴史的環境

１　絵図・文献等から見る土地利用変遷

遺跡が位置する場所は，現存する鹿児島城の絵図で最も古いとされる寛文10（1670）年『薩藩御城下絵図』では「犬追物馬場」と記されている。

狩野常信（寛永13（1636）年～正徳３（1713）年）筆とされる『常信筆薩陽御城下ノ景』では御楼門前の南側には，木柵が見られ，北側には屋敷が描かれている。

明和４（1676）年の久保之英の『見聞秘記』付図の本丸・二之丸前の屋敷配置付図では御楼門前の土地は柵に囲われた「御犬垣」として描かれている。

元禄９（1696）年の大火後の被害状況を記した『鹿児島城絵図控』では，「明地」とされ二之丸前や周辺の侍屋敷は「焼失・焼残」と記されている。

火除地の設置を幕府に願い出た際の正徳３（1713）年『正徳三年御城下絵図』では，御楼門前は「明地」となっており，二之丸前の侍屋敷とされた範囲は，朱線で囲われ，火災で焼失し「明地」とする旨が朱字で記載されている。

宝暦６（1756）年『薩摩国鹿児島城絵図』では楼門前から二之丸前まで広い範囲が「明地」となっており，正徳３年の「火除地の設置」の文献記載と合致している（後に詳述）。

また，加治木島津家屋敷・小松家屋敷の東側には，広小路が設けられ，火除地としていることが窺える。

文政４（1821）年『鹿児島御城下明細図』では，明地（空地）には階段が見られ，「下馬」と記載されている。火除地とされていた二之丸前の明地には，屋敷が建設されており，城に隣接する火除地は御楼門前の土地のみとなっている。

天保14（1843）年『天保年間鹿児島城下絵図』，嘉永７（1854）年『府城南面屋形前之圖』では火除地北側には「下乗札」「下馬札」「馬屋」「芝」などの記載が見られる。

また『府城南面屋形前之圖』では火除地と御楼門前は斜面になっており，立地的に一段低いことが分かる。火除地南側は斜面上に歩道，北側は階段が見られる。下馬札や輿も描かれていることから，当地は登城の際の下乗・下馬場として使用されていたことが窺える。なお，これらの絵図からは火除地の北側に隣接する建物には供屋や御木屋ノ場，足軽居所があったことがわかる。

明治３（1870）年には，鹿児島城下一帯は官有地化され，火除地跡には鎮西鎮台第２分営の練兵所が設置された。この際に，下馬札を御楼門下練兵場境上涯と御軍神社下の東脇へ建て直して新たに作り直すこととし，存城時の下乗札はすべて取り除かれている（『知政所達書』）。

明治５（1872）年に撮影された古写真には，御楼門前は斜面になっており，草地が広がった低い土地であることがわかる。

明治10（1877）年の西南戦争の際には，薩軍は練兵場から出陣した。明治25（1892）年の『改正鹿児島縣地誌略』では，「練兵場ハ病院ト造士館ノ前ニ連レル，一面ノ平地ニシテ亦陸軍省ノ所轄二属ス，今ハ馬将ヲ設ケテ毎年競馬アリ」と記されており，明治18（1885）年にも練兵場で競馬が開催された記録がある。

明治26（1893）年に鹿児島市上村慶吉市長は第六師団監督部長曽山庸との間に，鹿児島市立高等小学校の用地について賃借契約を結び，旧練兵場の一部2,620坪９合を向こう満30年官借地料無料で借りることとした（鹿児島市1916）。

用地を確保できたことにより，明治27（1894）年には，旧垂水・宮之城島津家屋敷跡に鹿児島尋常中学校が設立され，旧練兵場跡地には鹿児島市立高等小学校が設置された。明治33（1900）年には鹿児島女子高等小学校が鹿児島市立高等小学校の南側に開校した。

明治34（1901）年鹿児島城跡に第七高等学校造士館が創立され，旧二之丸前も師範学校が立ち並び，明治以降，山下町一体は多くの学校が立ち並ぶ鹿児島の教育の中心地となった。

大正３（1914）年の桜島大正大噴火では「女子高等小學校其他の石垣は惨憺たる殘骸壘々として他に煙突の崩壊せるものは殆ど全部と云ひても差支へなき位倒壊せる

（『鹿児島朝日新聞記事』）とあり，山下町一帯の学校も大きな被害にあっている。大正４（1915）年には，鹿児島高等小学校は鹿児島尋常高等小学校と改称し，鹿児島女子高等小学校は鹿児島女子尋常高等小学校と改称した。

第二次世界大戦中には，鹿児島市内大空襲により，山下町も大きな被害を受け，建物等が壊滅した。戦後の復興により，昭和42（1967）年に鹿児島第３合同庁舎が建設された。

２　犬追馬場

鹿児島城の御楼門前の土地は，城下の変遷とともに変化していることが絵図等から確認されている。

特に御楼門の土地は，慶長～正徳３年まで「犬追物馬場」として利用されていたが，元禄９（1696）年の大火の被害により，本丸・二之丸前の土地は区画整理され，正徳３（1713）年に一帯を火除のための明地（火除地）としたことが絵図・文献等から読み取れる。

元禄大火以前に利用されていた「犬追物馬場」については，前述したとおり寛文10（1670）年『薩藩城下絵図』にみられる本丸前の「犬追物馬場」の記載と土地境の柵の表現，慶長～正徳年間の様子を描いた久保之英『見聞秘記付図』の「御犬垣」，17世紀後半の姿を描いたと考えられる『常信筆薩陽御城ノ景』に描かれている木柵から確認することができる。

安永２（1773）年には聖堂の創設のため，「御城下枦場枦伐除，広小路ニ可仕旨被仰渡,其通伐除，御犬垣迄取除，広小路ニ罷成候」（『三州御治世要覧』）とされ，正徳３（1713）年の明地（火除地）として整地された後にも，「御犬垣」と云われていたことがわかるが，この時期に犬追物を行った記録は残っていないため，馬場として利用されていたかは不明である。

３　犬追物について

前述した犬追物馬場で行われた犬追物は，笠懸・流鏑馬とあわせて「馬上の三ツ物」といわれ，鎌倉時代以降に武士の鍛錬として行われた馬術武芸である。

馬場内に犬を放ち，その犬を馬上より射手が射ることで，実践的な馬術・弓術の修練とした。

南北朝期以降に盛んになったが，鉄砲伝来後に馬術よりも砲術に戦法が変化したこともあり，犬追物は衰退したが，江戸期に入っても島津氏は行い続けた。

寛文10年の（1670）年『薩藩御城下絵図』には鹿児島城本丸前の方形地割に，柵に囲われた「犬追物馬場」が描かれている。

慶長年間には18代家久が行っており，19代光久は正保4（1647）年に武蔵国王子原で将軍徳川家光を招いて犬追物を催し，これ以降，島津のお家芸として知られるようになった。

光久以降は，20代綱貴が（天和元（1681）年）行った後は，一時的には衰退したが，25代島津重豪が安永２（1773）年に演武館内に犬追物稽古場を創設し再興した。安永４（1775）年には演武館内の馬場で張行された後は，幕末までこの馬場で行われた。

29代忠義は犬追物に非常に関心を持ち，明治12（1879）・14（1881）年に２度も明治天皇の前で張行した（於東京吹上御苑・麻布島津邸）。

また，明治24（1891）年には，鹿児島を訪れたロシア皇太子ニコライⅡ世に犬追物を張行したことを最後に，明治30（1897）年に忠義が没すると犬追物は催されなくなった（松尾1988・1990）。

４　鹿児島城下の火災

鹿児島城下は存城時に多くの火災が起こっている（第１表）。度重なる火災とそれに伴う城への延焼を防ぐために城内に空地（火除地）が設置された。

城下の火災では，延宝６（1678）年４月に城下下町を全焼する火事が起こり，城下に被害をもたらした。

延宝８（1680）年１月には田尻八兵衛の屋敷からの失火で，下諸士家・御春屋・屋久蔵・下町まで全焼する火災が起こっている（田尻火事）。この火災により死者54人，類焼宅地849軒，家数3308軒が被災した。この火災は，春山へ狩りに鹿児島城下諸組諸士が総出で出かけたため，城下の消火に人手が足りずに大火になってしまい，この大火以降は狩りへ総出することは無くなった。

さらに，同年10～11月には城下で連続して火事が３回起こったため，12月には辻々に火の番所を設け，城下の警戒を行ったようである。

元禄９（1696）年は火災が多く，４月23日の上浜町から出火した火災では，強風のため城下だけではなく鹿児島城にも延焼し，本丸（楼門・御角櫓・焼物蔵・御兵具蔵・対面所・評定所蔵・御書院蔵・御文書蔵・居所等）と二之丸の一部が被災し，被害は城下の肝付屋敷で止まった。鹿児島城のほか，士屋敷54か所，士家数854，町屋敷203か所，一町家数550軒が被災したとされ，甚大な被害をもたらした（元禄の大火）。

城下の度重なる火災のため，正徳３（1713）年に，被災した本丸・二之丸前の区画を城への延焼を防ぐための火除のための明地（火除地）と定め，その旨を幕府に願い出ている。火除地のほかにも城下の要所に火見櫓等を設け，城下の防災に努めた。

火除地の設置後，城下の築地の拡大など城下の整備が進むにあたり，城下での火災は宝暦９年（1759）の普請方の火災や安永３（1774）年に下町で大火などがあったが，鹿児島城まで類焼する大火は起こっていないようである。

藩下においても『御城近辺出火之節心得之覚書』（享保13（1728）年などで防火体制を整えており，鹿児島城下の発展や変遷には，火災等の災害が深く関係しているといえよう。

なお，城としての役割を終えた明治６（1873）年には鹿児島（鶴丸）城本丸，御楼門が火災により焼失している。

５　火除地の設置（明地の利用）

前述したとおり，城下で火災が相次いだため，正徳３（1713）年に島津貴久は城・城下への類焼を防ぐため，火除けのために鹿児島城下に火除地を設けることとした。

「同年四月二十八日，薩府城下役座地及自二下町札辻至築地，春屋南市廓境，士之宅地降命篤空地，其後目二之丸至下屋敷前，又篤空地，是篤二火除預菓幕府蒙允容也，以坤隅島津備前久達之宅地，篤下屋敷閏之中」（『追録舊記雑録巻四十八　吉貴候御普中』）とあり，「同年４月28日，鹿児島城下役座地および下町札辻より築地まで，春屋南市店境，士分の宅地を空き地とし，その後二之丸より下屋敷前まで火除地とすることを幕府に申し出た。坤隅（南西隅）の島津久達（知覧島津家）の宅地を下屋敷囲いの中とする」。この届出が幕府に認められ，鹿児島城下に防火地として明地を火除地とした。

また，明和４（1767）年『見聞秘記』附図（久保之英）や明和８（1771）年『薩陽落穂集』（伊集院兼喜撰）によれば，慶長年間から正徳初期までは，二之丸前には諸座と侍屋敷が配置されていたが，元禄の大火後，，犬垣（本丸正面）に接する二之丸前の被災した６か所の屋敷（喜入安房・島津中務・鎌田小藤次・島津佐衛門・島津備中・佐多豊前）を召し上げて明地とした。その明地に火除地としての役割を持たせ，枦・松・杉・檜等を植栽したとされる。

その際の明地（空地）の広さについて『通昭録巻七監察使答門抄上』によれば，「一　御下屋敷前空地之事　中小路より東堅八十一間，横五十八間，同西堅百三十六間，横五十七間半」と記されている（現名山小～中央公園：約47,690㎡）。

また火除地の設置に伴って，同年10月には火除けのため，家来屋敷の建て直しについて幕府に願い出ている。

防災のために設置された火除地だが，安永２（1773）年には，二之丸前の火除地に聖堂・医学院・造士館・演武館・諸役屋敷（御記録所・寺社奉行所・町奉行所等の役所）が創設され，城に隣接する火除地は安永年間以降には御楼門前の空地のみ（約11,320㎡）となり，縮小した（『三州御治世要覧』）。この地については，正徳年間以降も恒常的な建物がない火除地として継続して利用されていたようである。

明治３（1870）年には，『全国城郭存廃ノ処分並兵営地等撰定方』により，鹿児島城は廃城となり，鎮西（熊本）鎮台第二分営第六師団の練兵場が設置されたため，官有地となり，鹿児島城の火除地としての役目を終えている。

第１表　鹿児島城下の主な火災関連年表

年号	西暦		主な出来事	出典
寛永16	1639	8月	鹿児島城で火災本丸，「ちうじゃくの御門」から「北之方之御門并堀」，「北西富士見之矢倉」まで悉く焼失	雑録（後編）6-47
寛永19	1642	9月	上町行屋で出火泉屋町まで焼失する	古記
延宝6	1678	4月	下納町で出火し，下町が全焼焼家数2131等焼失	旧雑記録追録1-1740
延宝8	1680	1月	**田尻火事** 前代未聞の大火下諸士家・御春屋・屋久蔵・南林寺前脇寺・下町まで残らず焼ける死者54人類焼宅地849軒焼家数3308軒	旧雑記録追録1-1767旧雑記録追録1-1768 旧雑記録追録1-1770
		10～11月	城下で３回火事が起こる	古記
貞享元	1684		鹿児島下方大火	古記
元禄2	1689	1月	鹿児島城下で大火高麗町上村正右衛門より出火高麗町～新屋敷船手近くまで類焼）	古記
元禄9	1696	4月	**元禄の大火**	旧雑記録追録1-2599 旧雑記録追録1-2600 旧雑記録追録1-2601 古記
		12月	夜上町で火災三か所焼失	古記
元禄12	1699	9月	上町出火	古記
		11月	上町出火23か所焼失	古記
元禄16	1703	2月	加治屋町（勝目兵右右衛門屋敷）より出火大火となる（屋敷730か所，数2000軒等焼失）	古記
宝永3カ	1706		城下が万が一出火した際には予てより申し渡している掟の趣旨を守るようにとのこと	旧雑記録追録2-2253
宝永5	1708	2月	下燈籠半町計下より出火町屋敷108，網干場焼失	古記
正徳3	1713	1月	下町大火（但木屋町から出火）士屋敷35，町屋敷410，寺門前92，職人屋敷2焼失	古記
		4月	下町大火天神社・諏訪社焼失御春屋廻り千石馬場筋～加治屋町まで類焼	古記
			火除けのため，鹿児島城下に火除地を設ける	旧雑記録追録3-207
		12月	火除けのため，家来屋敷の建て直しの願い	旧雑記録追録3-297
享保2	1717	4月	浄光明寺・不断光院等焼失士屋敷27か所，立野・冷水，宝球院・般若院まで類焼	古記
享保13	1728		**御城近辺出火之節心得之覚書**	古記
宝暦9	1759		普請方より出火し，奉行所や材木蔵が焼失	三州御治世要覧
明和9	1772	4月	『御星祭祈祷勉方』曾山文助，「鶴丸山之御城」は「火難之御城」であると上申	藩法集8（上）1291
安永3	1774	7月	下町で大火菩薩下小路から門前船津寺まで残らず全焼	旧雑記録追録6-1212
享和3	1803	1月	下町で火災．火元は泉町川口彦太郎宅	旧雑記録追録7-691
明治6	1873		**鹿児島（鶴丸）城本丸，御楼門が焼失**	
明治10	1877		**西南戦争** **鹿児島（鶴丸）城二之丸が焼失**	

【主要参考文献一覧】

鹿児島市1955『鹿児島のおいたち』

鹿児島市1916『鹿児島市史』

鹿児島市史編さん委員会1971「第4部 近世関係史料　古記」『鹿児島市史第3巻』

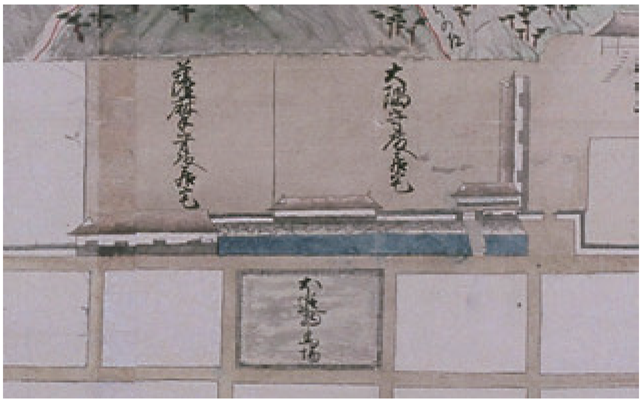
鶴丸城御楼門建設協議会／鹿児島県 2016 「鹿児島（鶴丸）城跡保存活用計画」

蓑田岩太郎（編）1908『鹿児島市街實地踏査圖』，吉田文弁堂

原口泉ほか（編）2016『鹿児島市の昭和：写真アルバム』，樹林舎

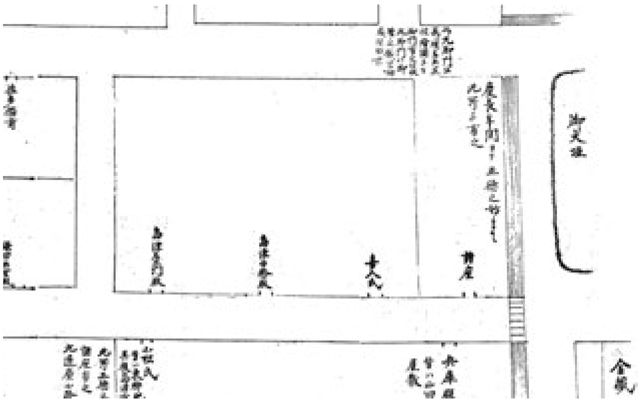
松尾千歳1988「資料紹介ー館蔵「犬追物図」について」『尚古集成館紀要』2，pp.21-34

松尾千歳1990「島津家武家故実の成立と展開―犬追物故実を中心としてー」『尚古集成館紀要』4，pp.1-20

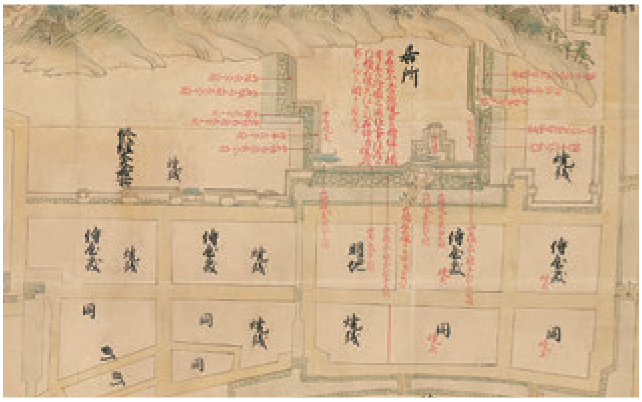


寛文10（1670）年
「薩藩御城下絵図」（部分）（鹿児島県立図書館所蔵）

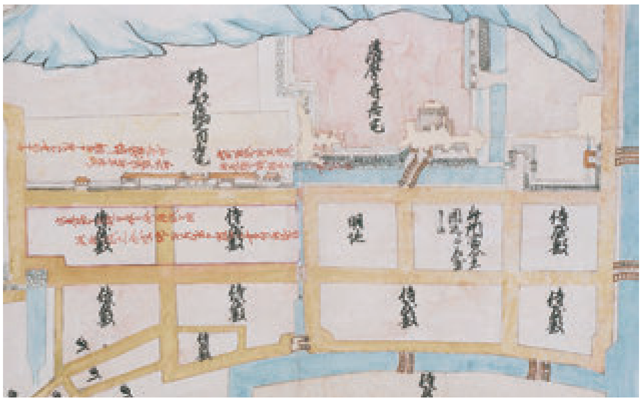
17世紀後半～18世紀前半
「常信筆薩陽御城下ノ景」（部分）（黎明館所蔵）



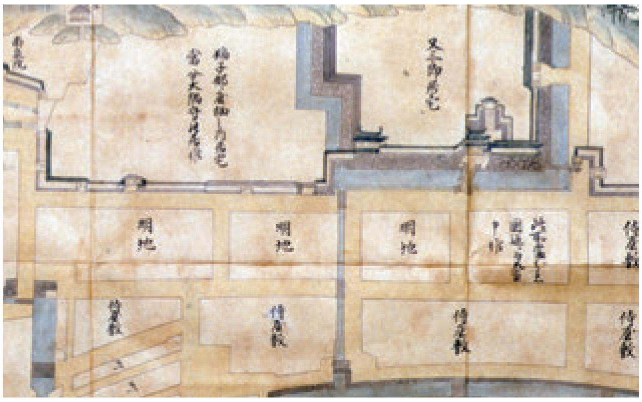
明和４（1767）年
『見聞秘記付図』（部分）久保之英　慶長～正徳年間の絵図



元禄９（1696）年
「鹿児島城絵図控」（部分）（東京大学史料編纂所所蔵）



正徳３（1714）年
「正徳三年御城下絵図」（部分）（鹿児島県立図書館所蔵）



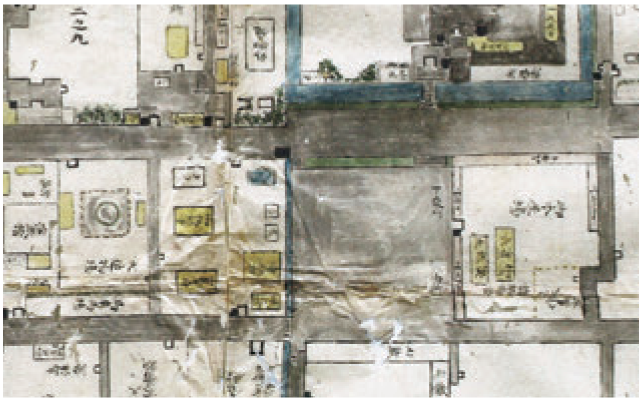
宝暦６（1756）年
「薩摩国鹿児島城絵図」（部分）（東京大学史料編纂所所蔵）

文政４（1821）年
「鹿児島御城下明細図」（部分）（鹿児島県立図書館所蔵）

天保14（1843）年
「天保年間鹿児島城下絵図」（部分）（鹿児島市立美術館所蔵）

第３図　鹿児島城下絵図　近世期

嘉永７（1854）年
「府城南面屋形前之圖」（部分）髙木善助『西陲畫帖』



明治６（1873）年
「成尾常矩城下絵図」（部分）（個人蔵）近世期の状況を詳細に描写

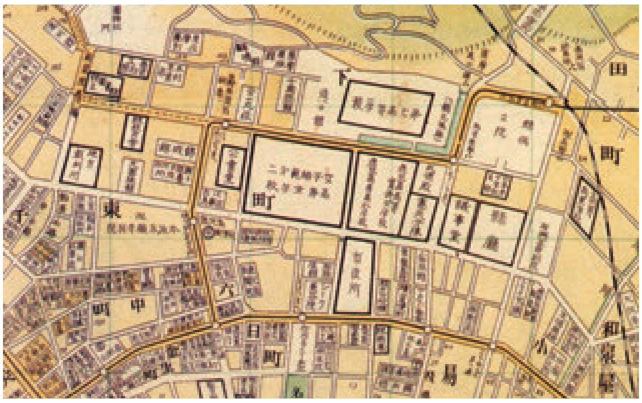
明治５（1872）年
「島津御本丸前面景」（鹿児島県立図書館所蔵）

明治17（1884年）年
「鹿児島市街略図」（部分）（鹿児島市1971）

明治30（1897）年
「鹿児島市街實地踏査圖」（部分）（蓑田1908）

大正７年（1918）年　「鹿児島市街便覧図 実地測量地番里程入」
（部分）（若松長義 製・吉田書房1918）（国立国会図書館蔵）

昭和10～13年（1935～1938）
鹿児島城跡：第七高等学校造士館，手前：高等小学校校舎



昭和14（1939）年
「鹿児島市職業別明細図」（部分）（鹿児島市1995）

第４図　鹿児島城下絵図　近世～近代以降

鹿児島城跡
（犬追物馬場・火除地）
仙巌園附
花倉御仮屋庭園
旧鹿児島紡績所技師館
（異人館）
キイレツチトリモチ産地
琉球人松碑
桜島フェリーターミナル
北埠頭旅客ターミナル
南ふ頭旅客ターミナル
中央卸売市場
鹿児島港
0
（1:25000）
1km

第５図　周辺遺跡位置図

第２表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	備考	遺跡コード	
1	鹿児島(鶴丸)城跡	城山町	平地 丘陵	縄文時代,古代,近世,近現代	鹿児島県教委1983 『鹿児島（鶴丸）城本丸跡』 鹿児島市教委1984 『鹿児島（鶴丸）城二之丸跡C地点』 鹿児島県教委1991『鹿児島城二之丸遺構編』 鹿児島県教委1992『鹿児島城二之丸遺物編』 鹿児島市教委1995 『鹿児島（鶴丸）城二之丸跡F地点』 鹿児島市教委2000『鹿児島（鶴丸）城二之丸跡G地点』 鶴丸城御楼門建設協議会・鹿児島県2016『鹿児島（鶴丸）城跡保存活用計画』 鹿児島市教委2017『鹿児島（鶴丸）城御厩跡』 鹿児島県立埋セ2020『鹿児島（鶴丸）城御楼門跡周辺』	201	062
2	仙厳園附花倉御仮屋庭園	吉野町9700-1	平地	近世		201	−
3	雀ヶ宮	吉野町雀ヶ宮深堀	台地	弥生時代,古墳時代		201	027
4	矢来門	吉野町雀ヶ宮矢来門	丘陵	縄文時代 早期		201	104
5	集成館跡	吉野町磯	平地	近世		201	145
6	鹿児島紡績所跡	吉野町竜ヶ水	平地	近世	鹿児島市教委2000『鹿児島紡績所跡D地点』 鹿児島県立埋セ2012『鹿児島紡績所跡ほか』	201	156
7	雀ヶ宮B	吉野町雀ヶ宮	丘陵	縄文時代 草創期		201	142
8	前平	吉野町雀ヶ宮前平	台地	縄文時代 早期		201	005
9	滝ノ上火薬製造所跡	吉野町滝ノ上	平地	近世	鹿児島市教委 1998 『滝ノ上火薬製造所跡』 鹿児島県立埋セ2021『滝ノ上火薬製造所跡ほか』	201	127
10	橋ノ口城跡	坂元町字城ノ後	台地	中世		201	069
11	清水城跡	清水町大興寺岡	丘陵	中世,近世		201	055
12	東福寺城跡	清水町田之浦	丘陵	古代,中世		201	054
13	尾頸小城跡	稲荷町字後迫	平地	中世		201	083
14	浜崎城跡	清水町田之浦	丘陵	中世		201	058
15	祇園之洲砲台跡	清水町祇園之洲	平地	近世	鹿児島市教委 1998 『祇園之洲砲台跡』 鹿児島県立埋セ2012『鹿児島紡績所跡・祇園之洲砲台跡・天保山砲台跡』	201	146
16	浜町	浜町	平地	近世	鹿児島県立埋蔵文化財センター 2000 『浜町遺跡』	201	132
17	大乗院跡	稲荷町清水中校庭	丘陵	中世,近世	鹿児島市教委1983 『大乗院跡』 鹿児島市教委1985 『大乗院跡』	201	082
18	福昌寺跡	池之上町玉龍高校一帯	平地	中世,近世	鹿児島市教委 2008 『福昌寺跡』 鹿児島市教委 2014 『県指定史跡　福昌寺跡島津家墓所』 鹿児島市教委 2014 『鹿児島市埋蔵文化財確認発掘調査報告書IX―福昌寺跡―』 鹿児島市教委 2017『薩摩藩主島津家墓所福昌寺跡調査報告書』	201	144
19	丸岡	坂元町たんたとう丸岡	丘陵	縄文時代 早期･後期		201	003
20	南洲神社	上竜尾町南洲神社境内	台地	縄文時代 早期		201	007
21	大龍遺跡群	大竜町･池之上町･春日町	台地	縄文時代 前期・中期・後期・晩期,弥生時代,古墳時代,中世,近世	鹿児島市教委 2001 『大竜遺跡』 鹿児島市教委 2001 『大竜遺跡』 鹿児島市教委 2001 『大竜遺跡B地点』 鹿児島市教委 2014 『鹿児島市埋蔵文化財確認発掘調査報告書IX　―大龍遺跡I・J地点―』 鹿児島市教委 2017『『鹿児島市埋蔵文化財確認発掘調査報告書XI―大龍遺跡K地点－』	201	009
22	内城跡	大竜町	平地	中世		201	056
23	催馬楽城跡	坂元町矢上	丘陵	中世		201	057
24	竪野冷水窯跡	冷水町竪野	丘陵	近世	社団法人鹿児島共済会南風病院1976『竪野（冷水）窯址』	201	143
25	琉球館跡	小川町	-	近世	鹿児島市教委2003『鹿児島市埋蔵文化財確認発掘調査報告書30―共研公園遺跡・琉球館跡―』	201	159
26	垂水･宮之城島津家屋敷跡	山下町	平地	近世	鹿児島県立埋文セ 2003 『垂水・宮之城島津家屋敷跡』	201	134
27	**鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）**	**山下町13番21号**	**平地**	**近世**	**本報告書**	**201**	**411**
28	名山	山下町名山小校庭	平地	近世,近現代	鹿児島市教委 1988 『名山遺跡』 鹿児島市教委 2002 『名山遺跡』	201	105
29	造士館･演武館跡	山下町4-1，4-2	平地	近世,近現代	鹿児島市教委 2003『造士館・演武館跡』	201	106
30	上山城跡	新照院町	丘陵	中世		201	061
31	夏蔭城跡	草牟田町夏蔭	丘陵	中世,近世,近現代		201	133
32	伴掾館跡	伊敷町中福良	丘陵	古代,中世		201	060
33	玉里邸跡	玉里町	平地	近世	鹿児島市教委 2004 『鹿児島市埋蔵文化財確認発掘調査報告書2－玉里邸跡・墓下遺跡－』 鹿児島市教委文化課 2015 『名勝旧島津氏玉里邸庭園整備事業工事完了報告書』	201	157
34	玉里	玉里町(旧練兵場跡)	平地	弥生時代初頭～前期		201	020
35	共研公園	中央町	-	弥生時代,古代	鹿児島市教委2003『鹿児島市埋蔵文化財確認発掘調査報告書―共研公園遺跡・琉球館跡―』	201	158
36	武	武一丁目	平地	弥生時代,古墳時代,中世	鹿児島市教委 2002 『武遺跡E地点』 鹿児島市教委 2004 『武遺跡F地点』 鹿児島市教委 2004 『武遺跡E地点』	201	129
37	鹿大構内	郡元一丁目鹿大構内	平地	弥生時代,古墳時代	鹿児島市教委 2014 『鹿大構内遺跡郡元団地JT跡地』ほか	201	023

第Ⅲ章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

１　発掘調査の方法

調査区が200㎡と狭小のため，調査区を２分割し，排土を反転しながら調査を行った。調査区南側を調査区１（100㎡），北側を調査区２（100㎡）とし，12～１月に調査区１，２月に調査区２の調査を実施した（第２図）。

調査にあたり，既知の基準点のＫＢＭ1　X：-155389.861　Y=-42148.58　H=5.032，TA-2　X：-155365.873，Y＝-42131.123，H＝4.039，TA-8＝X＝-155393.526，Y＝-42103.879，H＝4.039を基準とし，位置を記録した。グリッドに関しては，鹿児島城跡の調査グリッドを延長し，設定した。

まず，調査区表面のアスファルトを切断し，アスファルトとセメント基礎を重機で除去した後，調査を開始した。Ⅰ層で鉄筋コンクリート基礎，Ⅱ層上面で凝灰岩の建物基礎が検出されたことから，建物基礎の配置状況を写真・図面等に記録した後，重機での基礎部分の撤去作業を行った。

Ⅲ層以下は，遺構が検出された段階で写真撮影，配置図・実測図等の測量・記録作業を行った。遺構は，検出状況の写真撮影を行った後に調査を行い，半截状況の記録をとりながら，1/10・1/20・1/40の平面図・断面図を作成し，完掘状況の写真撮影を行った。Ⅵ層以下の湧水は水中ポンプで排水を行い，調査を進めた。Ⅶ層以下は下層確認のため，一部下層確認トレンチを設定し，遺物・遺構の有無の確認を行った。

２　遺構の認定と調査方法

検出された遺構については，遺構の種類ごとに検出された順で遺構名と遺構番号を付与した。調査の過程で遺構でないと判断されたものについては欠番とした（本報告掲載番号については凡例を参照）。

遺構検出はⅡ層・Ⅴ層・Ⅵ層・Ⅶ層上面で試みた。撹乱も多く，層序を慎重に把握しながら行なった。

遺構は検出された段階で写真撮影・実測を実施した後，土坑や柱穴については半截，溝状遺構や不明遺構等は土層観察用のベルトを設定し，土層の確認を行いながら掘り下げた。遺構の性格・状況に応じて出土遺物の記録作成や取り上げ，土層堆積状況の断面図等の記録を行った。遺構の認定については埋土の状況や床面の状態，遺物出土状況等を基に判断した。

３　整理作業の方法

整理作業は，令和２年度に行い，最初に遺物の水洗や注記，接合などの基礎整理作業を行った。

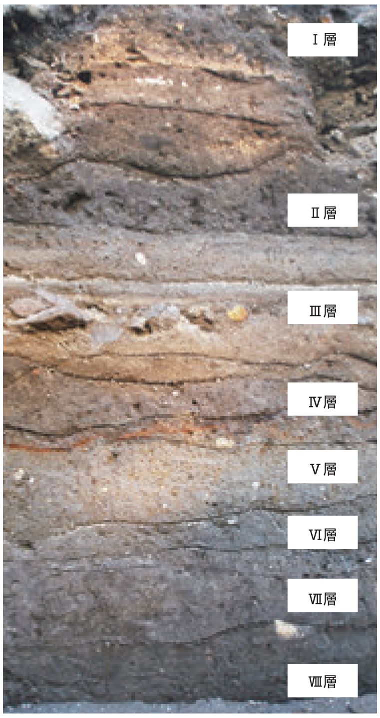
注記は注記記号「HY」を頭に「調査区」，「層」，「遺構名」の順で記入した。基礎整理作業後，実測遺物の選別・実測・拓本・トレース等の製図作業を行った。木製品に関しては，乾燥に留意しながら，分類・実測・トレース等の製図作業を行った後，保存処理・科学分析を行った。

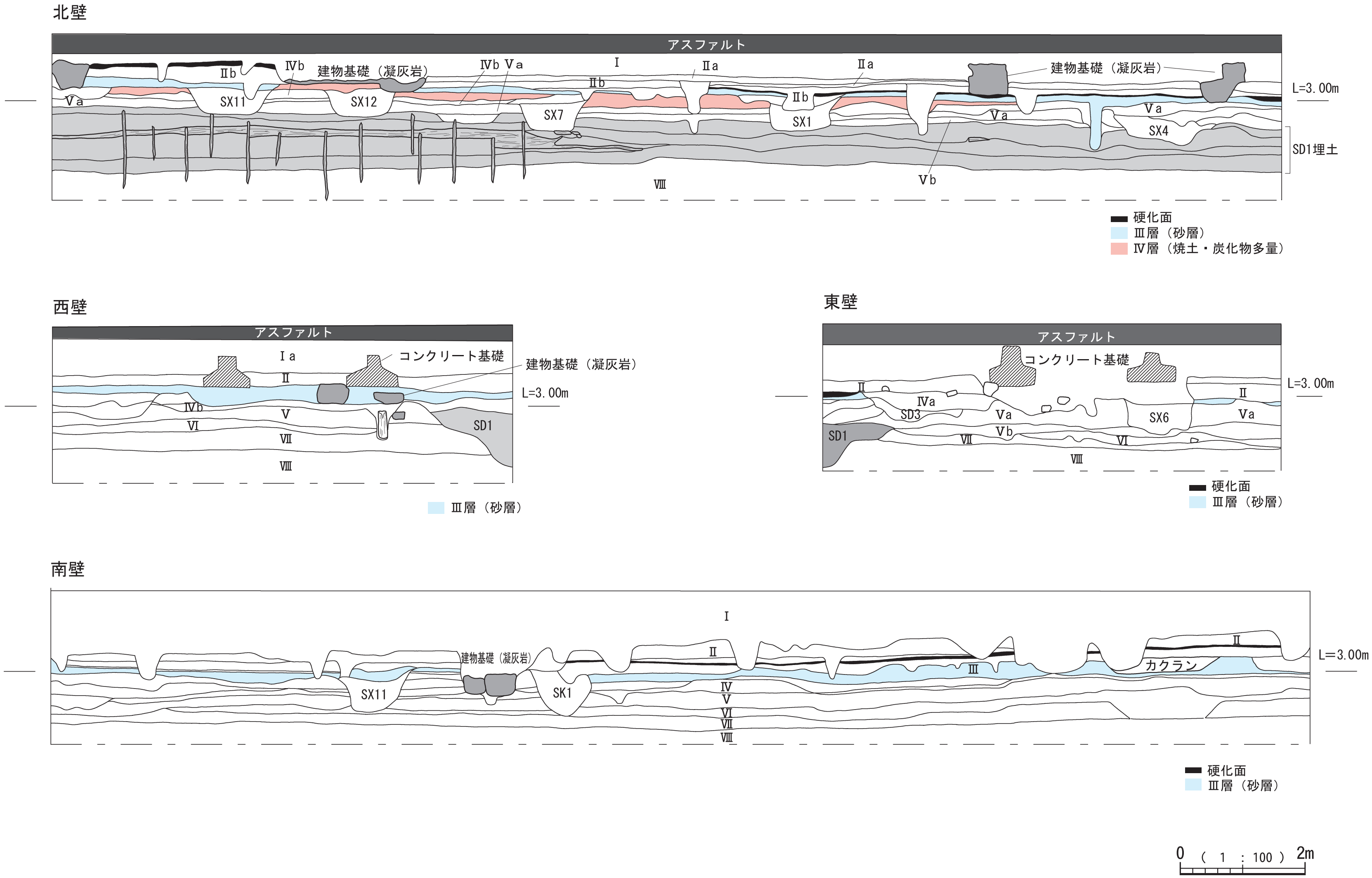
第２節　層序

層序は第３表・第６図に示す。Ⅰ層は近・現代造成土

第３表　基本土層

層位	時期	色調	特徴	層厚
Ⅰ層	表土	撹乱層	近・現代の撹乱	120cm
Ⅱa層	近代	褐灰色土（10YR4/1）	瓦・炭化物・漆喰多量含む	10cm
Ⅲ層	近世1	灰色砂（2.5Y6/2）	複数硬化面重なる 貝殻粒含む砂（造成？）	10～20cm
Ⅳa層	近世2	黄褐色土（10YR5/6）	造成面（炭化物・焼土等多量含む）	10cm
Ⅳb層		黒褐色土（2.5Y3/1）	鉄分沈殿層（硬質）（炭化物・焼土等多量含む）	5～10㎝
Ⅴa層	近世3	褐灰色砂質土（10YR5/6）	包含層・遺構検出面	10㎝
Ⅴb層		黄褐色土（2.5Y5/6）	鉄分沈殿層（硬質）	5～10㎝
Ⅵ層	近世４	褐灰色粘質土（7.5YR6/1）	包含層・遺構検出面 φ1～5㎝大の軽石含む	20㎝
Ⅶ層	中世	黒褐色砂質土（2.5Y3/1）	黒褐色砂質土ベースに黄灰色粘質土（2.5Y4/1）混じり。湧水層	40㎝
Ⅷ層	無遺物層	黒色砂（2.5Y2/1）	φ5～８㎝大の軽石含む 湧水層	50㎝＋
Ⅸ層	無遺物層	黒褐色粘質土	軽石含む。湧水層	30～40㎝
Ⅹ層	無遺物層	黒色砂	軽石含む。湧水層	40㎝＋




北壁
アスファルト
建物基礎（凝灰岩）
L=3.00m
SD1埋土
硬化面
Ⅲ層（砂層）
Ⅳ層（焼土・炭化物多量）
西壁
コンクリート基礎
建物基礎（凝灰岩）
Ⅲ層（砂層）
東壁
コンクリート基礎
硬化面
Ⅲ層（砂層）
南壁
建物基礎（凝灰岩）
カクラン
硬化面
Ⅲ層（砂層）
0 （1：100） 2m

第６図　土層断面図

で約120㎝堆積している。表土下30㎝はコンクリート建物基礎が確認された。Ⅰ層のコンクリートを除去するとⅡ層上面で凝灰岩の建物基礎（布地業）が検出された。Ⅱ層は，多量の炭化物・焼土・漆喰・瓦片を含んでいることや出土遺物から近代の造成土と考えられる。

Ⅲ層は粒子が細かい極小貝殻粒を含む砂層だが，自然堆積層とは考えにくく，土地の造成に伴う埋め立て層の可能性が考えられる。Ⅲ層中からは近世の瓦片・陶磁器片が出土した。

Ⅳa層は，焼土や炭化物・城山層のブロック（橙黄色土）・漆喰片を多く含む層で非常に硬質で締まっており，近世期の造成層と考えられる。調査区北側で良好な堆積が確認された。Ⅳb層の硬質な鉄分沈殿層下のⅤa層は黄灰色土の硬く締まった層で，近世相当の遺構が多く検出された。

Ⅵ層は水分を含む褐灰色粘質土で近世相当の木製品を伴う溝や柱穴が検出された。遺物が少量出土した。Ⅶ層は湧水層の黒褐色砂層で，木杭列と中世の遺物が少量出土した。Ⅷ～Ⅹ層は無遺物層で自然堆積層であることが確認された。

本遺跡の層序ではⅣ層（焼土を含む造成面）に近世の遺構がパックされた状況で検出され，近世相当の包含層が良好に残存していることが確認された。

第３節　中世の調査成果

１　遺構（第７図）

表土下約180㎝，標高約2.2ｍで検出されたⅦ層は，湧水する黒色砂層であり，少量の中世遺物と杭列，自然流路と考えられる浅い窪みが溝状に検出された。自然流路と考えられる溝は深さが約５㎝程度と浅く，ヘドロ状の泥が溜まっていた状況で，人工的な遺構ではないと判断した。木杭の年代測定結果と出土遺物から，Ⅶ層は中世相当層と考えられる。

（1）杭列（第７～9図）

自然木枝の先端を加工した杭列が調査区２の南北方向に２列検出された。この杭列は鹿児島城の堀と並行していた。

木杭は32本確認され，概ね2.5～3.5㎝大と細目で，表面には樹皮が残存しているものが多い。特に残存状態の良いものを図化した（３～15）。樹種はいずれもマツ属で，年代測定の結果では15世紀中～後半の年代が得られている（詳細は第４章）。杭列以外の遺構は確認されなかったため，詳細は不明だが，砂層で湧水するⅦ層は，地盤的には脆弱であるため，地盤改良（粗朶？）のような役割を持った杭列と考えられる。

２　遺物（第８図）

Ⅶ層出土遺物は２点である。１は鎬蓮弁文をもつ龍泉窯系青磁である。２は備前の片口擂鉢である。

第4節　近世の調査成果

１　概要

本遺跡で残存していた近世相当層はⅢ～Ⅵ層であった。各層には攪乱などもあったが，勾配などはみられず，調査区内では平坦に堆積していた。

Ⅲ層は海砂のような砂層であり，厚さにばらつきがあるが，調査区全体で確認された。調査区西側に位置する試掘調査のＴ２では厚く堆積しており，Ⅲ層から18世紀代の瓦が大量に出土したことから，近世相当層と想定される。

Ⅳ層は，焼土や炭化物・城山層のブロック・漆喰片を多く含む層で非常に硬質で締まっており，遺構は確認されなかった。近世期の造成層と考えられる。遺物の多くは二次焼成を受けたものが多い。

Ⅴ層は暗褐色粘質土の硬く締まった層で，多くの近世遺構が検出された。遺物は包含層の中では最も出土量が多く，遺構内には陶磁器・瓦・獣骨等が出土している。

Ⅵ層は水分を含む灰色粘質土で木製品や木柱を伴う溝状遺構や柱穴等が検出された。

以上のように，本遺跡の近世期相当層はⅢ～Ⅵ層の４面あることが明らかとなった。特にⅤ・Ⅵ層は，Ⅳ層の焼土等を含む造成面にパックされた状況で検出されていることから，近世期はⅣ層を挟んだ上下の層で分けられることが確認された。

本節では遺構が検出された層ごとに各遺構・遺物等についてまとめ，各層の詳細な時期については，遺構・遺物等を踏まえ，後述する。

２　Ⅵ層（第10～24図）

Ⅵ層は近世相当の最下層で，Ⅴb層の硬質の鉄分沈殿層下で検出された。Ⅴb層の硬質層を剥がすとⅥ層（褐灰色粘質土）で遺構・遺物が確認された。Ⅵ層自体も非常に硬くしまった水分を多く含んだ層であり，木製品等が良好に残存していた。

（1）柱穴（第11～13図）

P1

検出状況　調査区２の西側で検出された。

形状・規模　幅約45㎝×45㎝で深さ約23㎝である。

埋土　水気を含む黄灰色砂質土で，円礫を多く含まれていた。

出土遺物　遺物は出土していない。

P2

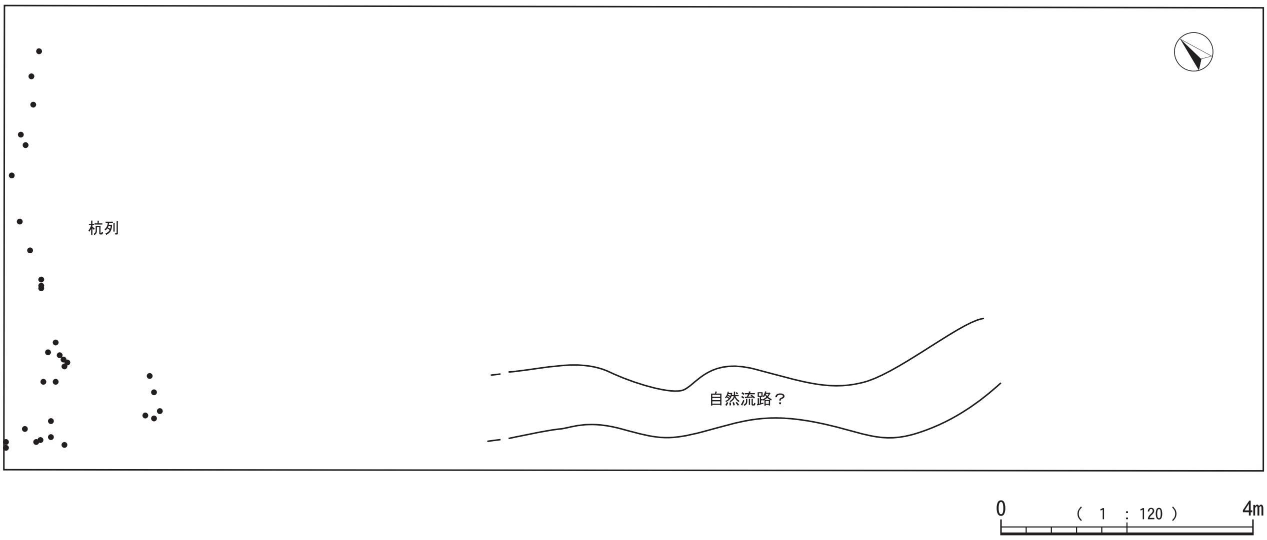
検出状況　調査区２の西側で検出された。

形状・規模　幅約75㎝×45㎝で深さ約50㎝である。

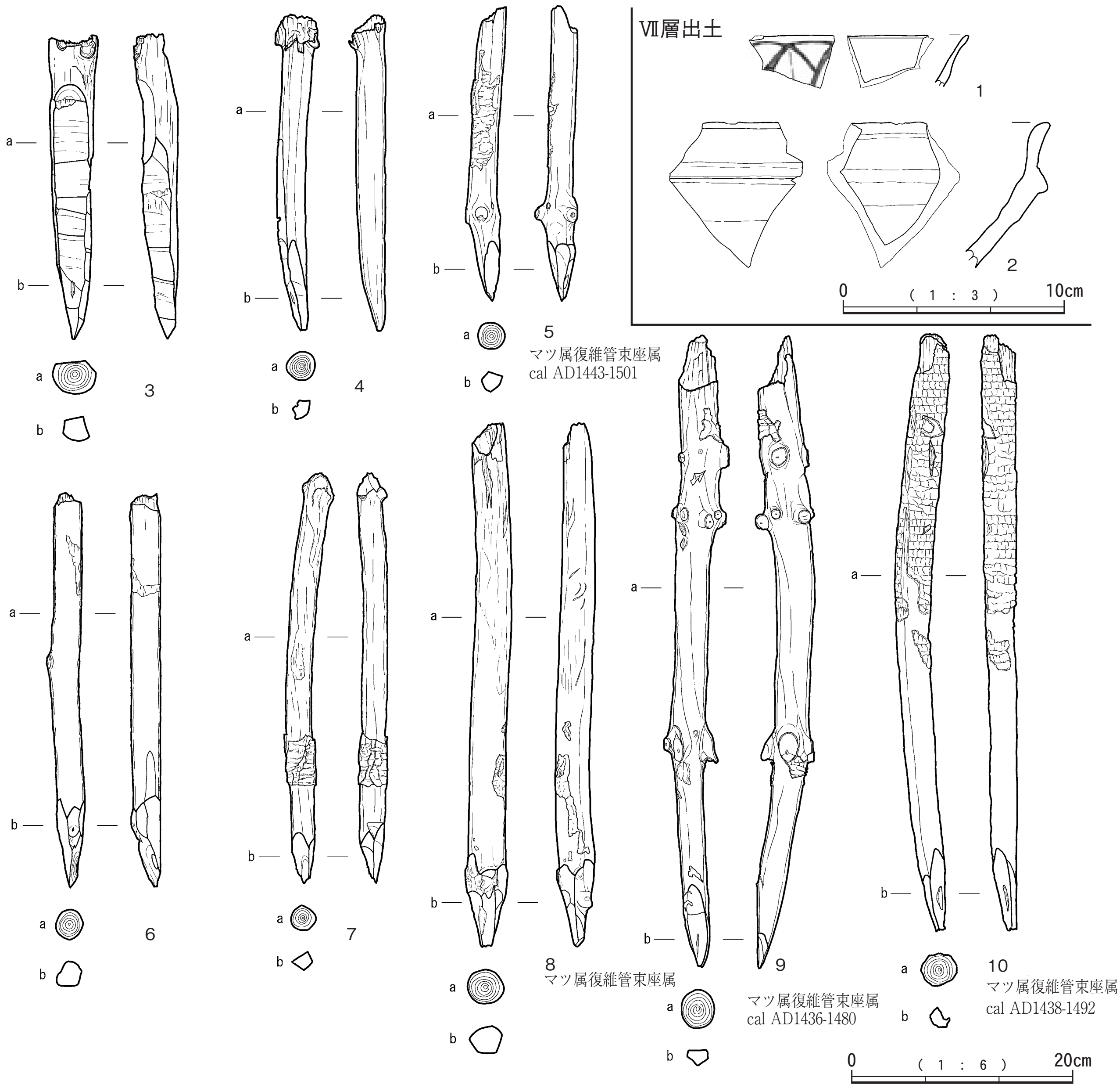
埋土　水気を含む黄灰色砂質土と黒色砂質土であった。

出土遺物

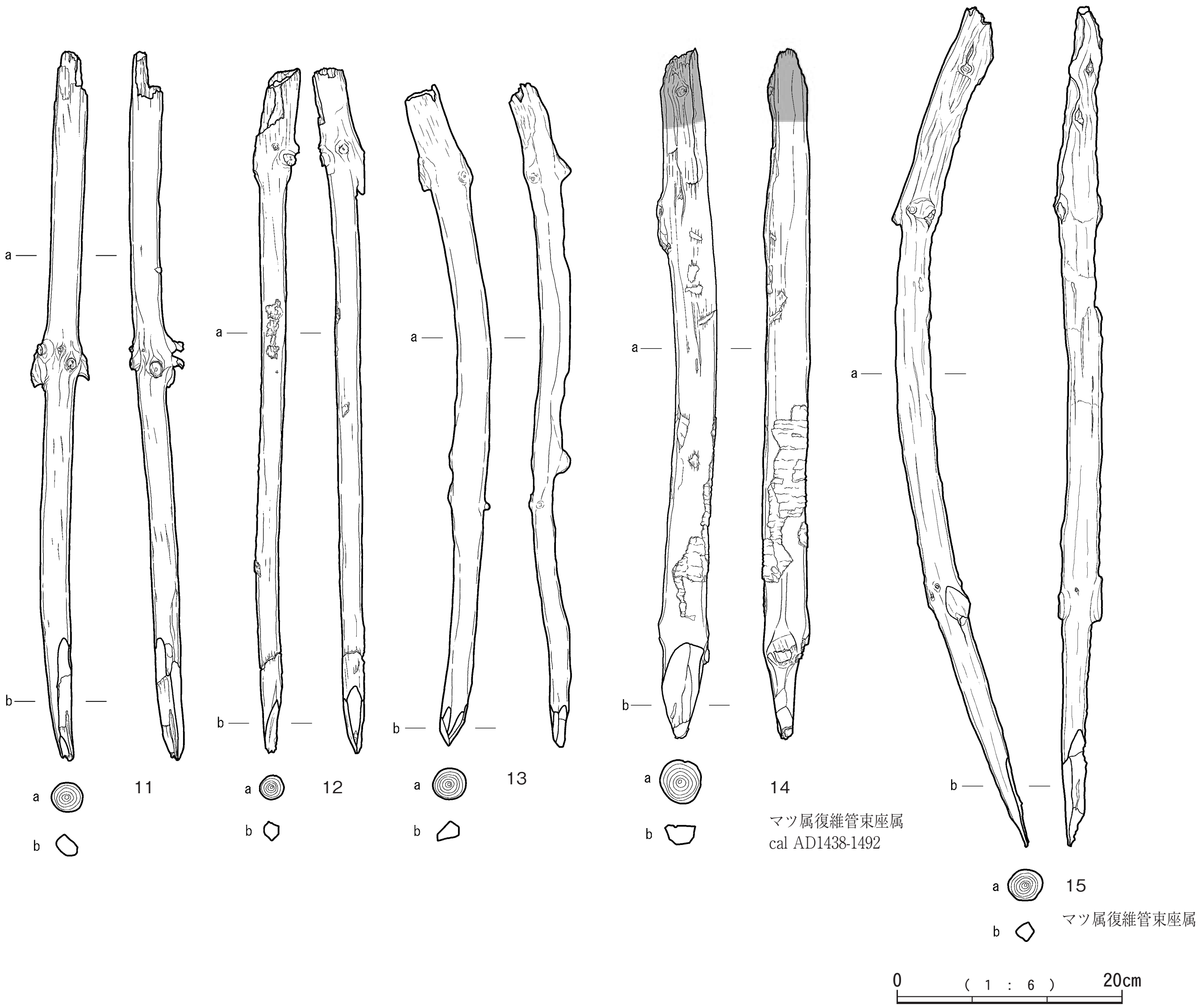
約15×12×43㎝の上部が炭化した木柱と円礫が出土した。16は丸瓦である。玉線長が1.6㎝と短く，胎土には



第７図　Ⅶ層検出遺構配置図



第８図　Ⅶ層出土遺物・杭列　杭１



第９図　Ⅶ層杭列　杭２

石英を多く含み，やや光沢をもつ。

Ｐ３

検出状況　調査区２で検出された。

形状・規模　幅約65cm×60cmで深さ約45cmである。

埋土　水気を含む黄灰色砂質土であった。

出土遺物　板状の礫と円礫が出土した。

Ｐ４

検出状況　調査区２で検出された。遺構の北側はSX８に切られている。

形状・規模　幅約80cm×64cmで深さ約25cmである。

埋土　水気を含む黄灰色砂質土であった。

出土遺物　約10×15×20cmの上部が炭化した木柱が出土した。17は平瓦で，胎土には石英や白色小粒を多く含み，表面には工具による横ナデで調整されている。

Ｐ５

検出状況　調査区２でSD１に切られて検出された。

形状・規模　幅約40cmで深さ約55cmである。

埋土　水気を含む黄灰色砂質土であった。

出土遺物

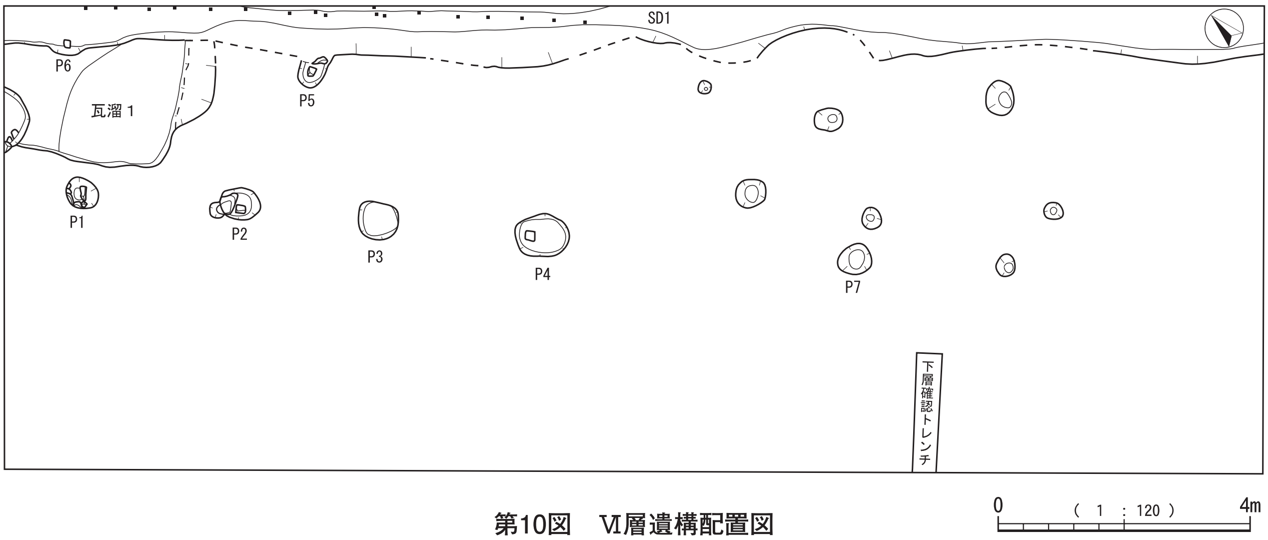
北側で炭化した約10×15cmの木柱片と下部で約10×10×60cmの上部が炭化した柱が出土した。

18は加治木・姶良窯系（元立院窯）の仏花瓶である。胎土は褐灰色で内外面に鉄釉が施釉され，ϕ1mm大の白色粒を多く含む。19は薩摩焼（堂平窯）の甕で，口唇部に貝目をもつ。20は瓦質土器の坏で，表面に回転ナデ痕が残る。21は平瓦，22は丸瓦（コビキB）で内面に布痕が明瞭に残る。

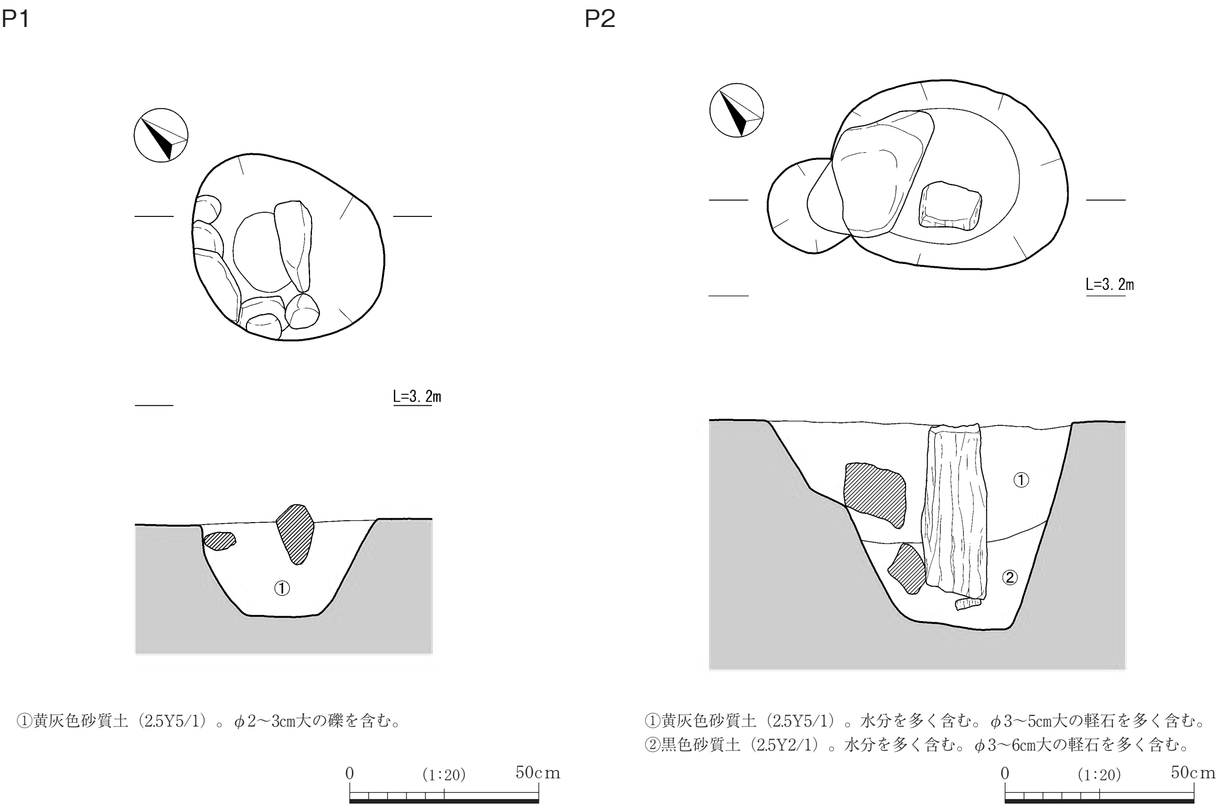
Ｐ６

検出状況　調査区２でSD１に切られて検出された。

形状・規模　大半は切られているため，全体は不明だが，



第10図　Ⅵ層遺構配置図



第11図　柱穴（P１・２）

約幅45cm×深さ約45cm＋の柱穴と想定される。

埋土　水気を含む黄灰色砂質土であった。

出土遺物　10×10×60cmの木柱（クリ材）が出土した。年代測定ではcal AD1519-1590の値が得られている。

Ｐ７

検出状況　調査区１で検出された。

形状・規模　大半は切られているため，全体は不明だが，約幅45cm×深さ約35cm＋の柱穴と想定される。

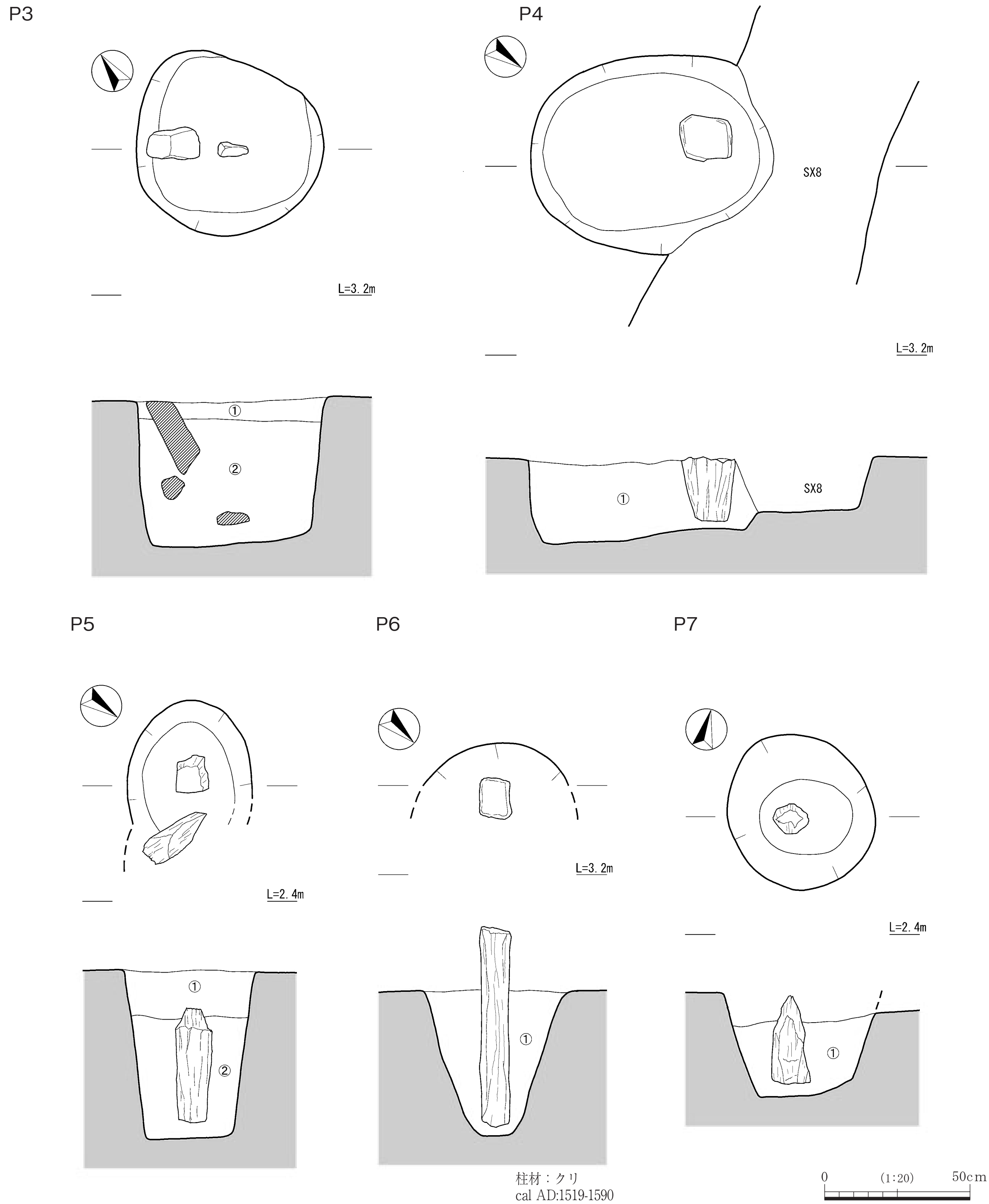
埋土　水気を含む黄灰色砂質土であった。

出土遺物　約10×10×60cmの焼けた木柱が出土した。

（２）溝状遺構

ＳＤ１（第14～23図）

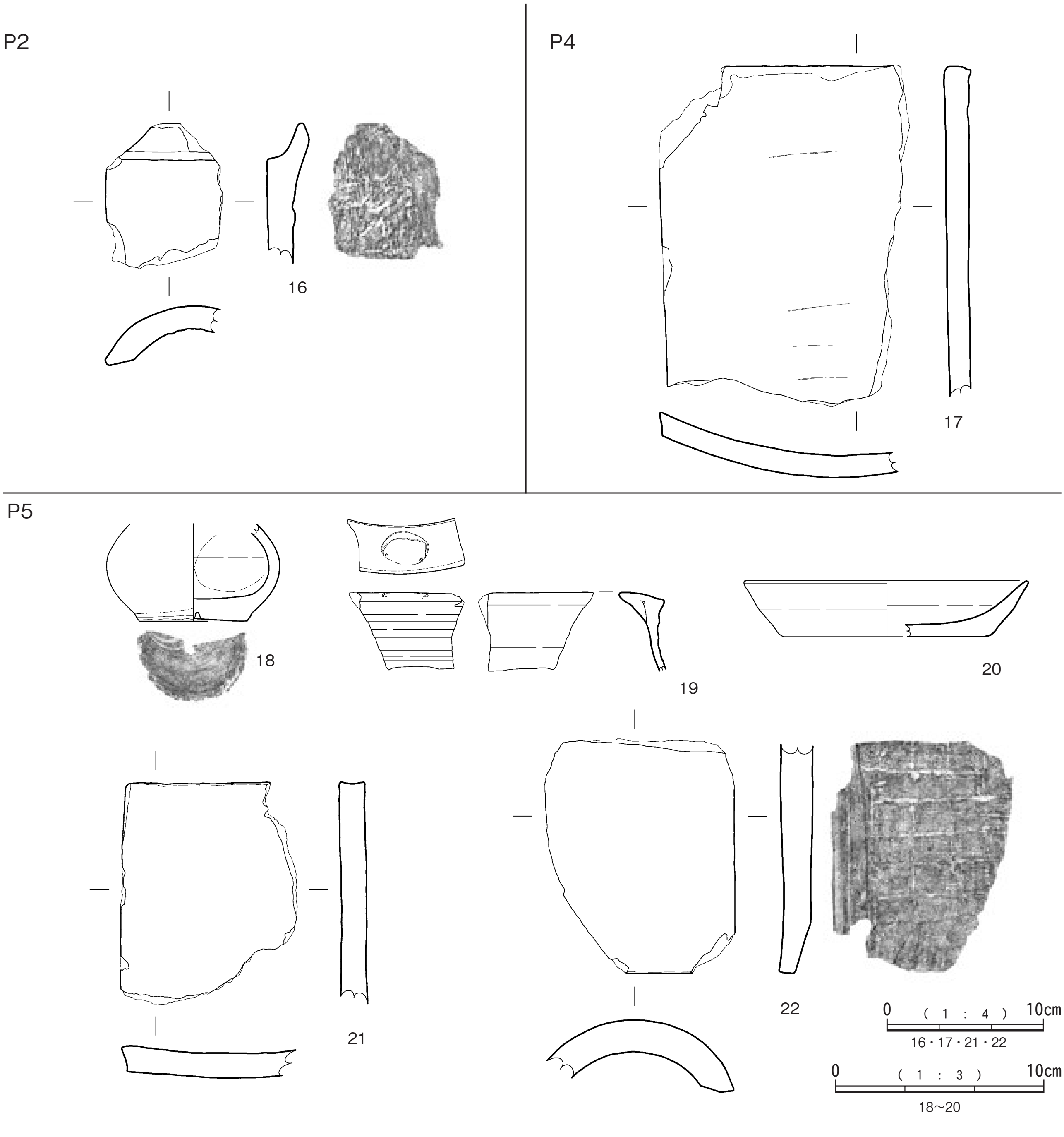
検出状況　調査区北側に東西方向に検出された。遺構の南側の一部は上層の遺構に切られている。



埋土注記

P3	①黄灰色砂質土（2.5Y5/1）。鉄分を多く含む。φ2～3cm大の礫を多く含む。
	②黄灰色砂質土（2.5Y4/1）。φ2～3cm大の軽石を少量含む。
P4	①黄灰色砂質土（2.5Y4/1）。鉄分を多く含む。φ0.5～1cm大の軽石含む。
P5	①黄灰色砂質土（2.5Y4/1）。鉄分を多く含む。φ1cm大の軽石含む。
	②黄灰色粘質土（2.5Y4/1）。
P6	①黄灰色砂質土（2.5Y1/4）。φ1cm大の軽石を多く含む。
P7	①黄灰色砂質土（10YR5/1）。φ1～2cm大の小礫を多く含む。

第12図　柱穴（P３～７）



第13図　P２・４・５出土遺物

形状・規模　調査区東西方向に約18mに渡り検出された。調査区で検出できたのは遺構の一部で幅は北側に延び，長さは南北方向に延びる。検出した幅は約40cm，深さは約40cmであった。

埋土　水分を多く含む暗灰色粘質土と黒色砂質土が堆積しており，下層の砂層（⑥～⑧）は湧水層であった。埋土中には木板や木片が全面に検出された。遺構中央付近も図化はしていないが，細かな木片は全面に検出された。

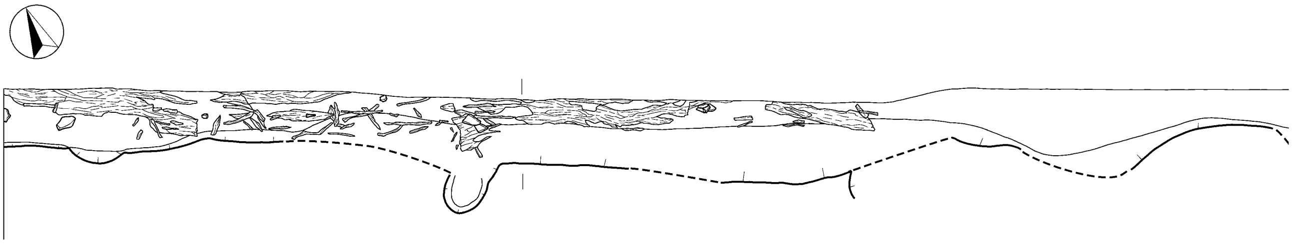
出土遺物

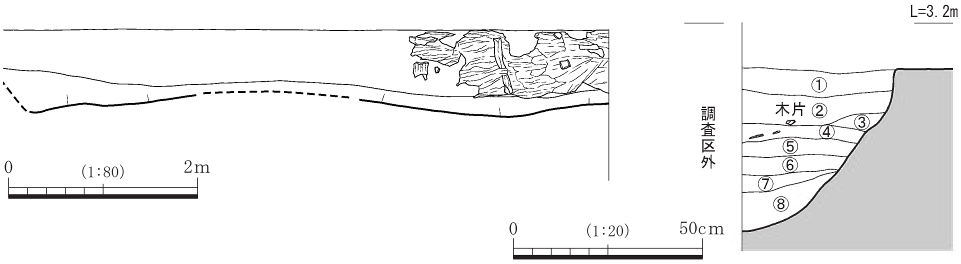
遺物は検出面約20cmまでに集中して出土した（埋土断面①～⑤）。木板・木片等とともに，下駄や漆製品や６面に面取りした断面六角形状の木杭列が出土した。また，木製品とともに，陶磁器や瓦，キセル，獣骨（シカ）等が出土した（獣骨は写真図版参照）。

23～30は磁器である。23～25は碗で，23・24は中国産で，24は璋州窯系と考えられ，外面に波濤文を持つ。25は肥前の碗で，施釉は総釉で畳付を釉剥ぎする。

26～28は皿である。27は中国産，26・28は初期伊万里で，26は透明釉が総釉で厚く施釉される。29・30は肥前産で，29は筒形碗である。内面には轆轤ケズリが明瞭に残る。30は仏飯器である。

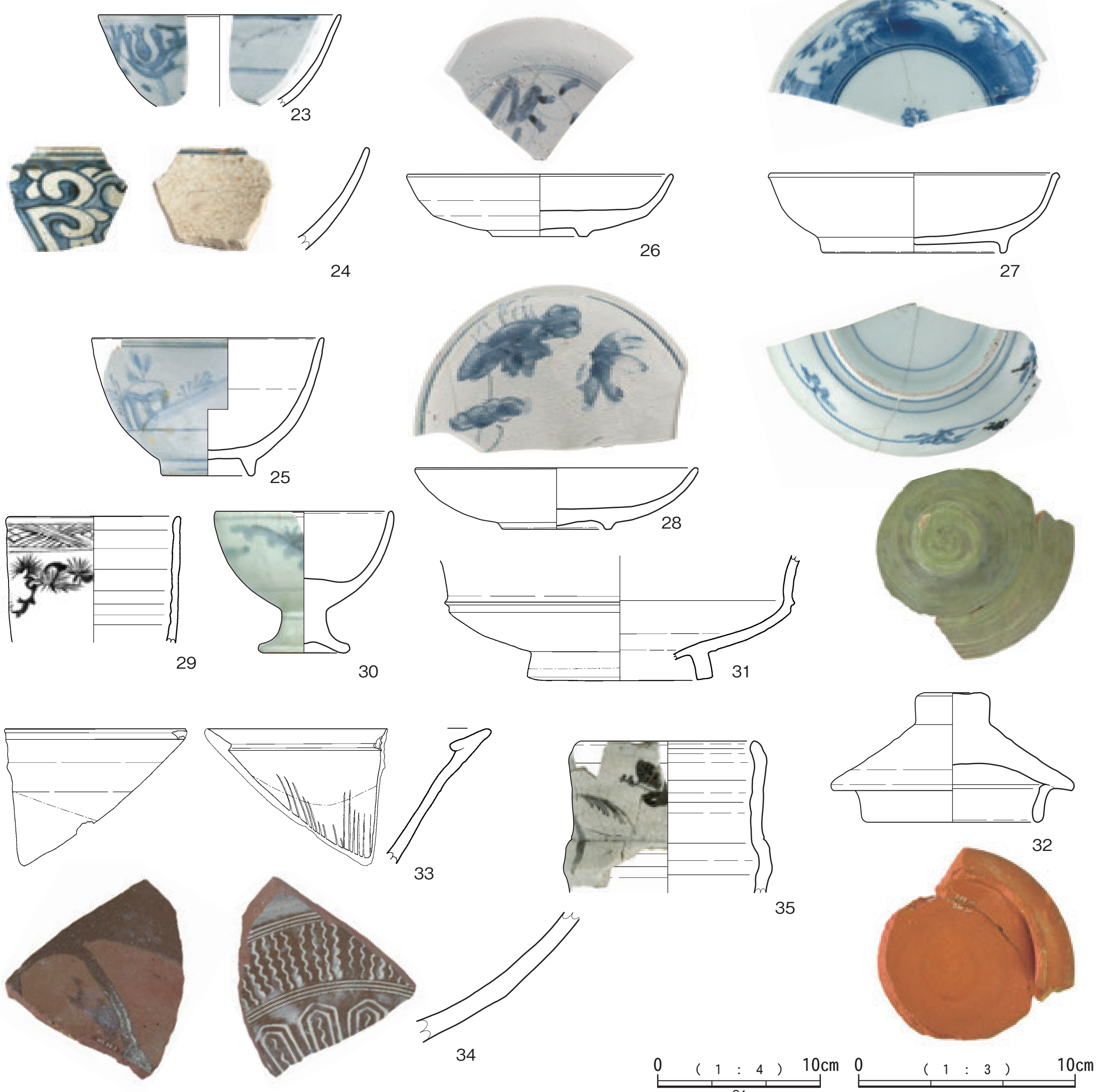
31～51は陶器である。31～34は肥前系の陶器で，33は



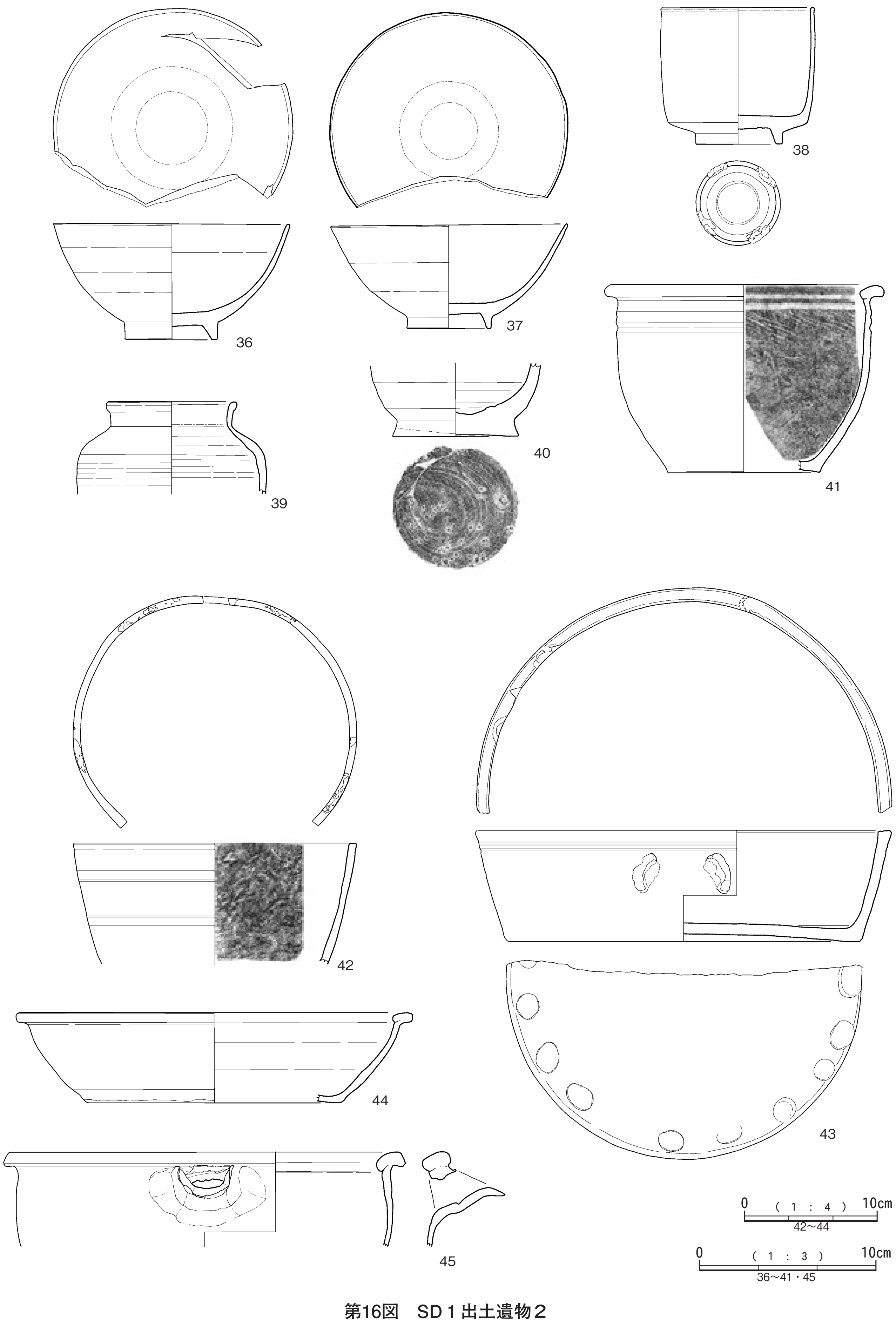


①暗灰色粘質土（N3/　）,φ3cm大の軽石含む.
②黒褐色砂質土（2.5Y3/1））,木片含む.φ5～10cm大の軽石少量含む.
③黒色砂質土（2.5Y2/1））,φ3～5cm大の礫含む.
④黒色粘質土（10YR2/1））,木片を多く含む.
⑤黒色砂（2.5YR2/1））,水分多く含む.
⑥灰色砂（5Y4/　）．湧水.
⑦黒色砂（2.5YR2/1）．湧水.
⑧黒色砂（7.5Y2/1）．湧水.

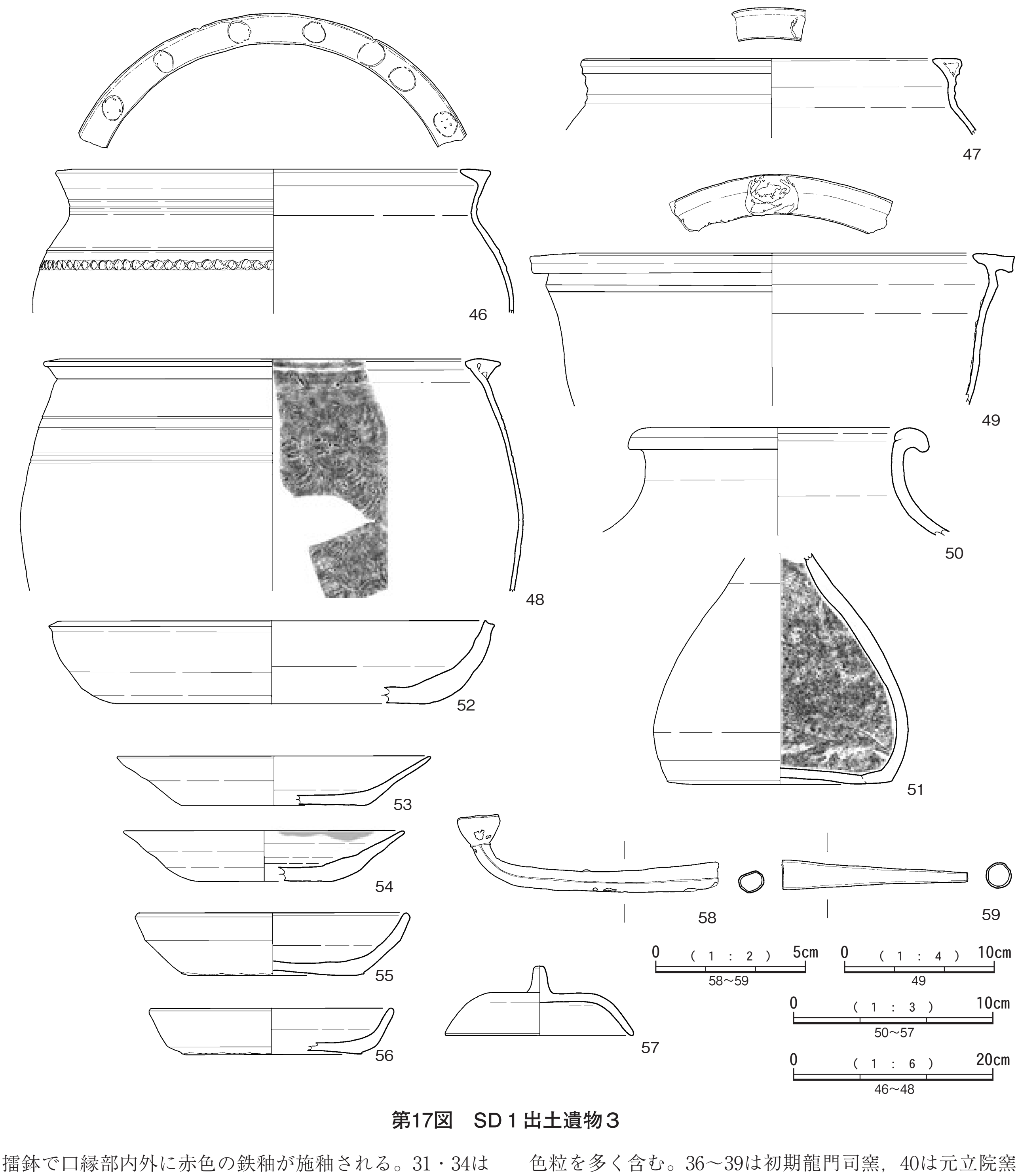
第14図　SD 1



第15図　SD 1 出土遺物 1



第16図　SD１出土遺物２



第17図　SD１出土遺物３

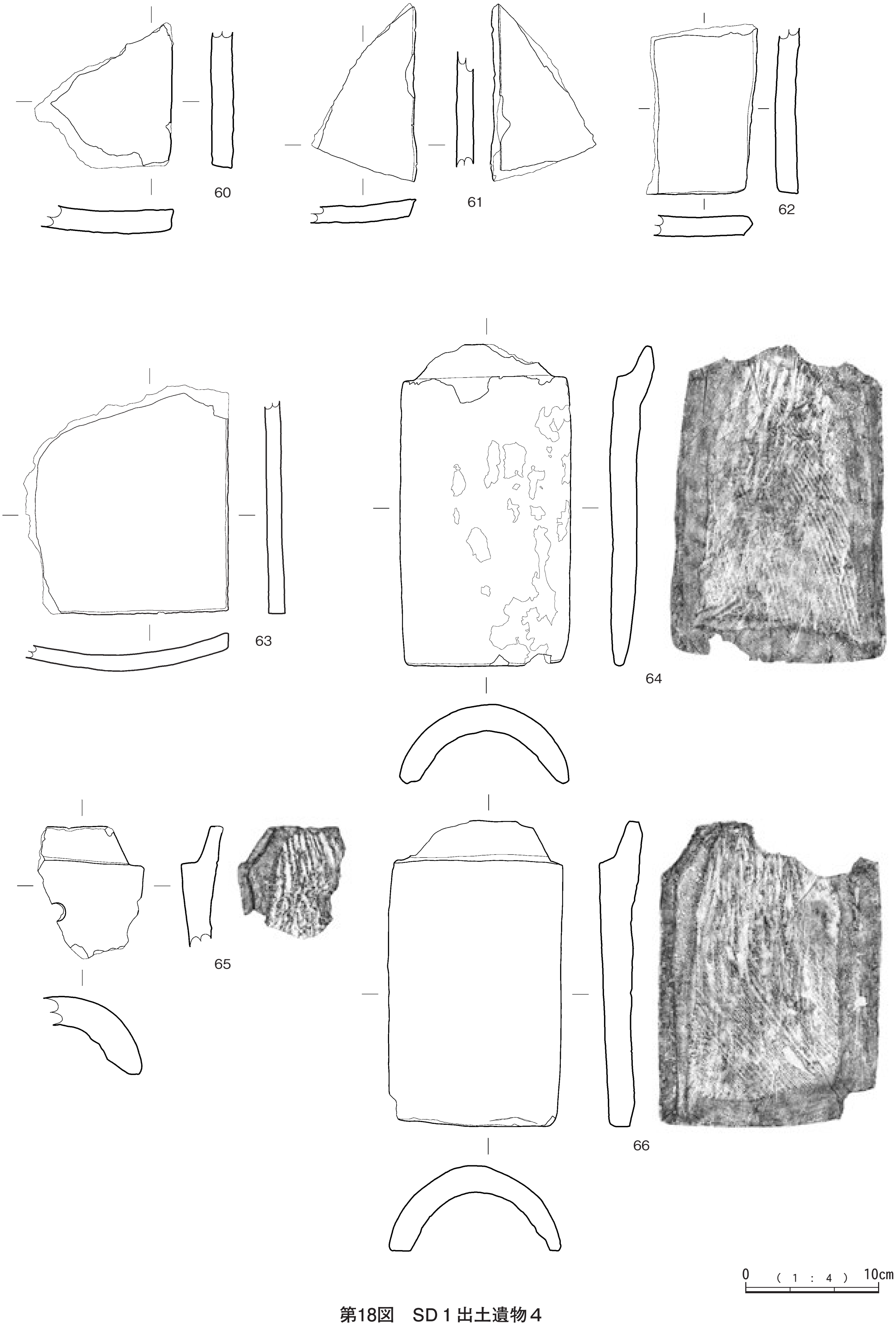
擂鉢で口縁部内外に赤色の鉄釉が施釉される。31・34は鉢であり，34は内面に化粧土で象嵌（三島手）が施される。32は蓋で外面に銅緑釉が施釉される。35は志野焼と考えられる方形の向付である。鉄絵の草花文をもち，透明釉が厚く施釉され，貫入が入る。

36〜40は，黄・茶飴釉が施釉される加治木・姶良系の陶器である。36・37は碗で，総釉で内面見込みが蛇の目釉剥ぎである。38は筒形碗で，口唇部と畳付が釉剥ぎで，畳付には４か所砂目が残る。39は壺で，非常に薄手で表面には轆轤目を明瞭に残す（山元窯か）。

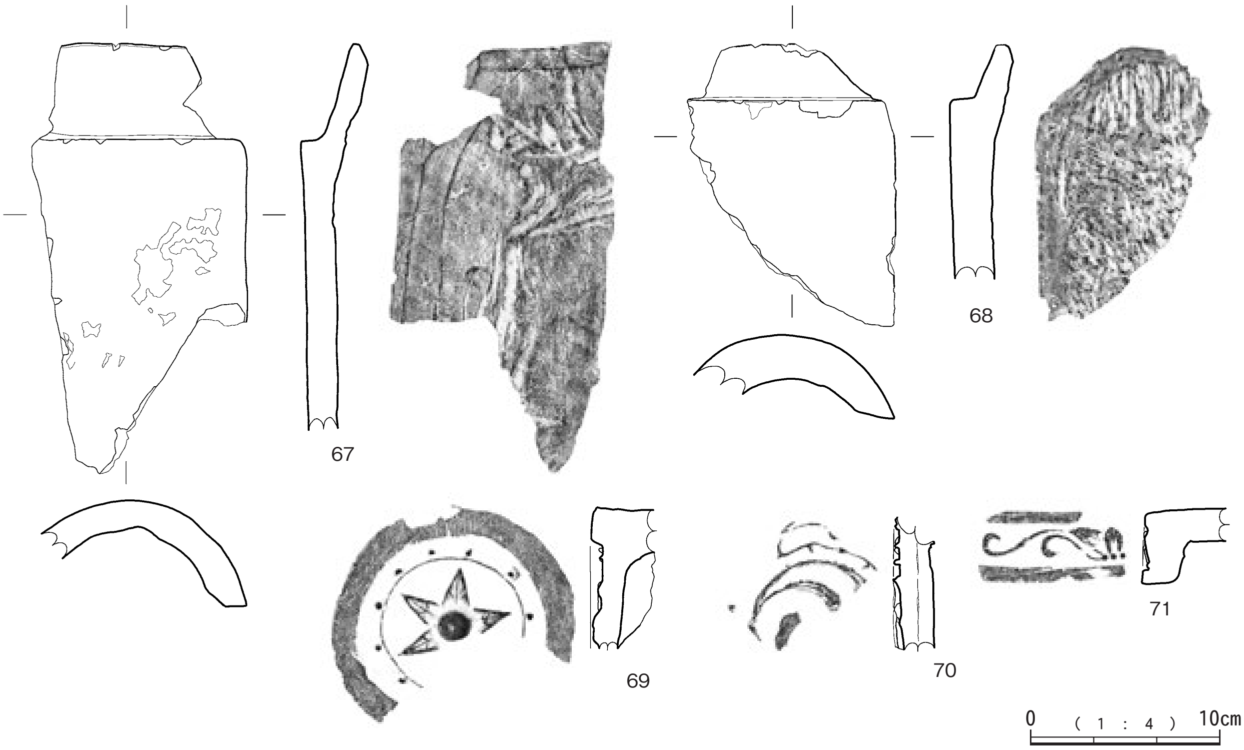
40は仏花瓶で，胎土はやや黒味を帯びる灰白色で，黒色粒を多く含む。36〜39は初期龍門司窯，40は元立院窯のものと考えられる。

41〜51は薩摩焼（堂平窯）である。42〜45は鉢で，灰釉がかかる。口唇部や底部には貝目が残るものが多い。41は小型の鉢で，内外面にタタキ痕と当て具痕後のナデ調整がみられる。42は内面に当て具痕がわずかに残る。44は蓋の可能性もある。

46〜49は甕である。48以外は口唇部には貝目が残る。46は口縁部を内側に，47・48は外側に折り曲げて成形する。48は内面に同心円当て具痕を明瞭に残す。50は壺，51は徳利である。51は内面に当て具痕，絞り痕がみられ，



第18図　SD１出土遺物４



第19図　SD１出土遺物５

外面には横方向のナデ調整が明瞭に残る。52は土師質の焙烙で，二次焼成を受けている。53～56は土師器の皿，57は蓋である。53・56・57は強い二次焼成を受け，一部赤色・黒色に変色している。54は灯明皿である。

58，59はキセルで，表面には金膜が残存している。なお，その他には碁石や鹿の上腕骨や脛骨等の獣骨も多く出土している（写真図版参照）。

60～71は瓦である。60～63は平瓦である。64～68は丸瓦である。64・66は胎土には滑石粒や角閃石が多く含まれる。コビキAに類似する斜め方向の筋もみられる。67は玉線長が約5.2㎝と長めで，胎土には白色粒を多く含む。

69は軒丸瓦である。瓦当径が約12.8㎝で，連珠が小ぶりで橘文をもつ。70は軒丸瓦もしくは鬼瓦である。瓦当に細い草花文と思われる文様を成形している。胎土にはφ２㎜大の赤色礫を多く含む。71は上向三葉文をもつ軒平瓦である。顎貼り付けで，顎裏面をナデで面取りしている。

杭列・木製品

埋土からは多くの木製品が出土した。遺構全面に大小多くの木片・竹片が確認された。残存状況は良好なものも多かったが，特に残存状況が良いものを図化した。

遺構内，調査区北側壁に沿って出土した杭は16本で，いずれも表面を６面に面取りしていた（断面図にはその内14本図化）。72～77は途中折れてはいるが，非常に良好に残存していた。長いものでは約100㎝近く（77），上部が焼けて炭化していた。厚さは概ね３～５㎝大で，杭の樹種はクマシデやクスノキであった。杭の年代測定では，77以外は16世紀初頭の測定結果が得られている（77は16世紀中頃）。

78～80は部材で，81はスギ製の閂と考えられる。82～85は下駄である。84は造り出し歯の高下駄で，85はヒノキ材の露卯の差歯下駄である。

86は漆塗の蓋（アスナロ材）で，漆は薄く剥落が著しい。87～89は黒漆碗で，87は胴部に草花文が施されている。漆製品は残存状況が良好ではなく，図化できなかった赤漆碗の小片などもみられた。（木製品の樹種等の詳細は第４章を参照）

（３）瓦溜１（第24図）

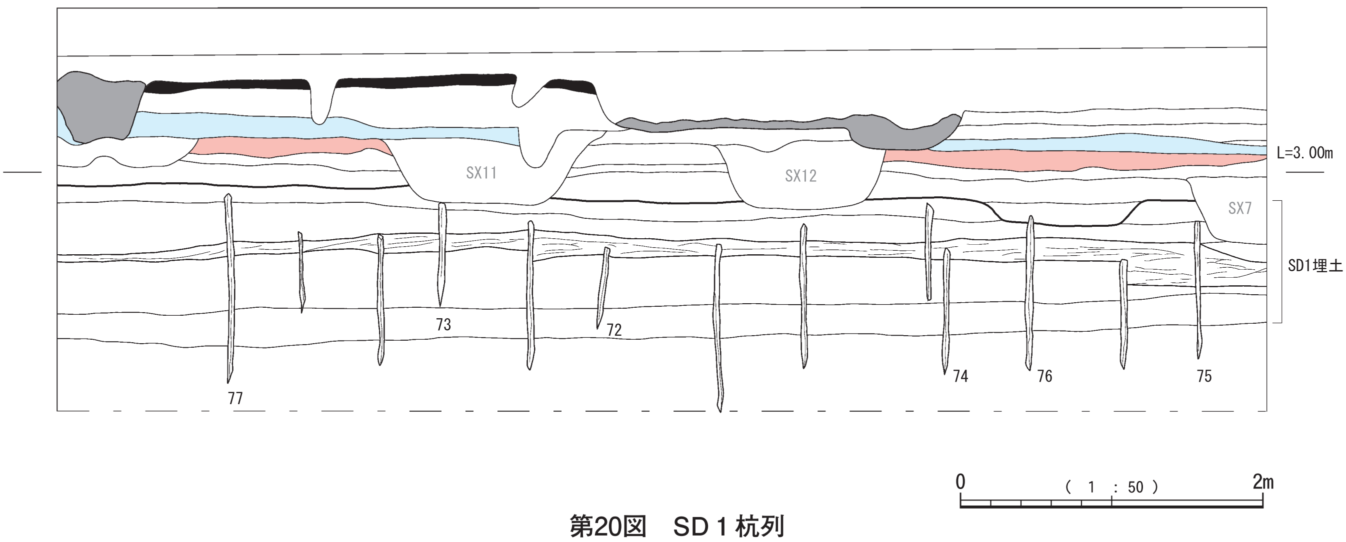
検出状況　ＳＤ1の南西側でＳＤ1を切って検出された。瓦が多く出土したため，瓦溜としているが瓦片とともに木片や棕櫚縄（写真図版参照）等も出土している。

形状・規模　約２ｍの不定形を呈す。深さは約10㎝程度であった。

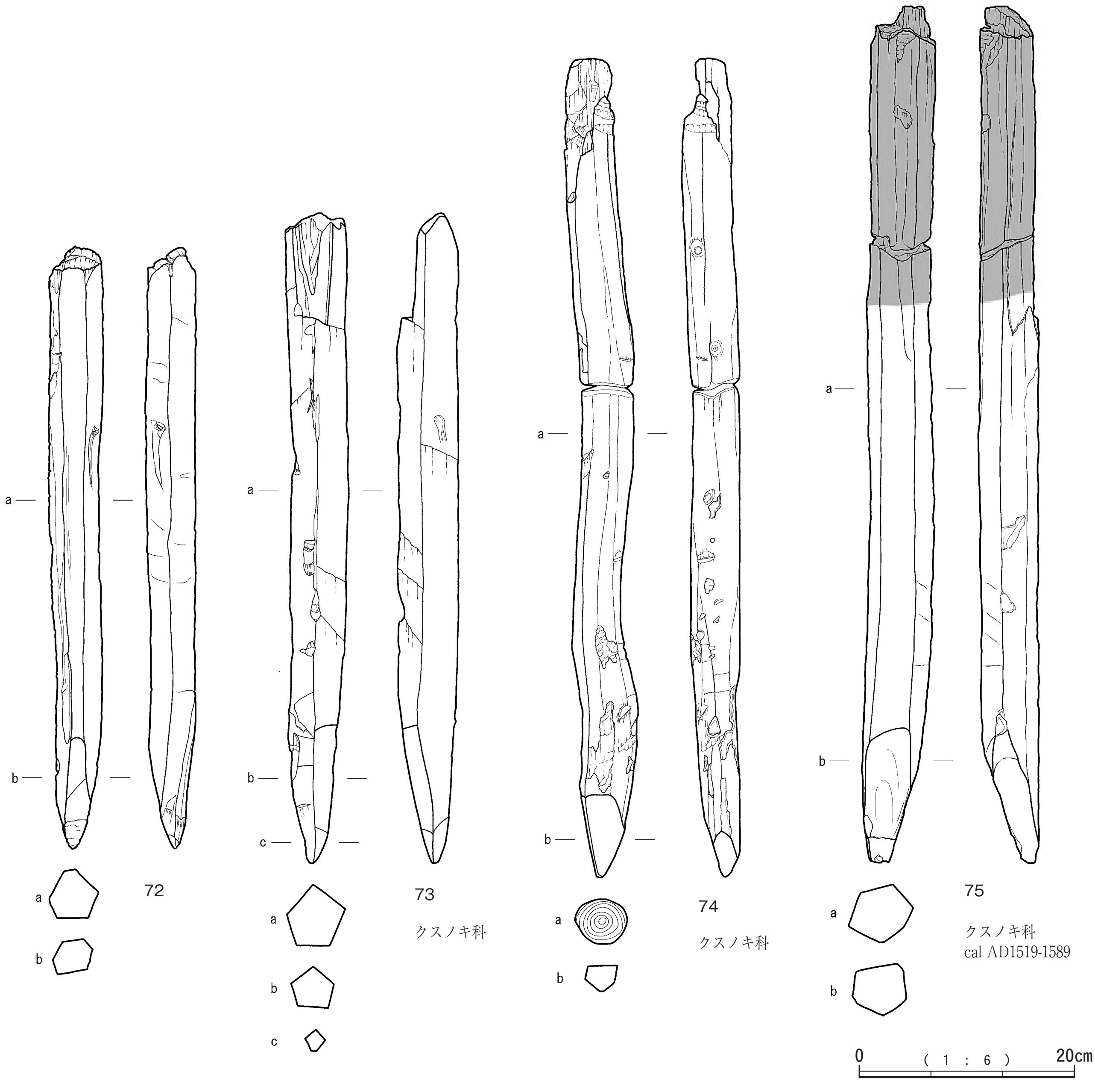
出土遺物

瓦や陶磁器，木片，棕櫚縄等が出土した。陶磁器は小片のため，図化していない。

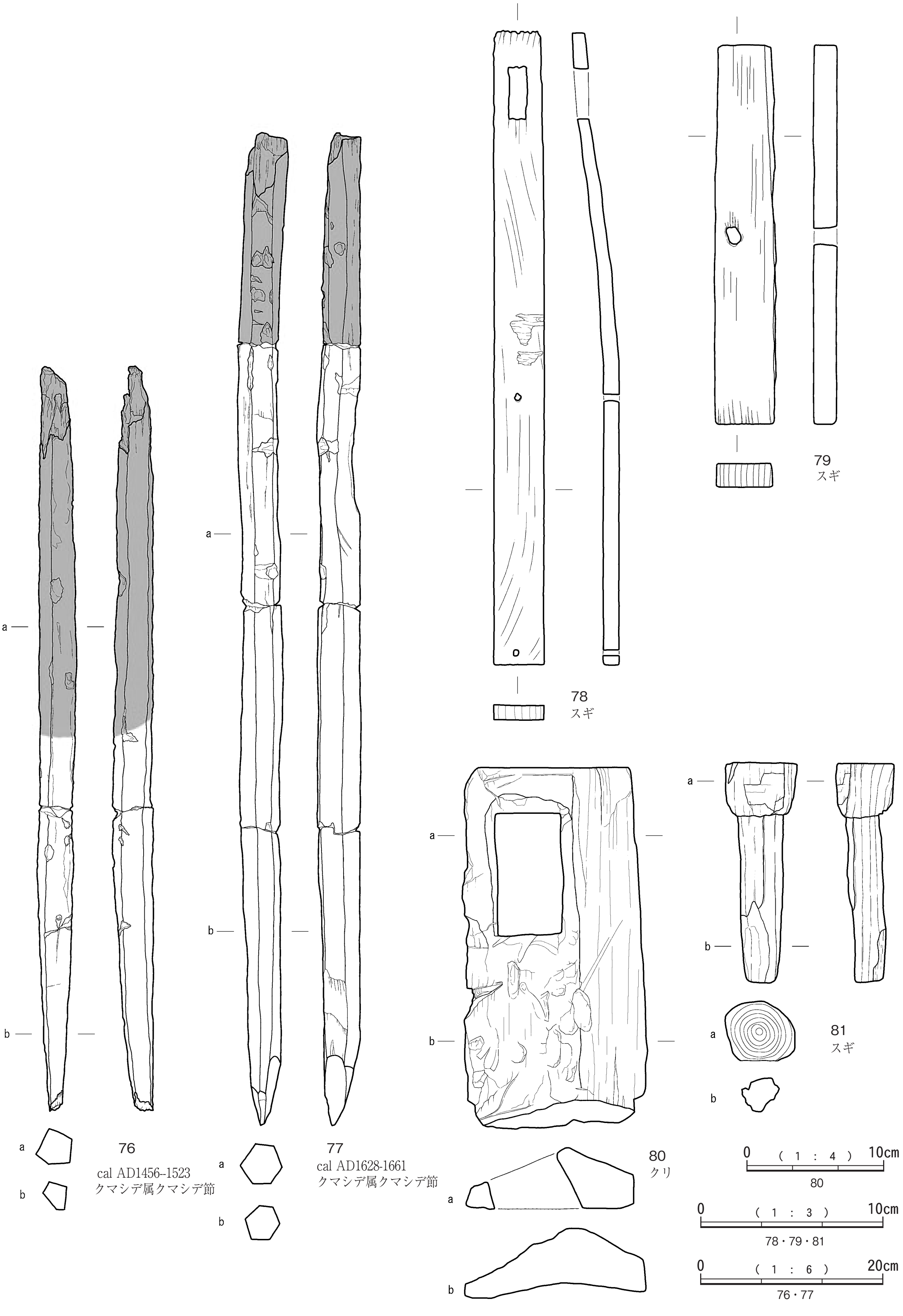
90～94は瓦である。90～92は丸瓦，93は右巻巴文の軒丸瓦である。94は鬼瓦と考えられる。



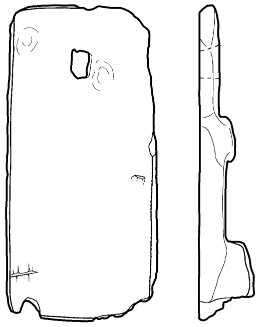
第20図　SD１杭列



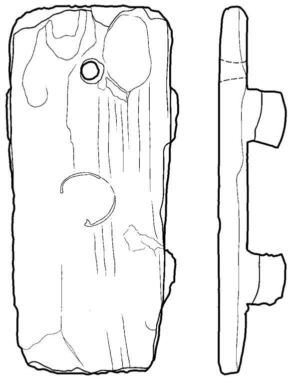
第21図　SD１杭列　杭１



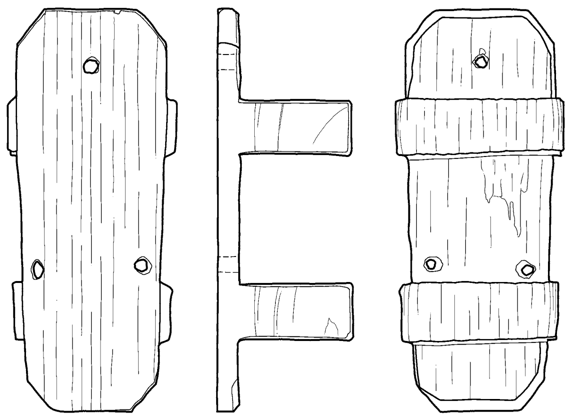
第22図　SD１出土杭・木製品



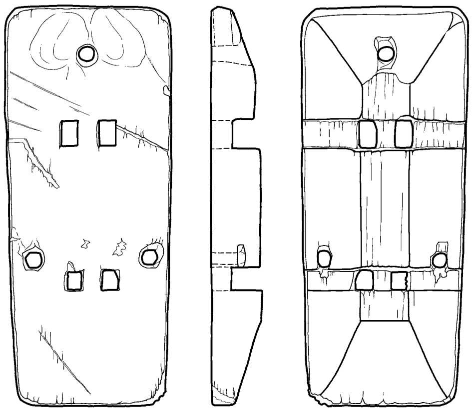
82
ヌルデ



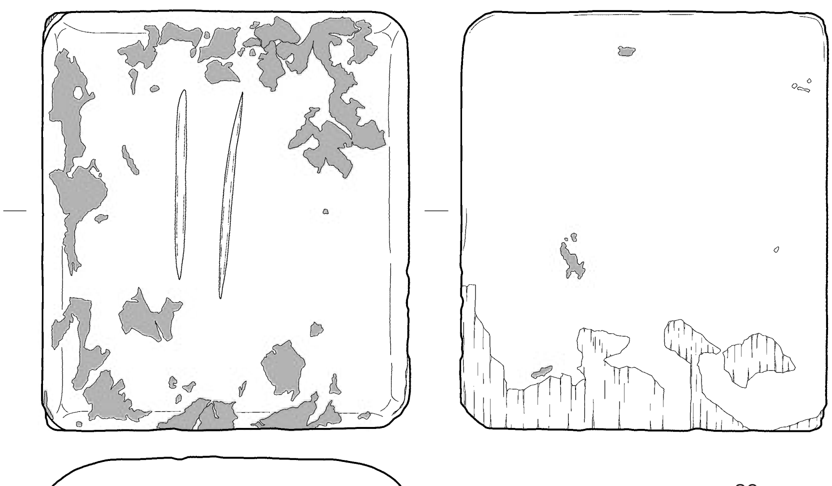
83
スギ



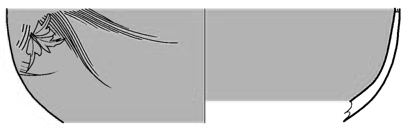
84
スギ



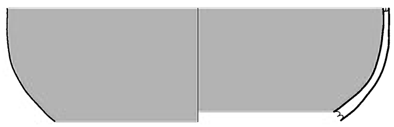
85
ヒノキ



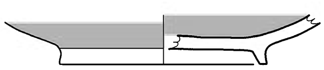
86
アスナロ



87



88

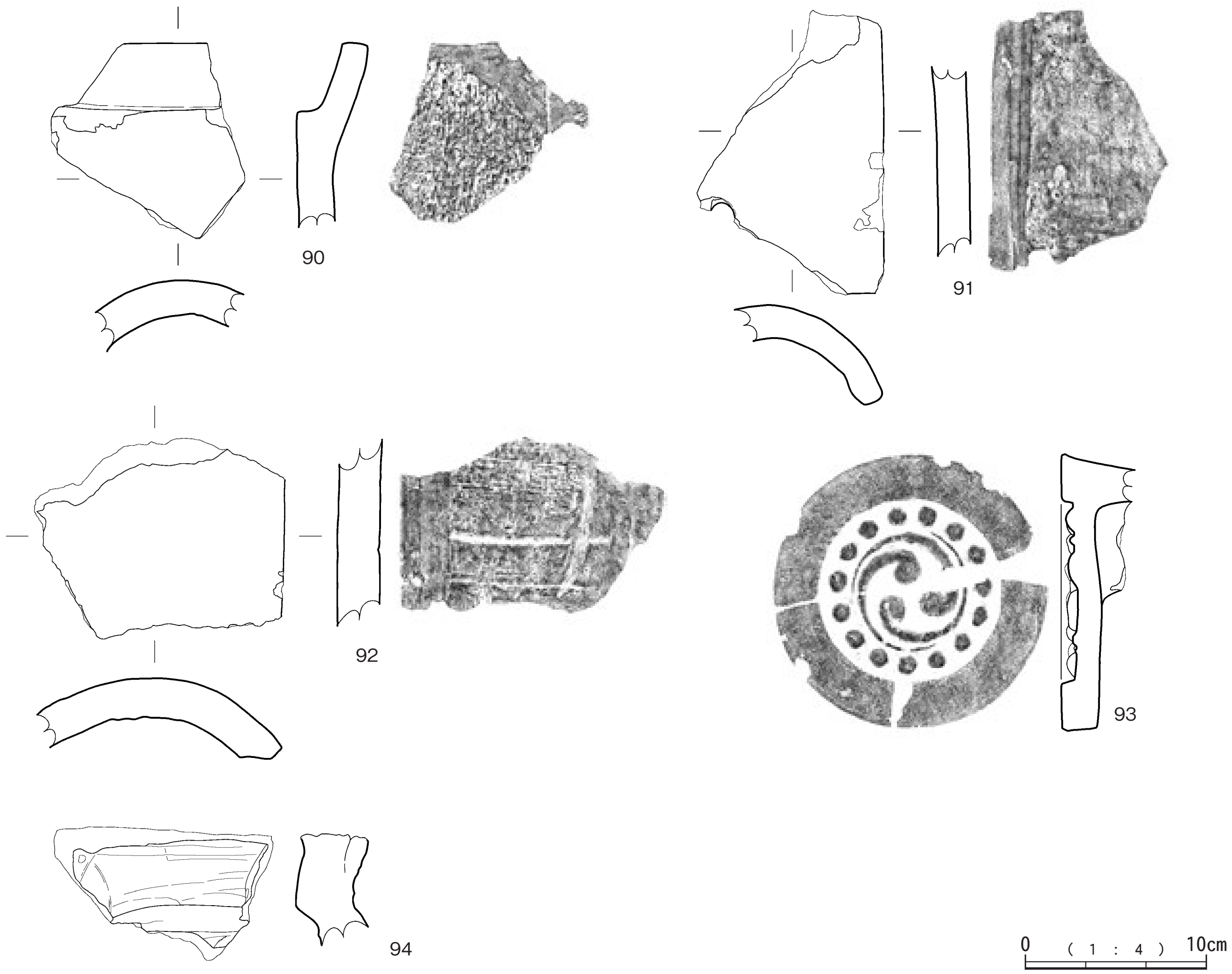


89

0 （1：4） 10cm
82～85

0 （1：3） 10cm
86～89

第23図　SD 1 出土木製品



第24図　Ⅵ層瓦溜１出土遺物

３　Ⅴ層（第25～42図）

Ⅳb層の硬質な鉄分沈殿層下に検出した暗褐色粘質土（Ⅴ層）で，多くの遺構を検出した。溝状遺構のほか，溝状の不明遺構が複数確認された。その他，瓦溜やピット群も検出された。

（1）溝状遺構

SD２（第26～28図）

検出状況　調査区１の中央部で東西方向に延びる形で検出された。

形状・規模　長さ約6.6ｍ，幅約60㎝で深さ15㎝である。溝の西部はＳＸ３・５によって切られており，東側に調査区外に延びる。

出土遺物　被熱を受けた拳大の礫のほか，陶磁器・土師器等が出土した。

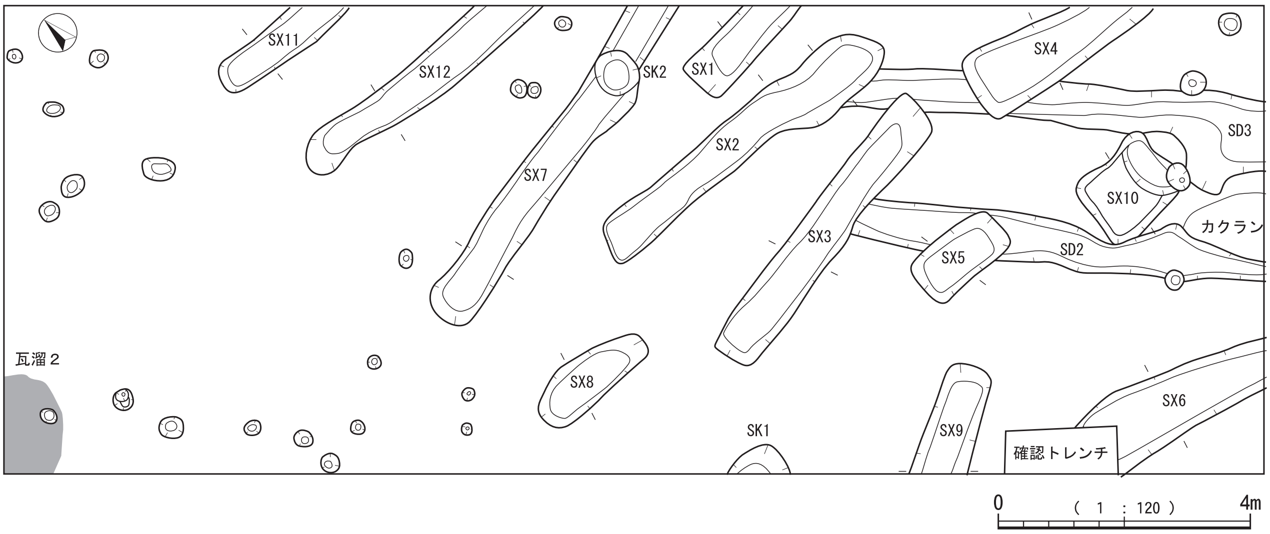
95～99は磁器である。95は饅頭心の碗で高台内面に銘款がある。96・97は皿で，97は初期伊万里である。99は肥前系の壺で内面には釉垂れがみられ，畳付は釉剥ぎする。98は唐草文の蓋で，庇部分のみ露胎する。

100～102は肥前系の陶器である。100は内面に緑銅釉と鉄釉の刷毛目で施文される。101は内野山系の蛇の目釉剥ぎの碗もしくは皿である。外面は透明釉が胴部下位まで施釉される。102は植木鉢で口唇部に縄目状に装飾され，外面には線描の草花文と考えられる痕跡がみられる。

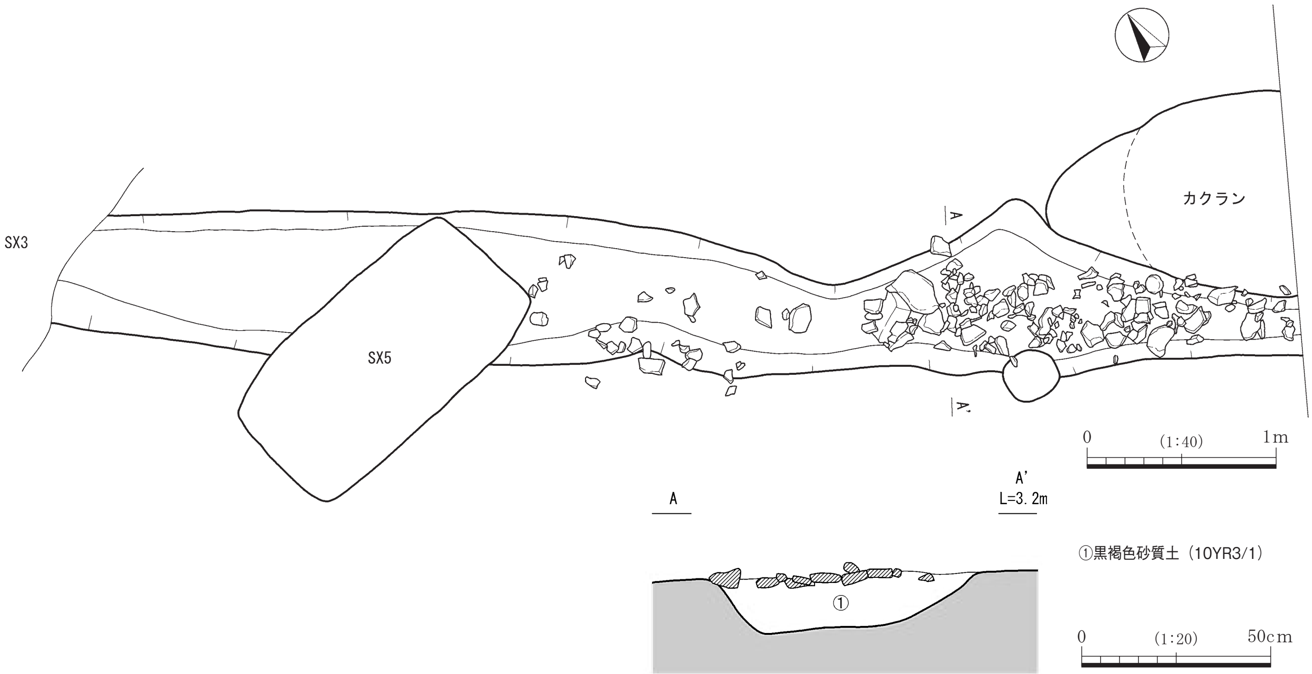
103～106は竪野窯系の白薩摩の陶器である。103は磁器に近く，透明釉の総釉で貫入が入り，畳付は釉剥ぎする。104・105は胴部に千鳥文に近い文様をもつ。この文様は千鳥文が一定化する前の文様の可能性も考えられる。106は口唇部に鉄釉をもつ皿である。

107～117は加治木・姶良系の陶器である。107は半陶半磁の透明釉の碗である。108・109は轆轤目を明瞭に残し，内面見込みに４か所の目跡が残る山元窯系の碗である。108は総釉だが，109は高台内面が露胎する。

111は内面・外面に目跡が残る皿で，外面胴部下位～底部は露胎する。113は轆轤目を明瞭に残す蛇の目釉剥ぎの鉢で，表面は白濁した釉薬がかかっているようにみえるが，焼成不良によるものである。胎土は非常に精緻



第25図　遺構配置図（Ⅴ層面検出）



第26図　SD２

で不純物が少ない。山元窯出土品にも類例がみられる。

114は壺で口唇部のみ釉剥ぎする。115は風炉と思われる。116・117は灯立で内面は露出し，外面に茶・黄色飴釉が施釉される。118～120は瓦質土器で，118は焙烙，119は火入，120は香炉である。121～123は土師器皿である。122は灯明皿で，強い二次焼成を受けている。

124は平瓦，125は丸瓦である。124はやや土師質で胎土には石英・角閃石・赤色粒を多く含む。

SD３（第29～31図）

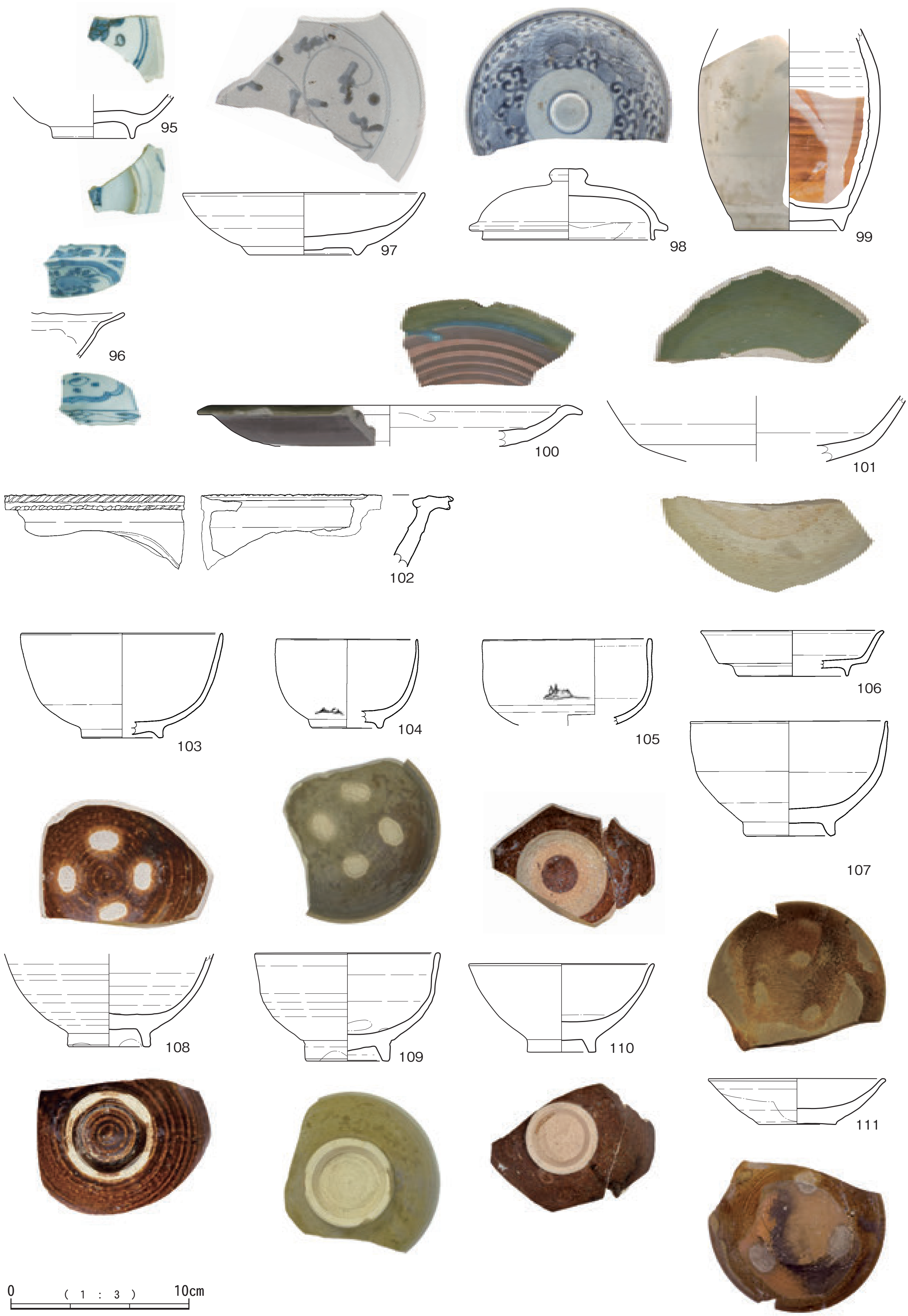
検出状況　調査区１の中央部で東西方向に延びSD２と並行する形で検出された。

形状・規模　長さ約6.6m，幅約70cmで深さ約15cmである。

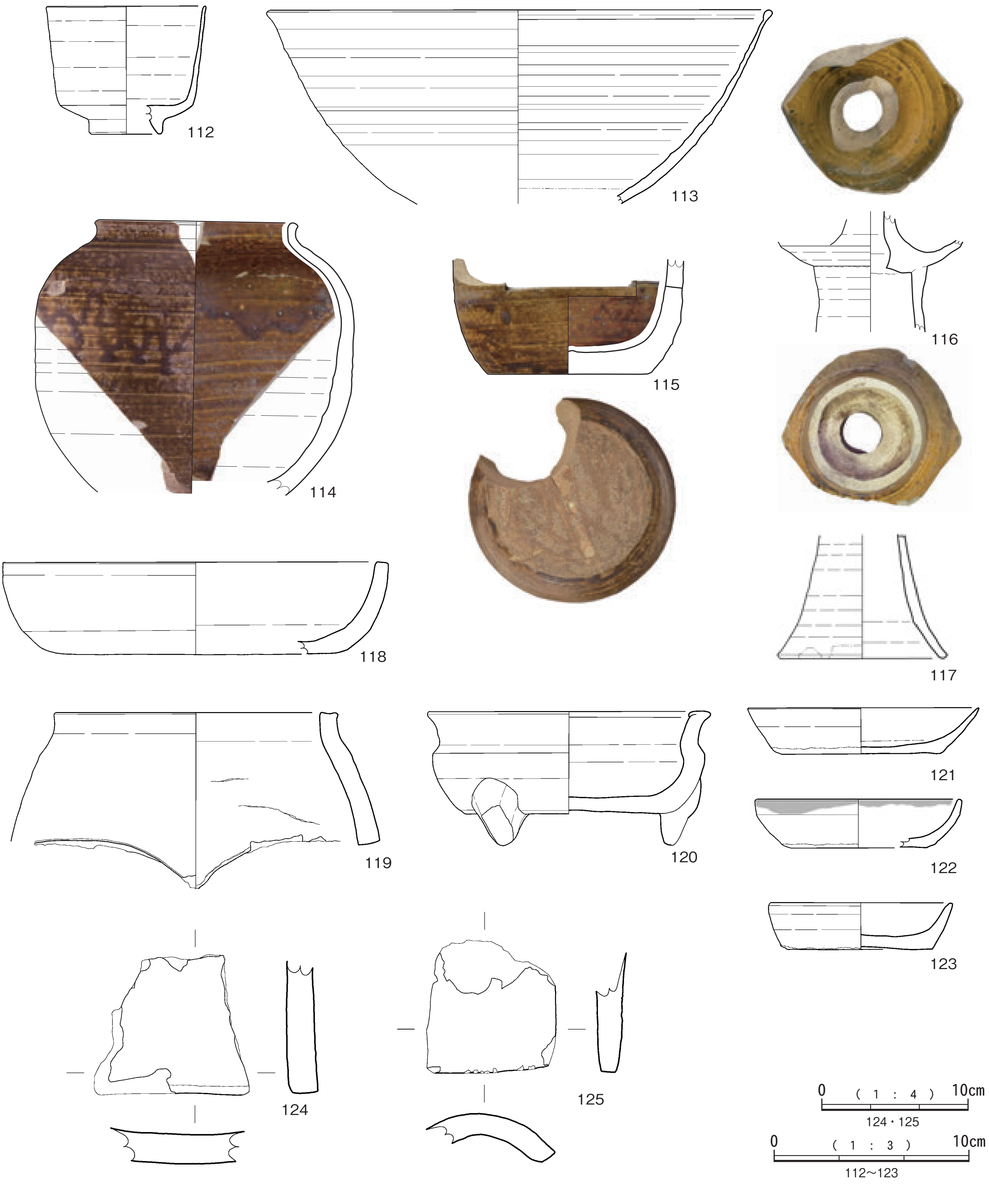
出土遺物　被熱を受けた拳大の礫のほか，陶磁器・土師器・瓦片等のほか，シカの脛骨や尺骨等が出土した。

126～128は磁器である。126は口縁が稜花で内面見込み・高台に銘款をもつ。131～133は竪野窯系の磁器（白薩摩）である。133は煎茶碗である。134は加治木・始良系（山元窯）の磁器碗で，総釉で内面見込みに目跡を残す。130・135～137は，肥前系の陶器である。137は外反する口縁部をもつ皿で，内面見込みと畳付に砂目が付着している。135・136は擂鉢で，口縁部のみに鉄釉が施釉される。

138～142は加治木・始良系陶器である。138・139は飴釉，140・141は暗い褐色の鉄釉が施釉される碗である。143は皿で，見込みと底部に目跡が残る。142は香炉で，胎土には黒色粒や赤色粒が多く含まれる。



第27図　SD２出土遺物１

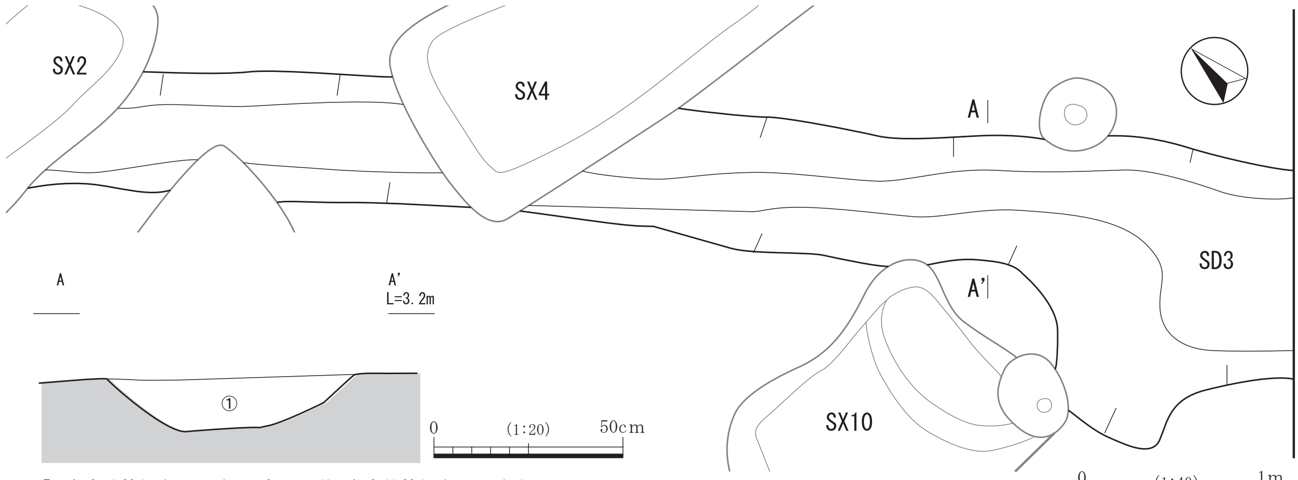


第28図　SD２出土遺物２

144・145は堂平窯の薩摩焼である。144は擂鉢で口縁部を外方向に折り曲げ成形し，口唇部には貝目を残す。145は灰釉の把手がつく蓋である。

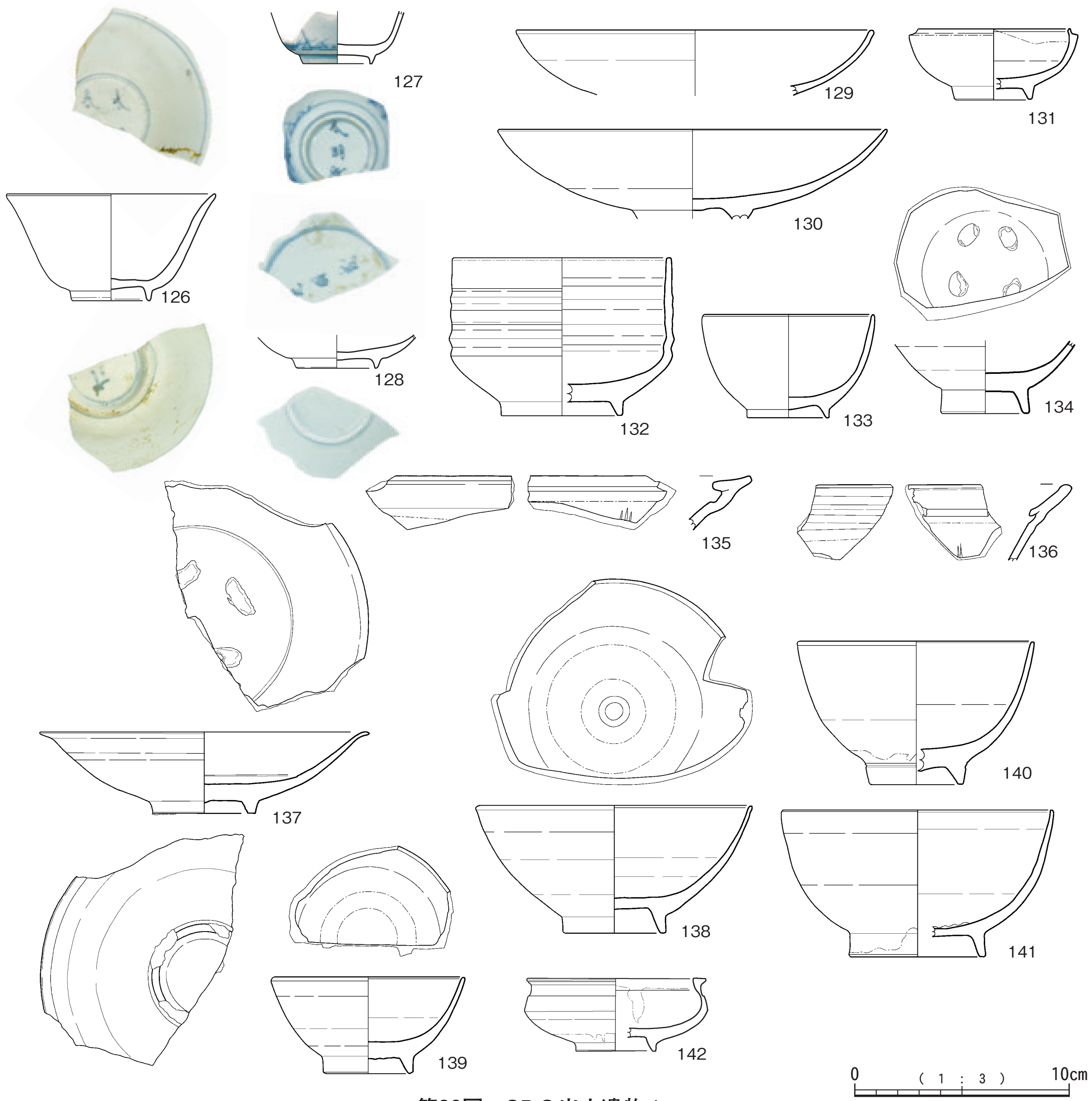
146・147は土師器の皿である。146は二次焼成を受け，部分的に赤色に変色している。148はキセルである。

149～154は瓦である。149・150は平瓦で，150は薄手で縁面を面取りしている。151～153は丸瓦である。152は小ぶりで，153は内面に布痕と斜め方向の筋が残り，胎土には石英が多く含む。154は橘文の軒丸瓦で，SD１出土の69と同笵の可能性がある。

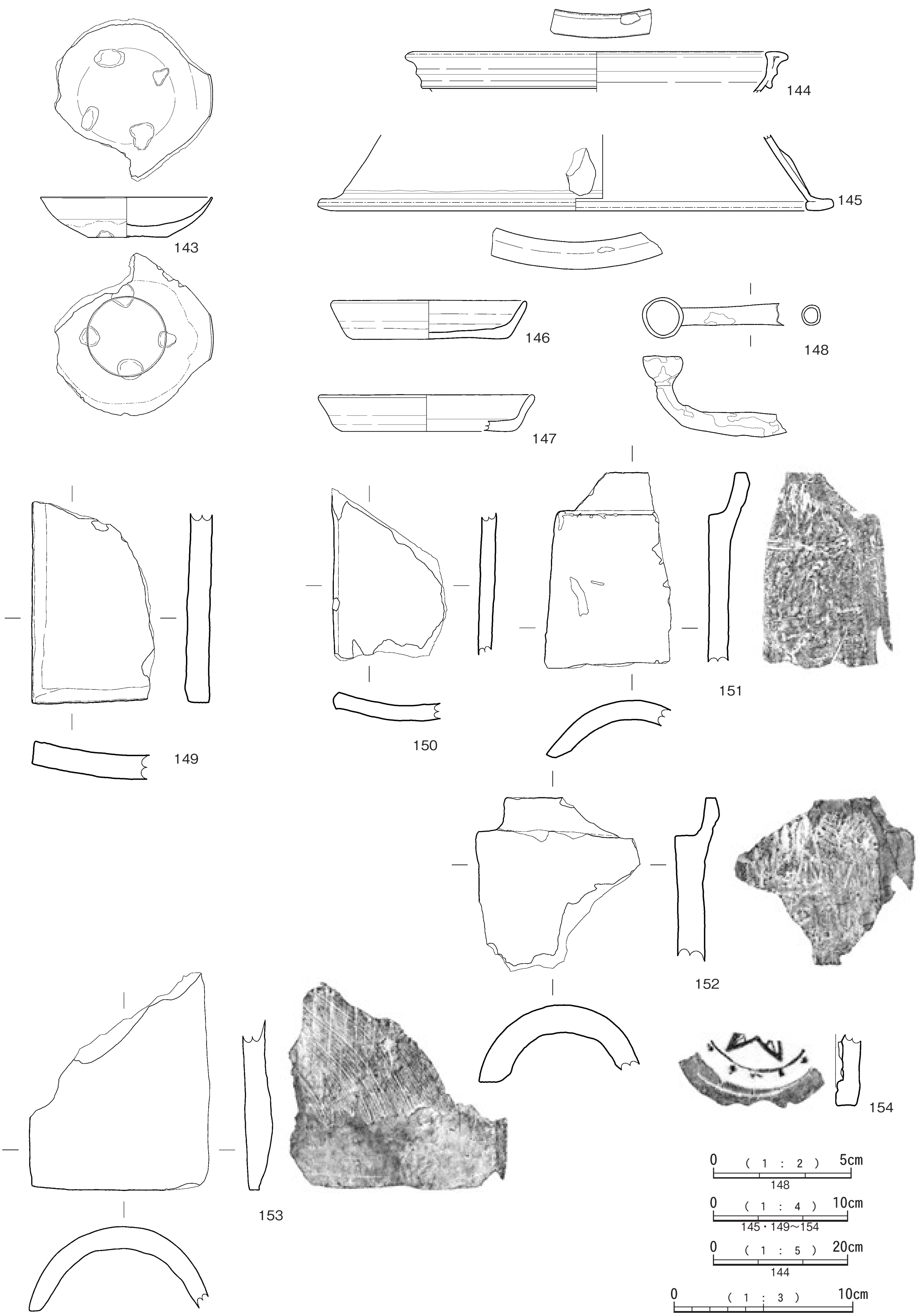


①黒褐色砂質土（10YR3/1）にブロック状の褐色粘質土（10YR4/4）混じる

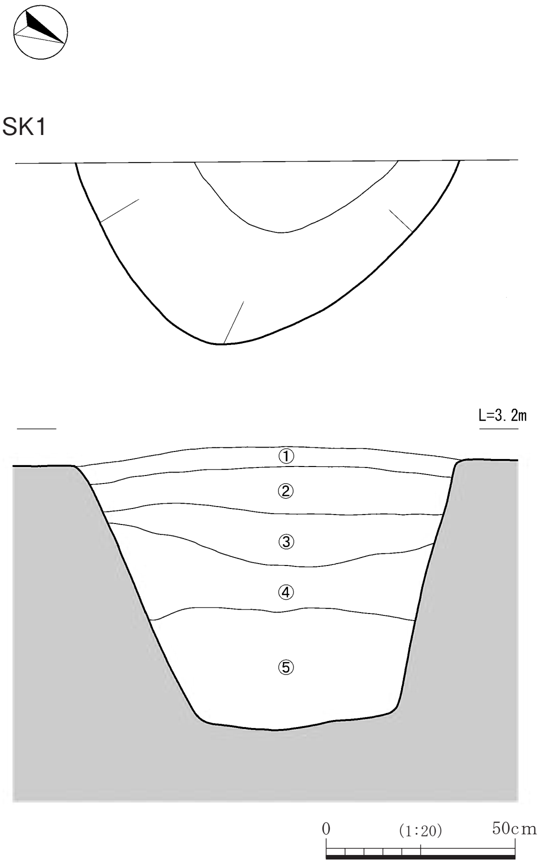
第29図　SD３



第30図　SD３出土遺物１

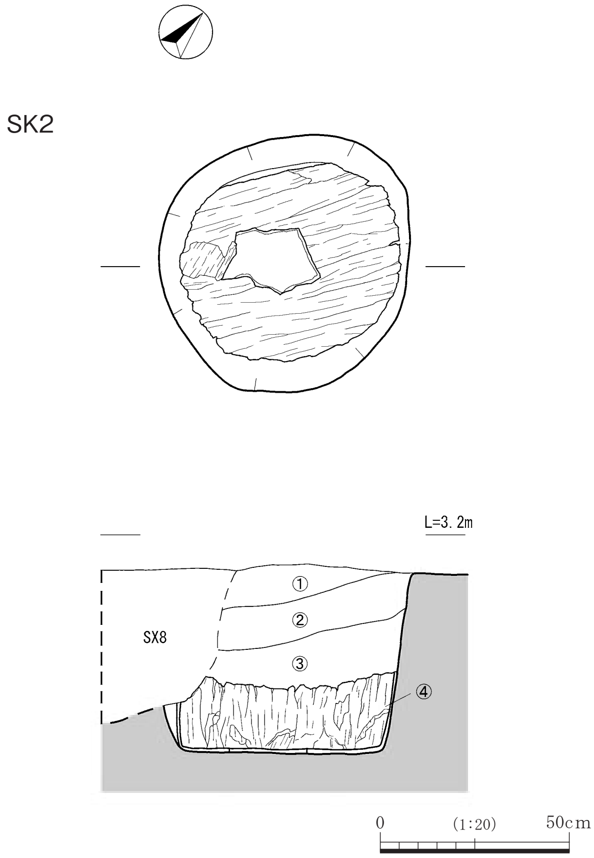


第31図　SD３出土遺物２

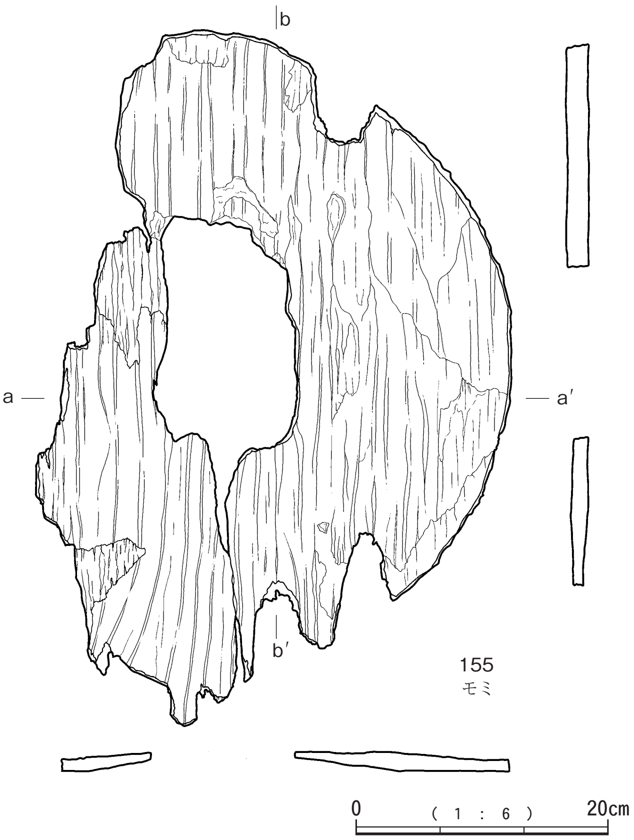


①灰黄褐色砂質土（10YR4/2）
②灰黄褐色砂質土（10YR4/2）ベースににぶい黄褐色粘質土（10YR5/3）ブロック混じる。
③褐灰色砂質土（10YR5/1）
④褐灰色砂質土（10YR5/1）ベースににぶい黄褐色粘質土（10YR5/3）ブロック混じる。
⑤にぶい黄褐色粘質土（10YR5/3）ベースに褐灰色砂質土（10YR5/1）混じる。

第32図　SK1



①赤褐色土（2.5YR4/6）。焼土。非常に硬く，炭化物を多く含む。
②にぶい褐色粘質土（7.5YR5/3）で炭化物を多く含む。
③赤褐色土（5YR4/2）ベースで暗褐土焼土（5YR3/2）混じり。炭化物多く含む。
④褐灰色砂質土（10YR4/1）に炭化物を多く含む。砂より炭化物の方が多い。（木板には炭化物が多く付着する。）



第33図　SK２・出土桶板

（２）土坑

SK１（第32図）

検出状況　調査区１の南で検出された。

形状・規模　幅約100㎝×50㎝で深さ約75㎝である。遺構が調査区南側に延びるため全形が不明だが，不明遺構（SX）のような溝状になる可能性も考えられる。

出土遺物　遺物は出土していない。

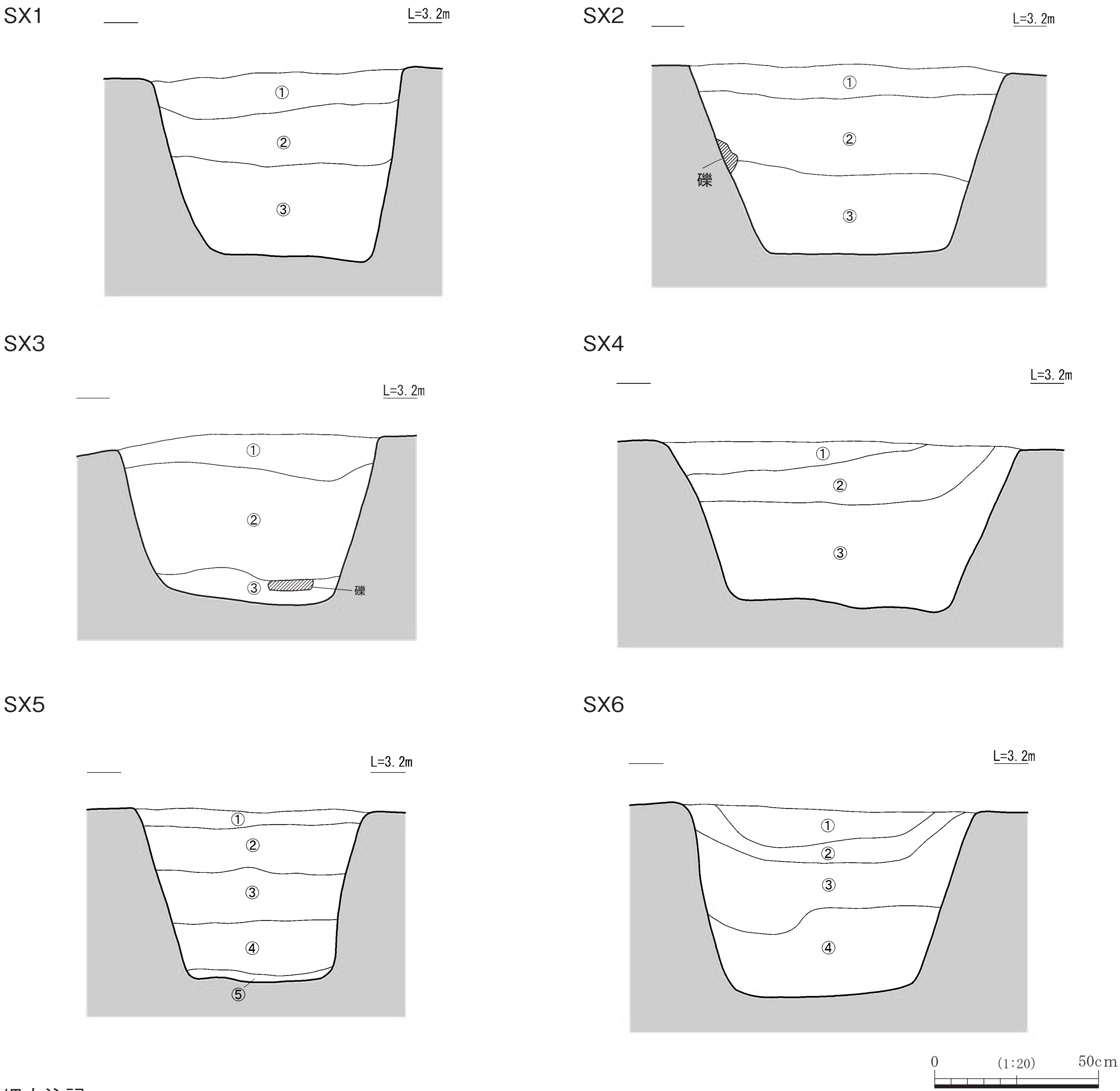
SK２（第33図）

検出状況　調査区１の西側で検出された。

形状・規模　幅約65㎝×66㎝で深さ約50㎝である。

出土遺物

底面と土坑下部の壁面には木片が残存しており，桶状の形態であった。壁面の木板は脆く，残存した状態での取上げは困難であった。底板（155）は中央部に四角形の穴を開けており，比較的良好に残存していたが，取り上げ時に一部欠損した。底板の樹種はモミであった。

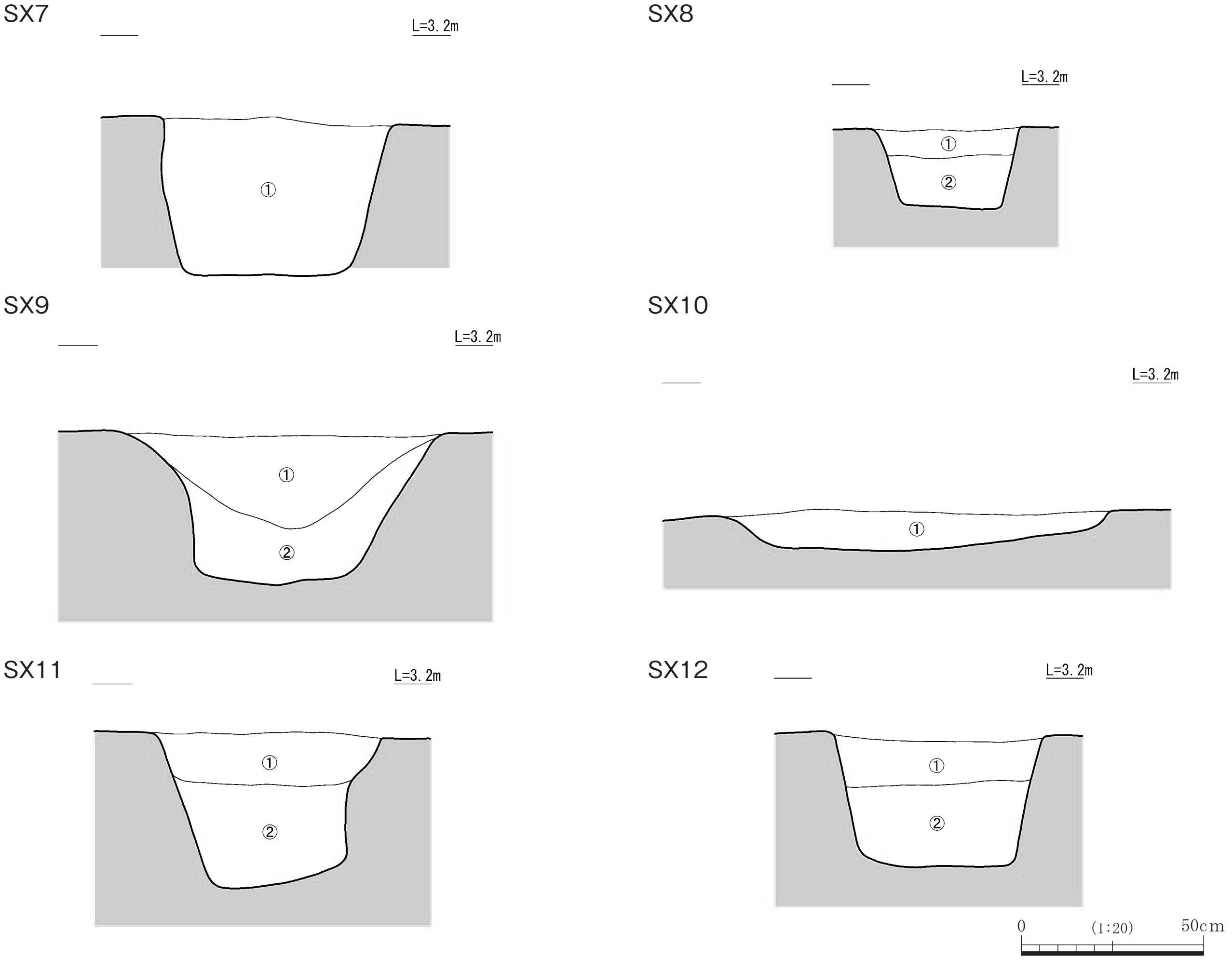


埋土注記

SX1	①灰褐色砂質土（5YR4/2）
	②灰褐色粘質土（7.5YR5/2）
	③褐灰色粘質土（7.5YR4/1）
SX2	①灰黄褐色砂質土（10YR4/2）ベースににぶい黄褐色粘質土（10YR5/3）＋明褐色（5YR5/6）鉄分ブロック混じり。
	②褐灰色砂質土（10YR5/1）ベースに黄褐色粘質土（10YR5/3）ブロック混じり。Φ1mm大の白色礫多く含む。
	③黄褐色粘質土（10YR5/3）ベースに褐灰色砂質土（10YR5/1）混じり。
SX3	①暗褐色粘質土（5YR3/6）。鉄分粒含む。
	②灰褐色粘質土（7.5YR5/2）ベースに褐灰色砂質土（7.5YR5/1）混じり。
	③褐灰色粘質土（5YR5/1）ベースに暗赤褐色砂質土（5YR3/2）混じり。
SX4	①灰黄褐色砂質土（10YR4/2）ベースににぶい黄褐色粘質土（10YR5/3）混じり。Φ1～3mm大の白色礫を多く含む。
	②褐灰色砂質土（10YR4/1）ベースににぶい黄褐色粘質土（10YR5/3）ブロック＋明褐色鉄分粒（5YR5/6）バロック混じり。Φ1～2cm大の炭化物多量に含む。
	③灰黄褐色砂質土（10YR5/2）ベースに灰黄色粘質土（2.5YR6/2）ブロック混じり。

SX5	①灰褐色砂質土（5YR4/2）
	②暗赤褐色粘質土（5YR3/2）。（鉄分含む）
	③黒褐色粘質土（2.5Y3/2）
	④黄灰色粘質土（2.5YR4/1）ベースに褐灰色砂質土（10YR4/1）混じり。
	⑤暗黄褐色粘質土（2.5Y4/2）
SX6	①灰褐色砂質土（7.5YR6/2）
	②灰褐色粘質土（7.5YR6/2）ベースの褐灰色砂質土（7.5YR6/1）混じり。
	③明赤褐色粘質土（5YR5/8）鉄分含むベースの褐灰色砂質土（7.5YR6/1）混じり。
	④褐灰色粘質土（7.5YR4/1）

第34図　SX１～6　断面図



埋土注記

SX7	①褐灰色砂質土（10YR5/1）と黄灰色粘質土（2.5Y5/1）ブロック混じり。（鉄分多く含む）
SX8	①暗褐色粘質土（5YR3/6）。（鉄分含む）
	②灰褐色粘質土（7.5YR5/2）ベースに褐灰色砂質土（7.5YR5/1）混じり。
SX9	①灰黄褐色粘質土（10YR5/2）＋褐灰色砂質土（10YR5/1）
	②黄灰色粘質土（2.5YR5/1）＋褐灰色砂質土（10YR4/1）
SX10	①灰黄褐色粘質土（10YR6/2）＋褐灰色砂質土（10YR4/1）混じり。（鉄分多く含む）

SX11	①褐灰色砂質土（10YR5/1）ベースに黄灰色粘質土（2.5YR5/1）ブロック混じり。（鉄分含む）
	②黄灰色粘質土（2.5Y5/1）ベースに褐灰色砂質土（10YR5/1）混じり。（鉄分含む）
SX12	①黄灰色砂質土（2.5Y4/1）＋暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）混じり。
	②灰色砂質土（5Y4/1）＋オリーブ黒色粘質土（5Y3/2）混じり。

第35図　SX７～12　断面図

（３）不明遺構（第34～39図）

調査区の東側に多く検出された北東－南西方向に延びる溝状の遺構である。

12基確認された。いずれも幅が約80cmと規模は同じであり，ＳＤ２・３を切っている。

埋土はしまりが弱い，砂質土・粘質土が主であった。用途・機能が不明のため，不明遺構として報告する。

SX１（第34・36図）

検出状況　Ⅳa層面で検出された。

形状・規模　幅80cm×長さ200cm×深さ約55cmで，調査区外に延びる。

出土遺物

156は土師器の皿で，体部下位をケズリ出している。

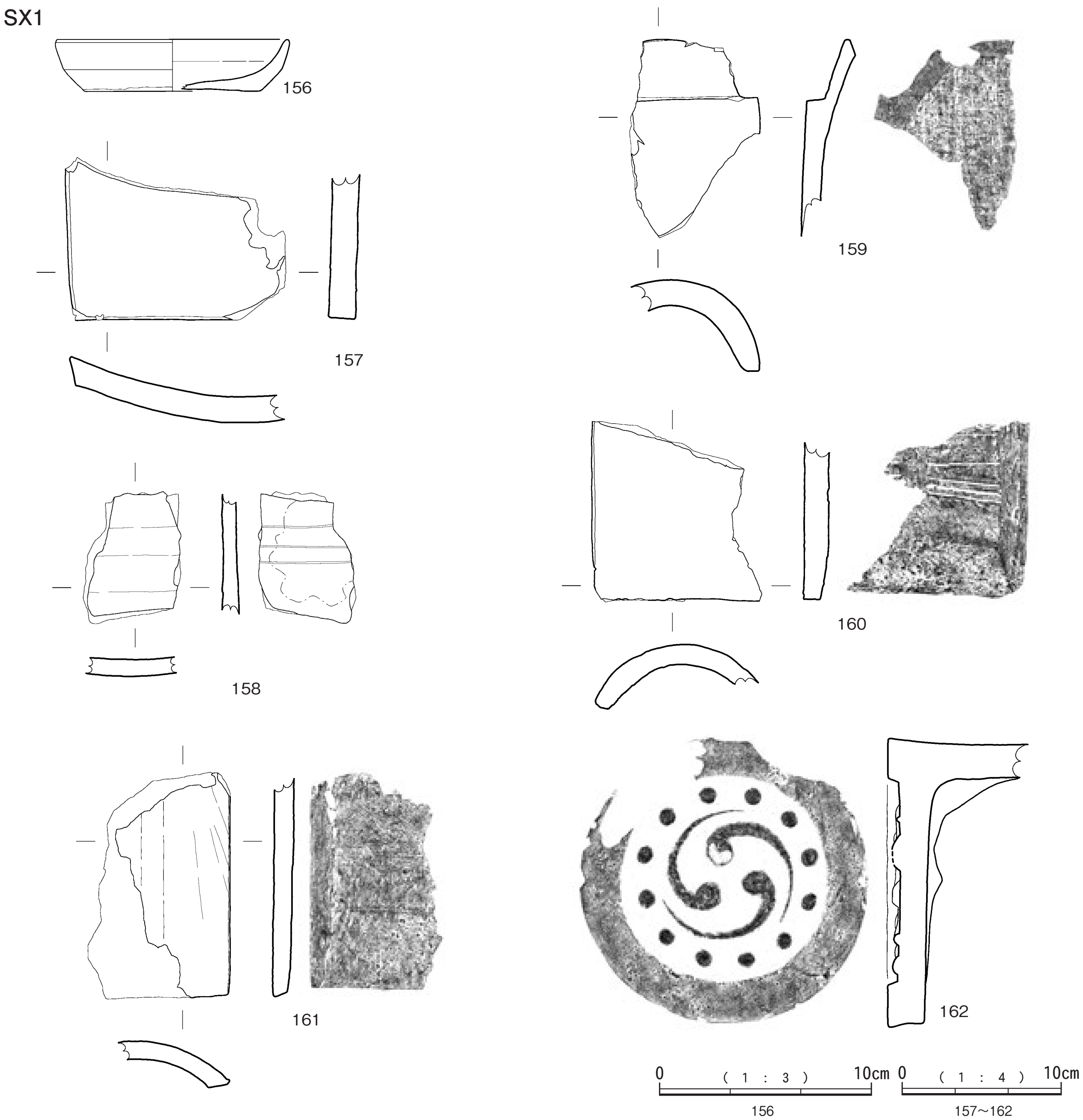
157～162は瓦である。157・158は平瓦で，158は陶器瓦で二次焼成を受けている。159～161は丸瓦で，内面には布痕と横方向の筋（コビキＢか）がみられる。162は左巻巴文の軒丸瓦である。

SX２（第34・37図）

検出状況　Ⅳa層面でSD３を切った状態で検出された。

形状・規模　幅約90cm×長さ540cm×深さ約58cmである。

出土遺物　163・164は磁器碗である。163は内面見込みに虫文をもつ弥勒窯の碗である。164は堅野窯系の碗で，



第36図　SX１出土遺物

総釉で透明釉が厚くかかる。

165～167は加治木・姶良系窯系（初期龍門司か）の陶器である。165は光沢の強い黄飴釉の碗で，166は鉢である。黄飴釉が施釉され，轆轤目を明瞭に残し，蛇の目釉剥ぎと目跡を両方もつ。

167は鉄釉の小壺である。168・169は堂平窯の陶器である。168は壺で，169は外面に花文のスタンプをもつ植木鉢の胴部である。

SX３（第34・37図）

検出状況　Ⅳa層面でSD１・２を切った状態で検出された。

形状・規模　幅約80㎝×長さ500㎝×深さ約50㎝である。

出土遺物　170は巴文の軒丸瓦である。

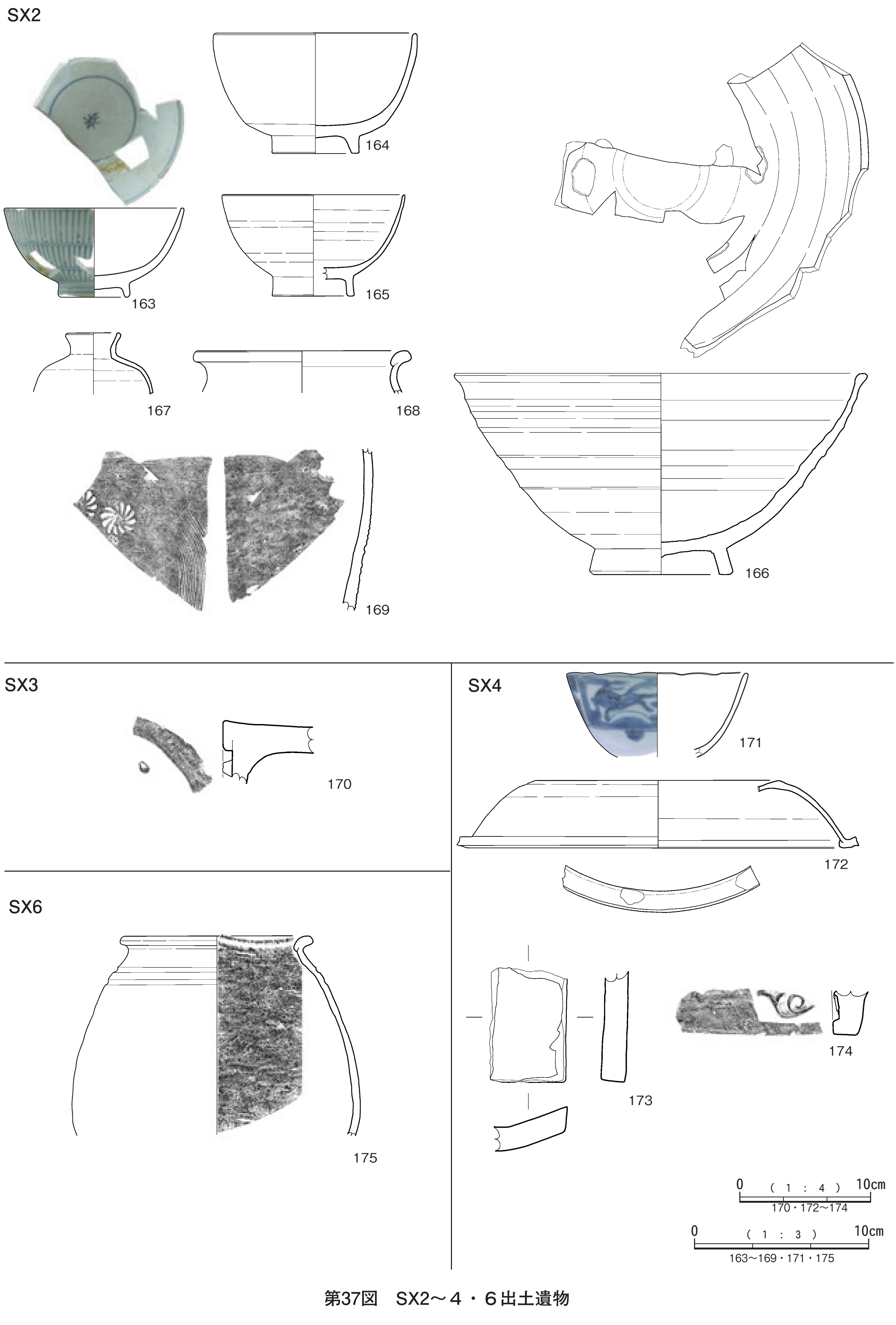
SX４（第34・37図）

検出状況　Ⅳa層面でSD２を切った状態で検出された。

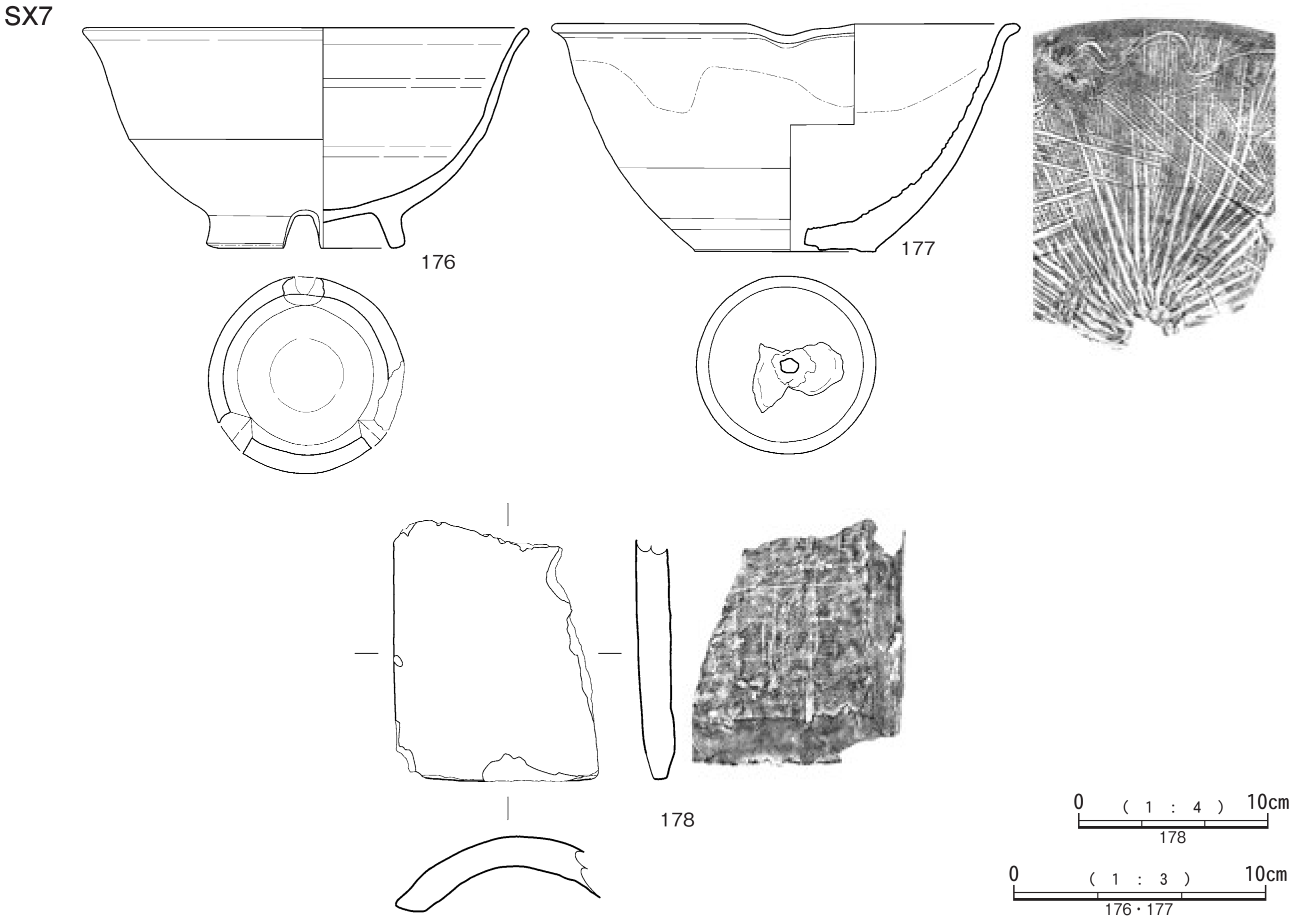
形状・規模　幅約110㎝×長さ300㎝，深さ約50㎝で，調査区外に延びる。

出土遺物

171は磁器碗である。口縁部が稜花で内面は印花文，外面文様には馬が描かれる。172は堂平窯系の蓋である。口唇部には貝目が残る。173は平瓦，174は軒平瓦である。



第37図　SX2～４・６出土遺物



第38図　SX７出土遺物

SX5（第34図）
検出状況　Ⅳa層面でSD２を切った状態で検出された。
形状・規模　幅約70cm×長さ160cmで深さ約50cmである。
出土遺物　遺物は陶磁器の小片のほか，シカの歯や下顎片等が出土している。

SX6（第34・37図）
検出状況　Ⅳa層面で検出された。
形状・規模　幅約90cm×長さ340cm，深さ約57cmで，調査区外に延びる。
出土遺物
175は堂平窯の壺である。口縁部を内面に折り曲げ，内面には当て具痕を残す。

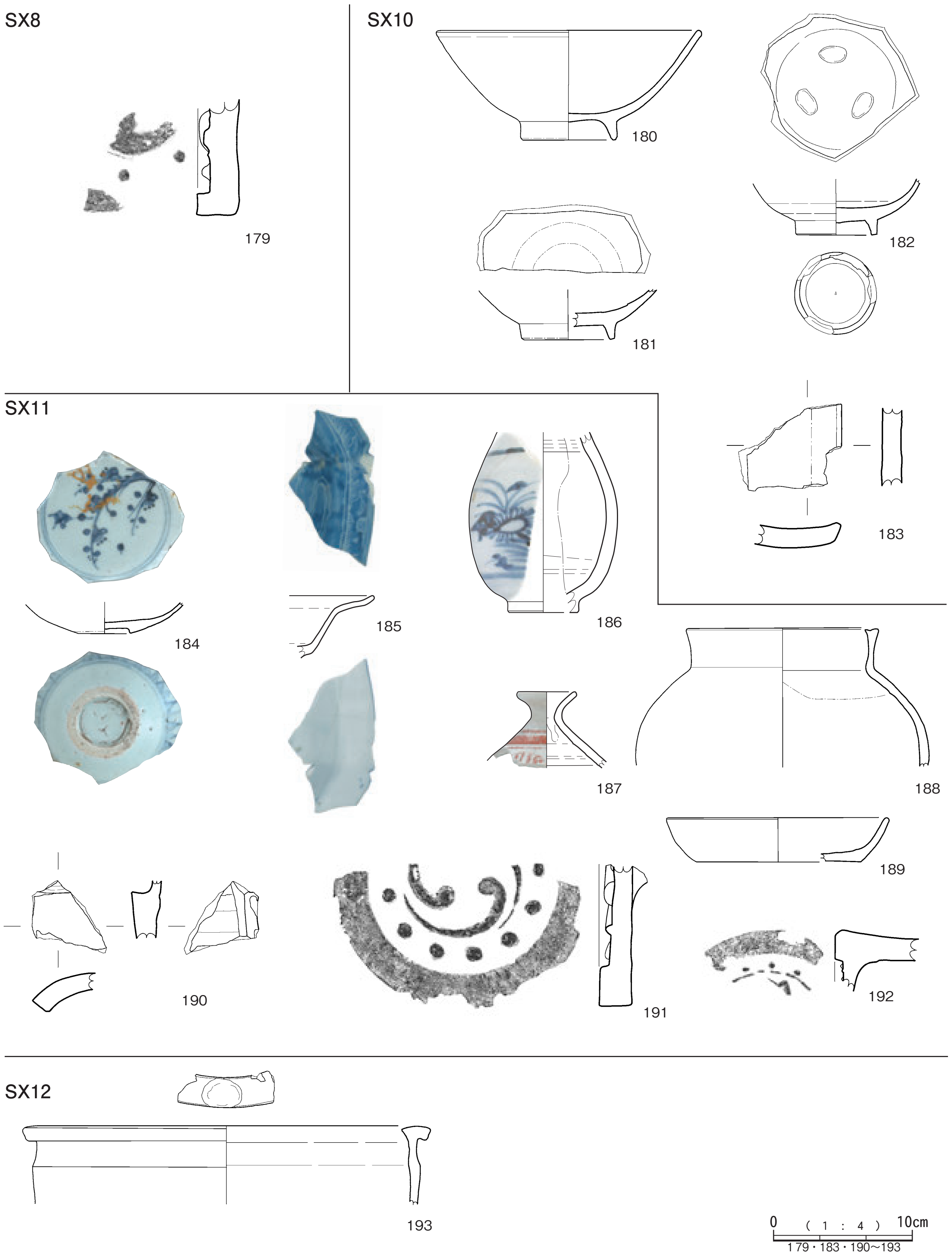
SX７（第35・38図）
検出状況　Ⅳa層面でSK２に切られた状況で検出された。
形状・規模　幅約62cm×長さ500cmで深さ約42cmである。
出土遺物
陶磁器等のほかにシカの肩甲骨や脛骨等が出土した。176は竪野窯系の割高台の磁器碗である。総釉で畳付は釉剥ぎである。177は肥前系の擂鉢を転用した植木鉢である。底部に内側から穿孔している。178は丸瓦である。

SX８（第35・39図）
検出状況　Ⅳa層面で検出された。
形状・規模　幅約40cm×長さ200cmで深さ約20cmである。
出土遺物　179は巴文の軒丸瓦である。

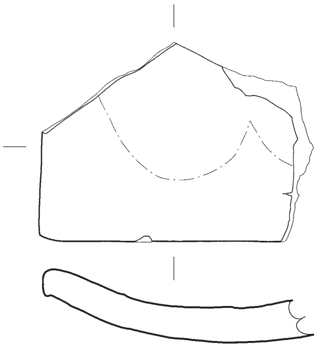
SX９（第35図）
検出状況　Ⅳa層面で検出された。
形状・規模　幅約85cm×長さ180cmで深さ約42cmで，調査区外に延びる。
出土遺物　遺物は出土していない。

SX10（第35・39図）
検出状況　Ⅳa層面で検出された。
形状・規模　幅約110cm×長さ50cmで深さ約12cmである。
出土遺物　180は肥前の陶器碗である。透明釉で貫入が入る。181・182は加治木・姶良系の陶器である。
182は山元窯の碗で黄飴釉が施釉され，内面見込みと畳付に目跡が残る。181は初期龍門司窯の碗で，総釉で蛇の目釉剥ぎである。183は陶器平瓦である。外面に直線状に施釉がみられる。

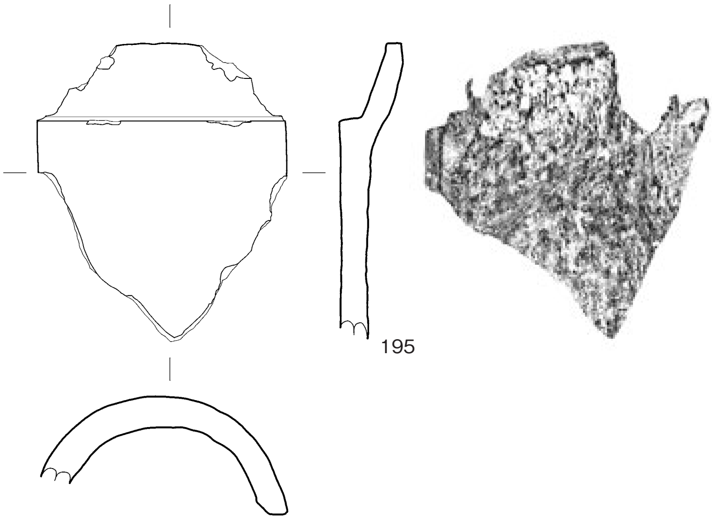
SX11（第35・39図）
検出状況　Ⅳa層面で検出された。



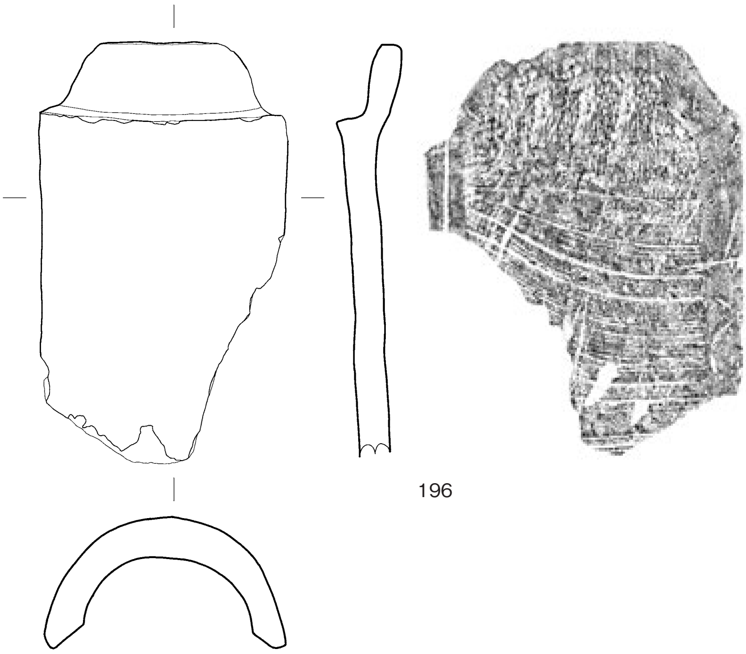
第39図　SX８・10～12出土遺物



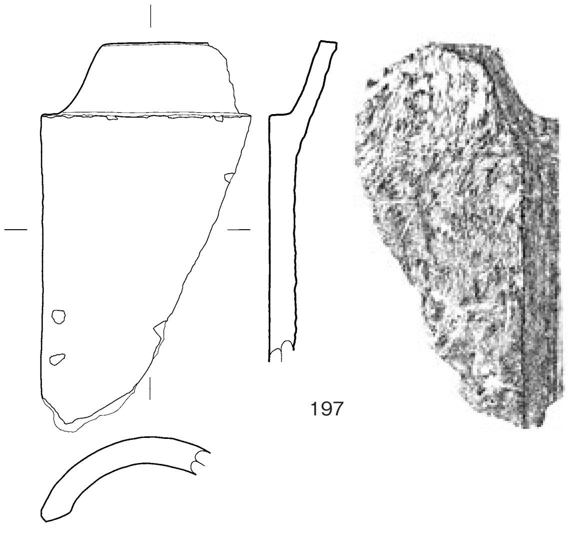
194



195

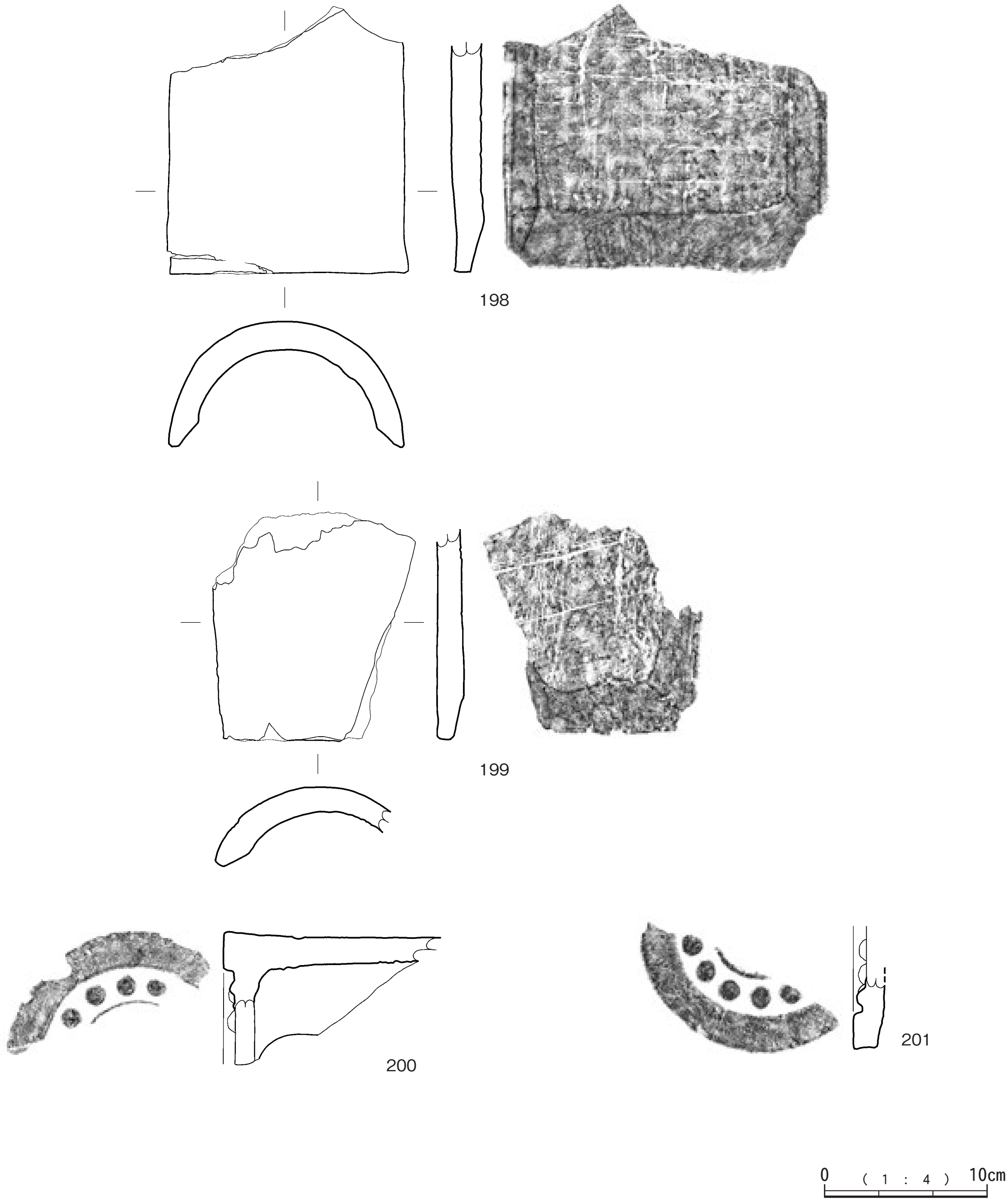


196



197

第40図　瓦溜２出土遺物１



第41図　瓦溜２出土遺物２

形状・規模　幅約60㎝×長さ220㎝，深さ約43㎝で，調査区外に延びる。

出土遺物

184は碁笥底の青花皿である。外面は芭蕉文で，底部は釉剥ぎする。185・186は中国磁器である。185は角皿，186は瓶で内面には釉垂れが見られる。187は赤絵が施文される小瓶で，内面は露胎する。

188は龍門司窯系の壺である。胎土は灰色味を帯び，φ１㎜大の黒色粒を多く含む。189は土師器の皿である。

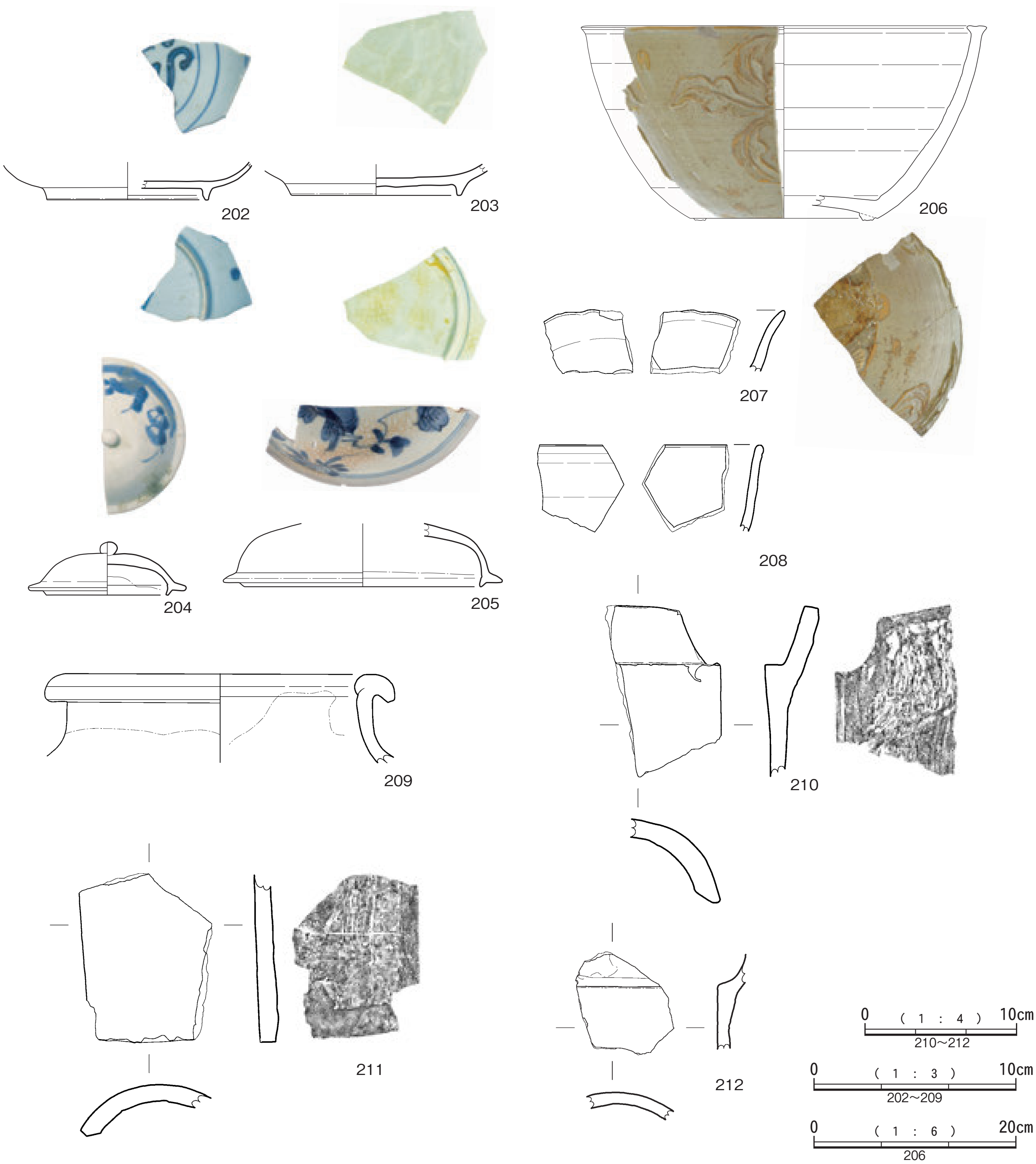
190～192は瓦である。190は陶器丸瓦である。191は左巻巴文の軒丸瓦で，192は橘文と考えられる軒丸瓦である（69・154と同笵か）。

SX12（第35・39図）

検出状況　Ⅳa層面で検出された。

形状・規模　幅約55㎝×長さ400㎝×約35㎝で,調査区外に延びる。

出土遺物　193は堂平窯の鉢と考えられる。全体的に強



第42図　Ｖ層出土遺物

い二次焼成を受けており，口唇部には貝目が残る。

（4）瓦溜2（第40・41図）

検出状況　調査区２の南西角で検出された。

形状・規模　約２mの不定形で一部に瓦が集中していた。

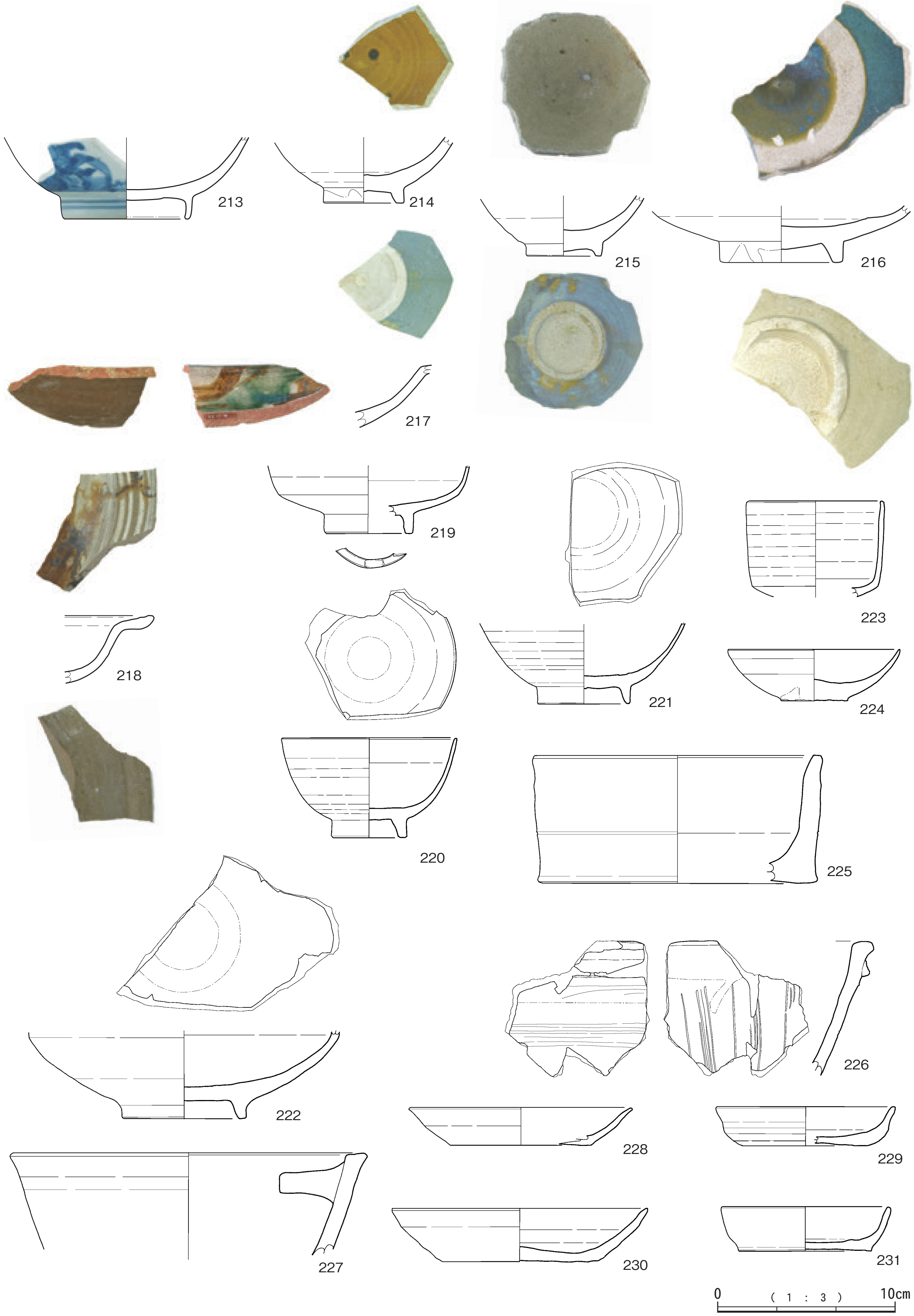
埋土　掘り込みなどは確認されず，瓦周辺には焼土や炭化物・漆喰片が広がっていた。

出土遺物

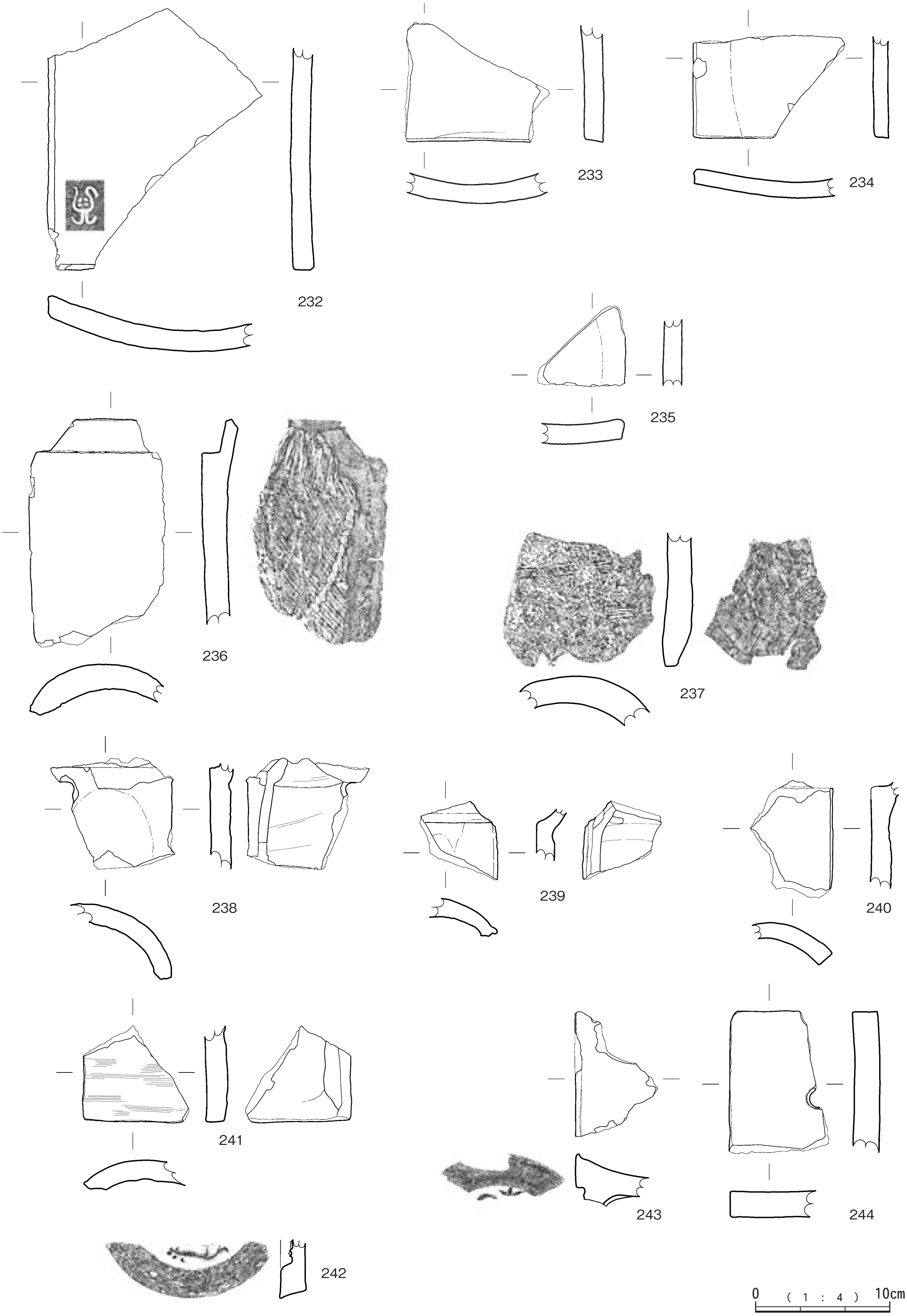
被熱した瓦のほか，焼けた礫等が出土している。194～201は瓦である。194は陶器平瓦で，釉がハート形に施釉される（田之浦窯か）。195～199は丸瓦で，196は内面に斜め方向の切り離し痕が明瞭に残る（コビキＡか）。200・201は巴文の軒丸瓦である。

（5）Ｖ層出土遺物（第42図）

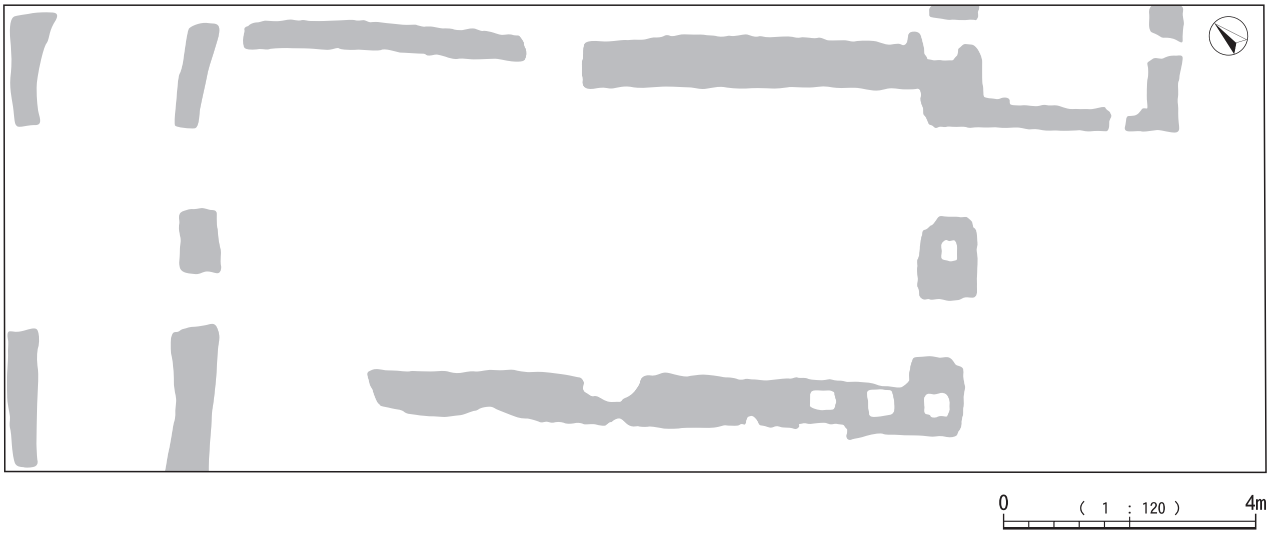
202～205は磁器である。202・203は皿で，203は内面が印花文である。204・205は蓋で，草花文が施文され，庇部が露胎する。206は堅野窯系の大鉢で，外面に草花



第43図　Ⅳ層出土遺物１



第44図　Ⅳ層出土遺物２



第45図　Ⅱ層検出凝灰岩布地業（建物基礎）

文の陽文を持ち，底部には脚がつくようである。

207・208は中世青磁である。207は稜花皿，208は碗である。209は堂平窯系の壺である。210～212は丸瓦である。212は陶器丸瓦である。

４　Ⅳ層（第43・44図）

Ⅳ層は焼土・炭化物・漆喰が非常に多く混じった，硬質層である。調査区全体に見られ，特に北側に厚く残存していたが，遺構等は確認されなかった。遺物は出土しているが，二次焼成を受けたものが多い。埋土に焼土や炭化物が多量に含まれていることや層堆積状況から火事等処理層（造成）と想定される。

（１）出土遺物

213は肥前の磁器碗である。総釉で，外面には草花文をもつ。214～218は肥前の陶器である。214～216は内野山窯系で，外面および内面より緑銅釉が施釉される。

217・218は唐津（武雄）の鉢で，内面に白化粧土の三島手と鉄釉・緑銅釉で施文される。

219は竪野窯系の陶器碗である。220～224は加治木・始良系（龍門司窯）の陶器である。220・221は蛇の目釉剥ぎの碗である。222は鉄釉の大型碗で，胎土はやや粗く，黒色粒を多く含む。223は筒形碗で表面には轆轤目を明瞭に残す。224は灯明皿である。225は窯道具の陶製のサヤである。226は山元窯の擂鉢で，口縁部のみ褐色の鉄釉が施釉される。胎土には白色粒が非常に多く含まれ特徴的である。

227は瓦質土器の五徳である。228～231は土師器である。230・231は強い二次焼成を受けている。230は内面にタール状の煤が付着している。

232～244は瓦である。232～235は平瓦で，234・235は陶器瓦である。236～241は丸瓦で，238～241は陶器瓦である。242・243は陶製の軒丸瓦で堂平窯産と考えられる。244は海鼠瓦である。

５　Ⅲ層（第46図）

焼土・炭化物を多く含む硬質なⅡ層下に検出されたⅢ層は砂層であった。海砂のような層で，調査区全体で見られたが，比較的南側が厚く残存していた（約20～30㎝）。遺構等は確認できなかったが，試掘調査時のトレンチ（Ｔ２）で瓦片が出土している。

（１）試掘調査トレンチ２（Ｔ２）

検出状況　調査区の西の花壇部分にトレンチを設定し，掘り下げⅢ層面（表土下150㎝）で大量の瓦が出土した。

出土遺物　出土した遺物の大半は瓦で，薩摩焼や陶磁器も少量出土した。

245は平瓦で「七」のスタンプをもつ。246は丸瓦で，247は軒丸瓦，248は上付三葉文の軒平瓦である。249，250は鬼瓦である。

第５節　近代以降の調査成果

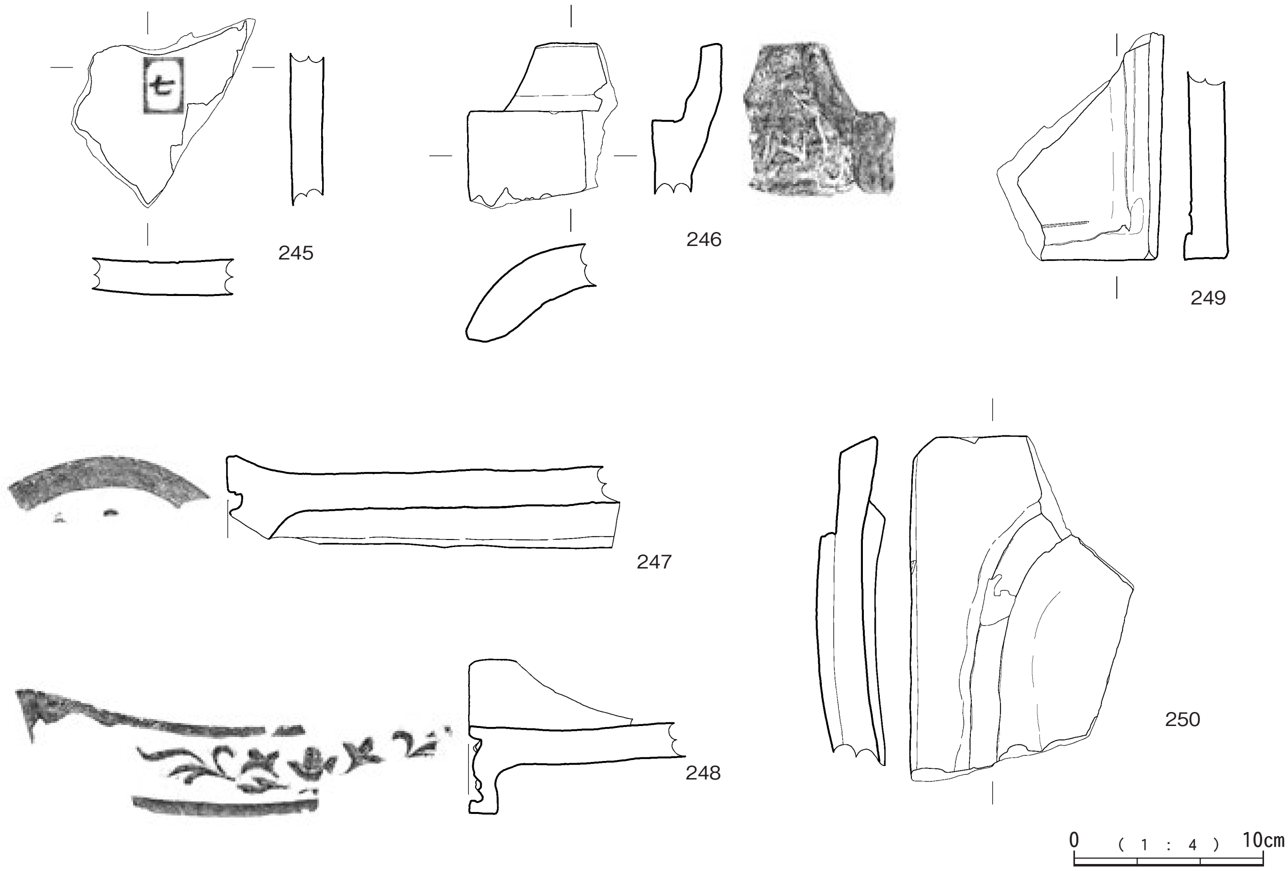
１　Ⅱ層（第45・47・48図）

Ⅱ層は炭化物や焼土・漆喰片を多く含む褐灰色土で，調査区全体で確認された。残存が良好な所で約20㎝堆積しており，非常に硬質であったことから，造成土と考えられる。

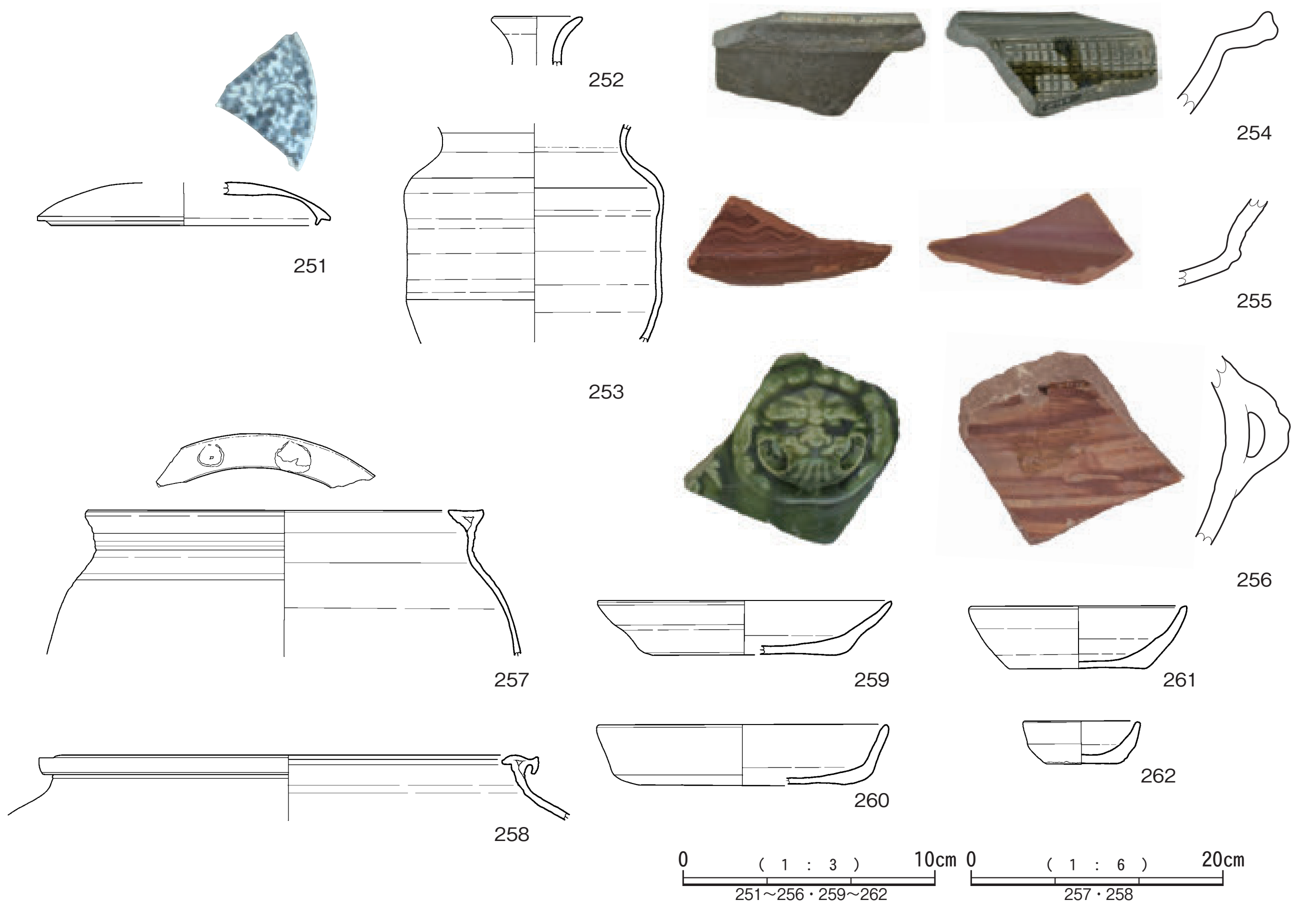
Ⅱ層からは方形状の凝灰岩の地業が検出された。残存状況が良い所で幅72㎝，厚さ約50㎝程度で鹿児島城跡に向かって平行して方形に位置していた。検出された地業間幅は約5.7ｍ，長さは約16.8ｍであった。

地業の方向や規模から考えて，おそらく明治27（1885）年に設立された高等小学校の校舎基礎と想定される。その校舎は昭和10～13（1935～1938）年頃に撮影されたとされる第七高等学校の全景写真で確認できる（第２章参照）。

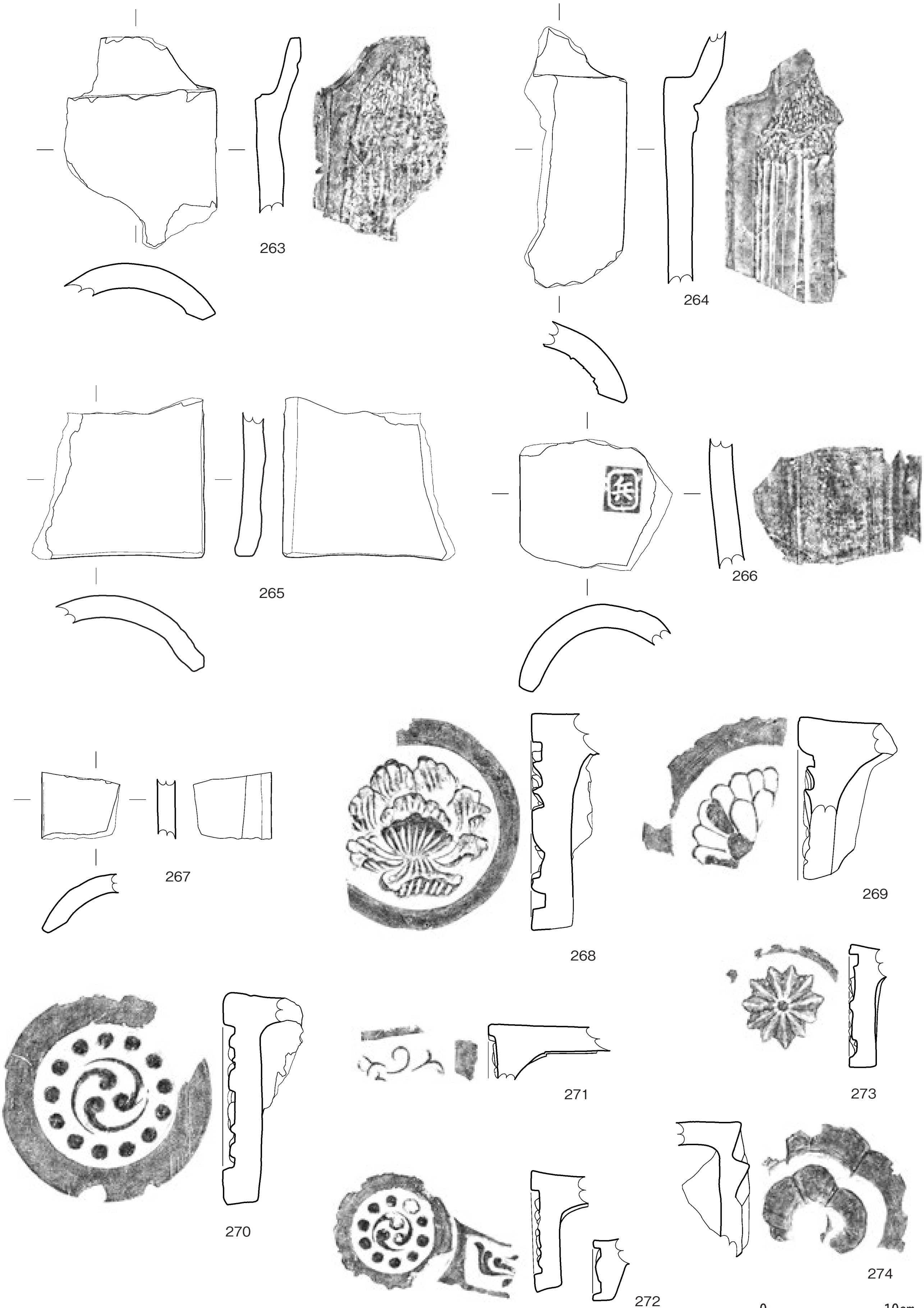
また，この基礎を高等小学校の校舎とすれば，建物基礎はⅡ層を切っていることから明治27（1885）年より古いと考えられる。したがって，Ⅱ層は廃藩置県後に設置された練兵所時代の造成面に相当する可能性が高いと考



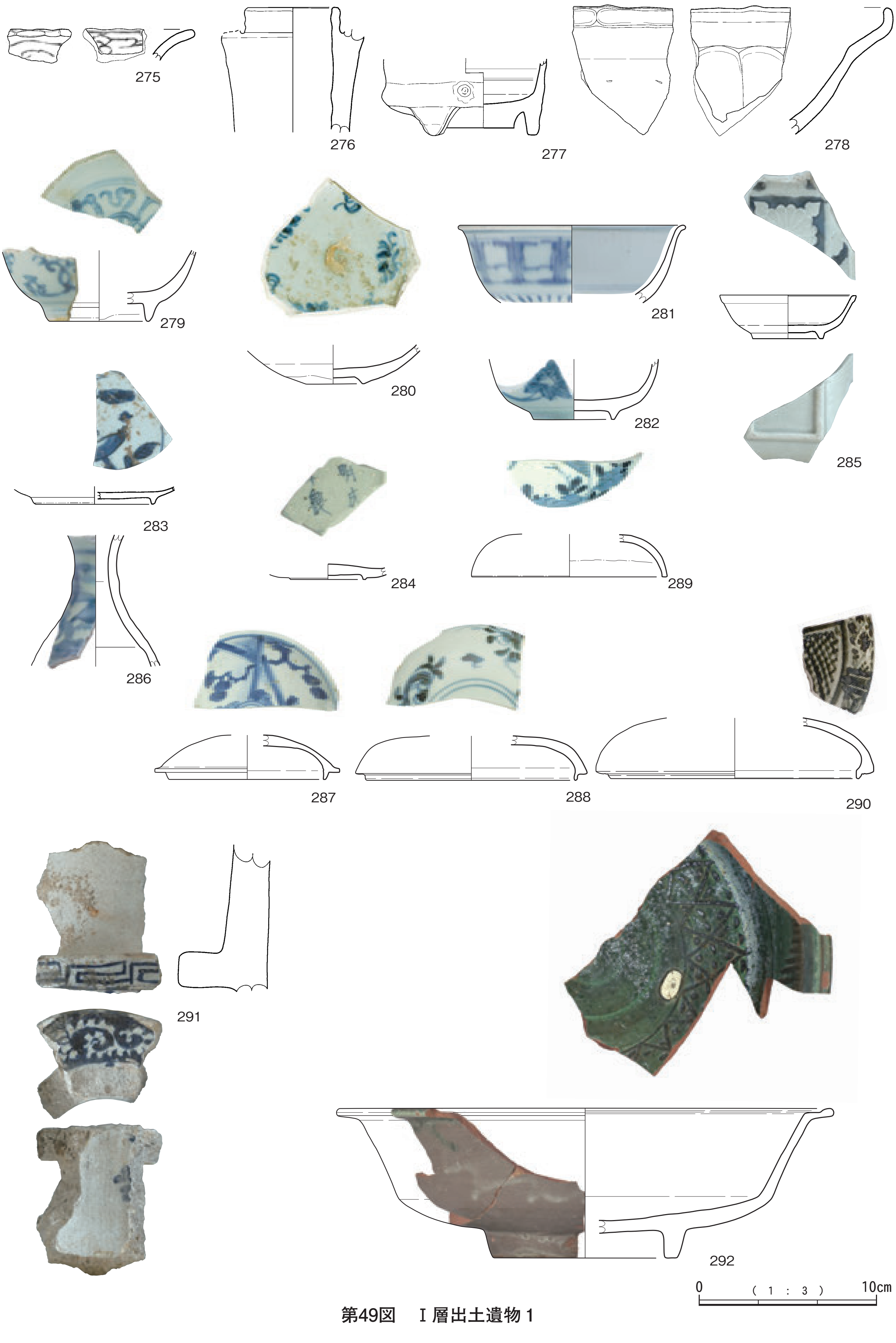
第46図　Ⅲ層出土遺物（Ｔ２）



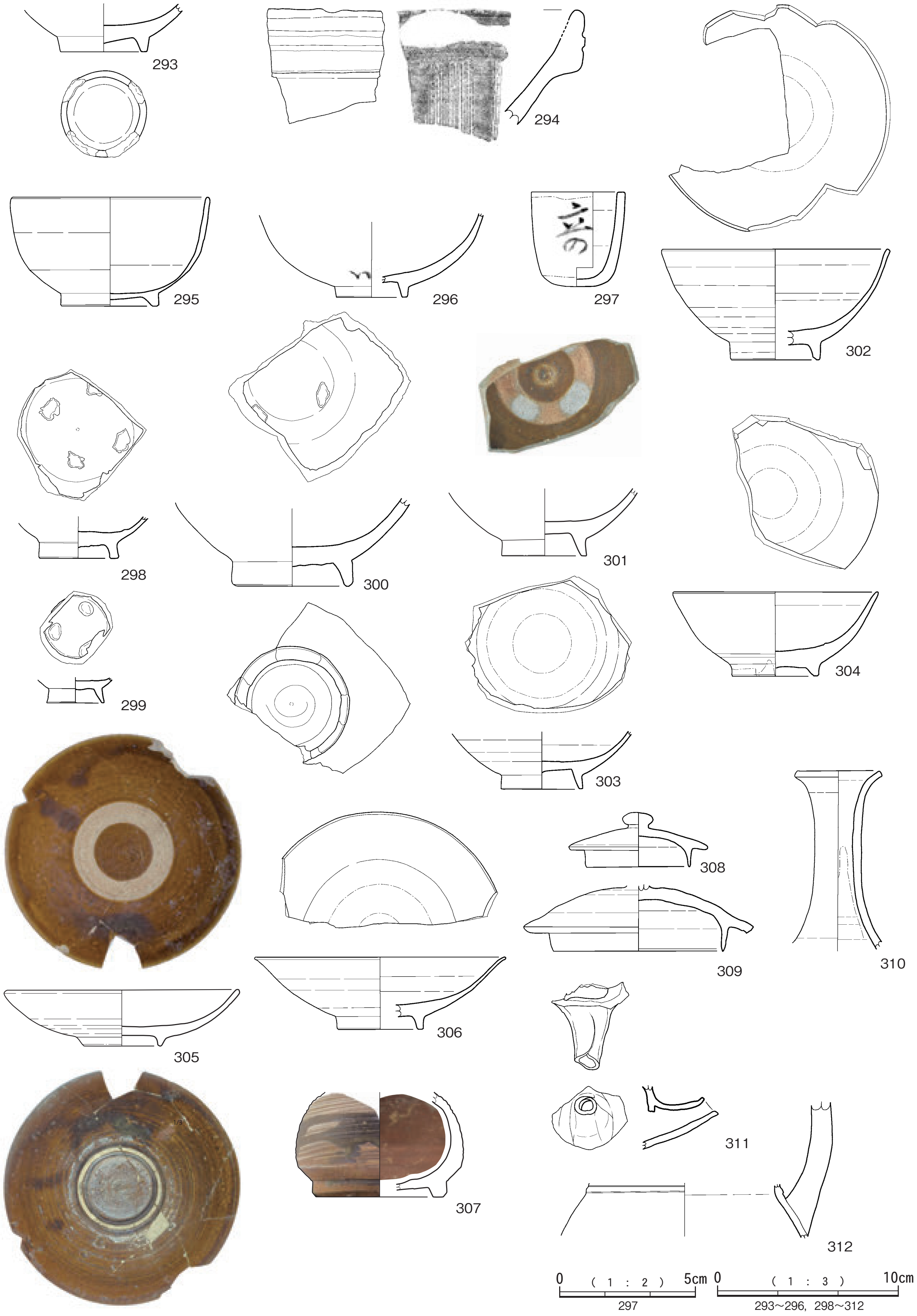
第47図　Ⅱ層出土遺物１



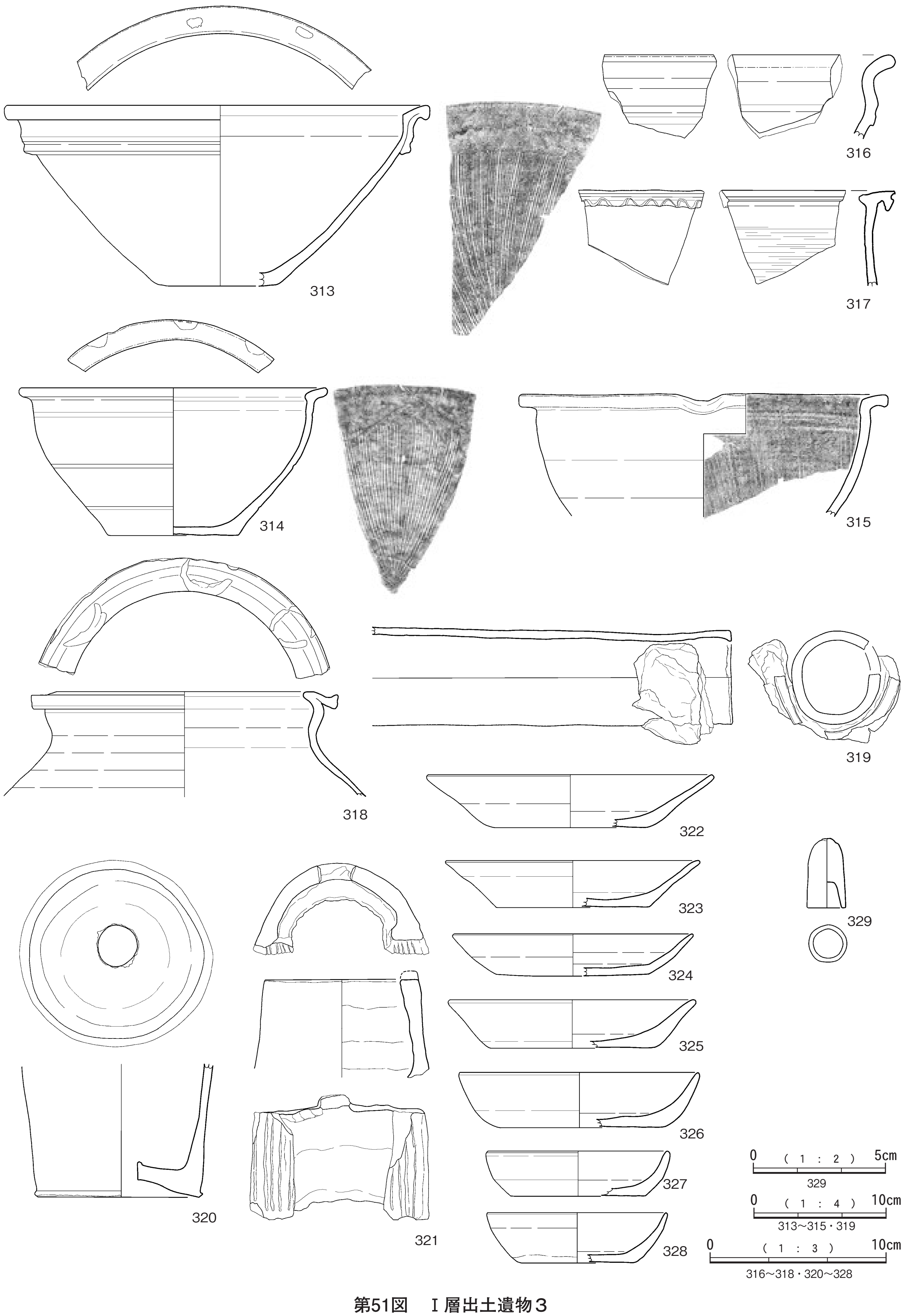
第48図　Ⅱ層出土遺物２



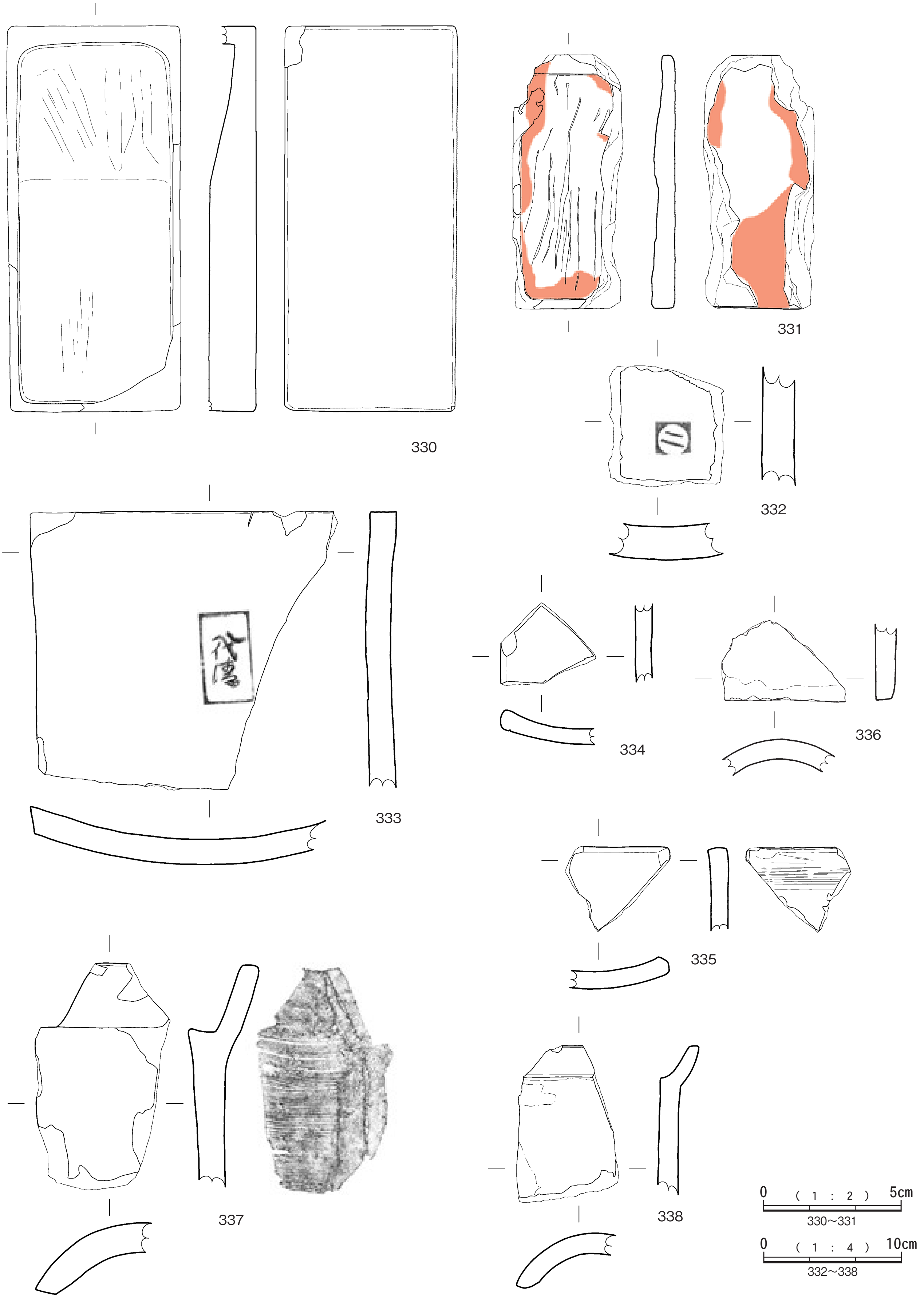
第49図　Ⅰ層出土遺物１



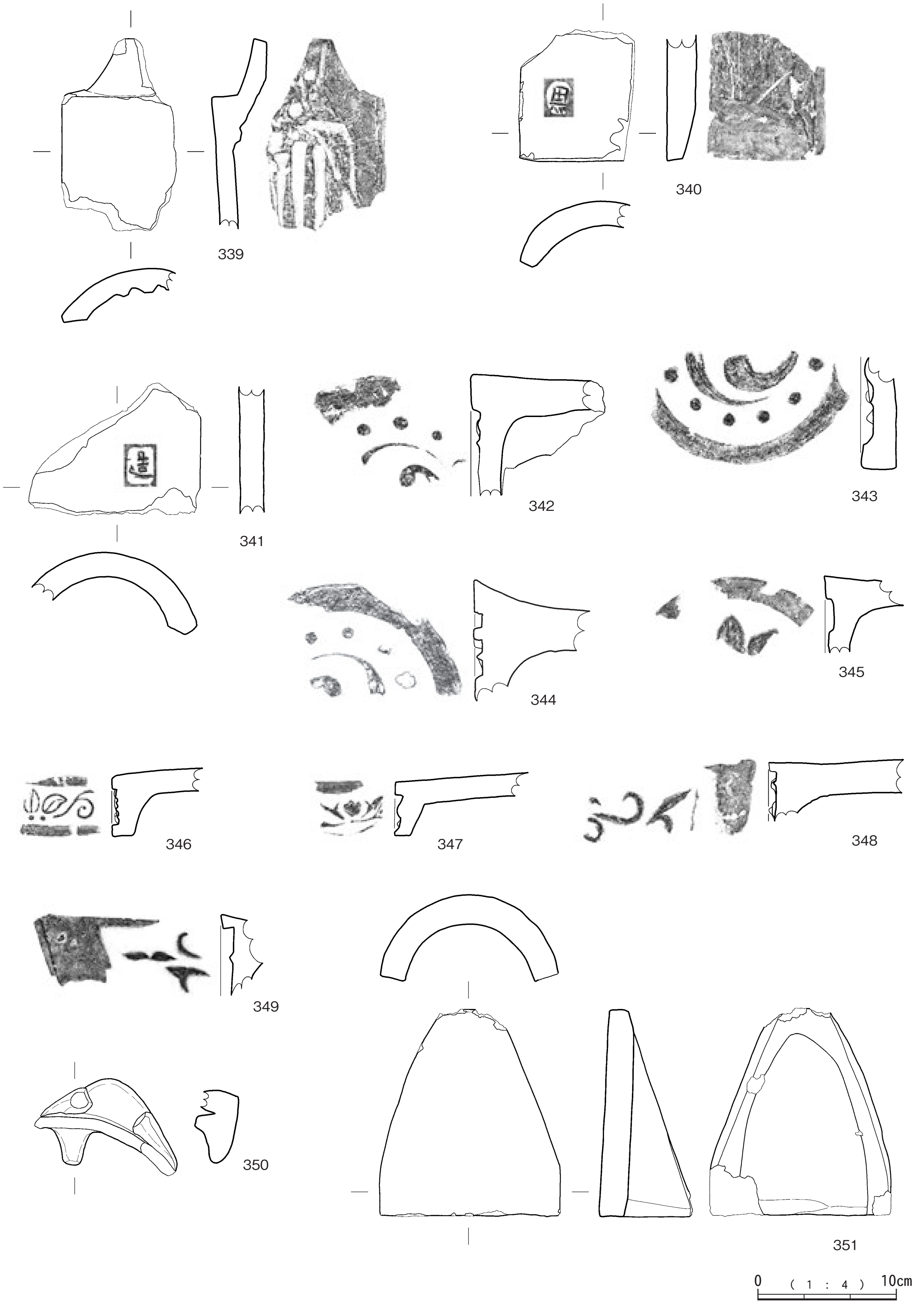
第50図　Ⅰ層出土遺物２



第51図　Ⅰ層出土遺物３



第52図　Ⅰ層出土遺物４



第53図　Ⅰ層出土遺物５

えられる。

（1）出土遺物

251は草花文が施文される磁器の蓋である。254・255は肥前系の陶器である。254は唐津（武雄？）の鉢で，内面に白化粧土と鉄釉で三島手が施文される。255は外面に波状文をもつ鉢で，表面には赤い鉄釉が施釉される。

256は瀬戸の緑釉瓶で，獅子文の把手を貼り付けている。透明度の高い緑釉（呂宋釉）が外面に厚く施釉され，内面は露胎する。

252は中世青磁の小壺と考えられる。257・258は堂平窯系の甕である。257は口縁部を内側に折り曲げ，口唇部に貝目を残す。258は外面に折り曲げ，肩部が張る。253は加治木・姶良系（山元窯）の壺で，黄飴釉が施釉され，内外面に轆轤目を明瞭に残す。胎土は精緻で不純物が少ない。

259～262は土師器である。259・262は二次焼成を受け，部分的に変色している。

263～274は瓦である。263～267は丸瓦である。264は内面に縄目や工具痕が明瞭に残る。266は「兵」のスタンプをもつ。267は陶器瓦である。

268～270は軒丸瓦である。268・269は牡丹文，270は右巻巴文をもつ。271は軒平瓦，272は軒桟瓦である。273は小菊瓦，274は鬼瓦の雲文部分と考えられる。

2　Ⅰ層（第49～53図）

調査区のアスファルトを除去するとコンクリートの建物基礎を伴う攪乱層（Ⅰ層）が確認された。セメント片のほか，炭化物や焼土も混ざっており，被熱を受けたガラス片なども多く出土した。コンクリートの建物基礎は昭和初期の校舎基礎の可能性が考えられる。

埋土中からは，学校に関連するような陶製のパレットなどの近現代遺物のほか，中世～近世遺物も多く出土した。ここでは中世～近世相当遺物を中心に報告する。

（1）出土遺物

275～277は中世青磁である。275は稜花皿で，278は盤である。276は口縁部（肩部？）が欠損しているため，全形は不明だが花生・瓶に近い器種と想定される。277は脚付の香炉もしくは袋物の可能性が考えられる。

279・280は青花である。279は碗で，畳付が細く，高台脇～畳付を釉剥ぎする。283は小野分類E群の皿である。280は皿C群の碁笥底で，内面には草花文が施文される。281～285は肥前系の磁器である。

281・282は碗で，284は皿で内面見込みに大明成化年製の銘款が入る。286は瓶で，285は19世紀代の角皿である。290は宋胡禄の蓋である。291は瀬戸の陶製便器である。

292・293は肥前の陶器である。292は外面に白化粧土，内面に銅緑釉で象嵌文様が施文される鉢である。内面見込みと畳付には目跡が残る。

293は碗で，内外面に銅緑釉が施釉され，畳付には目跡を残す。294は備前の擂鉢である。

295～297は竪野窯系の陶器である。296は碗で，体部には千鳥文をもつ。297は用途不明の小型の筒形坏である。透明釉が施釉され，外面には「立の」と描かれており，口縁部～内面は露胎，底部も輪状に釉剥ぎされている。

298～312は加治木・姶良系（山元窯・龍門司窯）の陶器である。298～300は目跡で黄飴釉が施釉される山元窯系の碗である。

301～304の碗，305・306の皿は蛇の目釉剥ぎで龍門司窯系のものである。301は蛇の目と目跡を両方もっている。初期龍門司窯の資料に類例がある。304は18世紀後半のもので，黒味が強い鉄釉が施釉され，高台が露胎する。307は19世紀代の壺で，外面に白化粧土の刷毛目文と鉄釉で施される。

309～320は薩摩焼（堂平窯・苗代川窯）である。310は徳利で，311は片口鉢の注口で堂平１期のものである。312は把手付の水注で，堂平窯産の可能性もある。313～316は擂鉢で，313・314は堂平窯系，315・316は苗代川窯系のものである。317・320は植木鉢で，318は壺で，器壁が薄く，内面にわずかに当て具痕を残す。口唇部には貝目を残す。

319は苗代川窯系の土管であり，明治相当のものと考えられる。土管接合部をモルタルで接着している。

321は瓦質土器の五徳である。半分欠損しており，接合痕に沈線で傷をつけ，接合している製作技法が窺える。

322～328は土師器である。322～325は外方向に直線的に立ち上がる坏である。329はエンフィールド銃の銃弾である。

330・331は硯である。330は青灰色系の硯で，331は小型の灰色の頁岩製である。331は二次加工され打ち欠かれてはいるが，表裏面には赤色墨が付着している。

332～335は平瓦である。334・336は陶器瓦である。336～341は丸瓦である。337は内面に刷毛目状の調整痕が残る。

340・341はスタンプをもつ。342～345は軒丸瓦である。344は瓦当貼り付け部が水平ではなく，曲線を呈す。345は菊文と考えられる。346～349は軒平瓦である。346は上向三葉文で葉脈が表現されている（長崎瓦か）。

350は鬼瓦の牙部分と考えられる。351は輪違瓦である。

第4表　近世の遺物１（陶磁器）

挿図番号	掲載番号	遺構層	種別	器種	法量			胎土色調		釉調		施釉色調		装飾等	技法/特徴	高台/底部	産地	窯	年代	備考
					口径	底径	器高	色名	マンセル	釉調	施釉	色名	マンセル							
7	1	Ⅶ	磁器	碗	―	―	―	灰白	5Y7/1	透明釉	総釉	オリーブ黄・油色	5Y6.0/3.0 5Y6.0/6.0	鎬蓮弁文	―	―	中国	龍泉窯系	14ｃ～	
	2	Ⅶ	陶器	擂鉢	―	―	―	にぶい赤褐	2.5YR5/3	無釉	全面露胎	―	―	―	―	―	備前	―	15c～	
13	18	P5	陶器	壺	―	5.2	―	褐灰	10YR5/1	茶飴釉	外面：施釉, 内面：釉垂れ	エボニー	5Y3.0/0.5	―	―	露胎・糸切底	薩摩	元立院	17c中～	轆轤右回転。
	19	P5	陶器	甕	―	―	―	灰赤	2.5YR5/2	灰釉	口縁部釉剥ぎ	焦茶	8YR2.5/1.5	―	口唇部：貝目	―	薩摩	堂平	17c中～	堂平2期。
15	23	SD1	磁器	碗	11.2	―	―	灰白	N8/	透明釉	総釉	ブルーウオッシュ	3PB8.5/1.0	瓔珞文	―	―	中国	景徳鎮	17c～	
	24	SD1	磁器	碗	―	―	―	灰白	10YR8/2	透明釉	総釉	(内)鳥の子色(外)アイボリーホワイト	5Y9.0/2.0 5Y9.0/1.	波濤文	―	―	中国	璋州窯？	17c～	
	25	SD1	磁器	碗	10.6	4.4	6.4	灰白	2.5Y7/1	透明釉	総釉	オイスター	5Y7.5/1.0	山水文	―	畳付釉剥ぎ	肥前	―	17c後～？	
	26	SD1	磁器	皿	12.4	4.4	2.9	灰白	N8/	透明釉	総釉	パールホワイト	N8.5	草花文	―	畳付釉剥ぎ	肥前	初期伊万里？	17c～	
	27	SD1	磁器	皿	13.2	8.4	3.7	灰白	N8/	透明釉	総釉	藍～うす群青	5B8.5/2.0 ～ 6PB5.0/10.0	草花文	―	畳付釉剥ぎ	中国	―	17c後～	
	28	SD1	磁器	皿	12.8	5	2.8	灰白	N8/	透明釉	総釉	(内)パールホワイト˜藍(外)パールホワイト˜スノウホワイト	N8.5～ 3PB3.5/5.5 N8.5˜N9.5	草花文	―	畳付釉剥ぎ	肥前	初期伊万里	17c～	
	29	SD1	磁器	筒形碗	8	―	―	灰白	N8/	透明釉	総釉	藍白	5B8.5/2.0	四方襷文縁・松文	―	―	肥前	―	17c中～	
	30	SD1	磁器	仏飯具	8.2	4.2	6.5	灰白	N8/	透明釉	総釉	フロスティグレイ	3G7.5/1.0	草花文	―	畳付釉剥ぎ・砂付着	肥前	―	―	
	31	SD1/Ⅴ	陶器	鉢	―	11.4	―	褐灰	7.5YR6/1	鉄釉	畳付～高台内面露胎	黒柿色	4R2.0/1.5	―	―	畳付～高台内面露胎	肥前	―	17c後～	
	32	SD1/SD2	陶器	蓋	8	庇径11.2	6	明赤褐	5YR5/6	銅緑釉	庇～内面露胎	ろくしょう	3G5.0/5.0	―	―	―	肥前？琉球？	―	18c～	
	33	SD1	陶器	擂鉢	―	―	―	橙	5YR6/8	鉄釉	内外面口縁部～胴部上位施釉	アンテックブラウン	4YR3.0/6.0	―	―	―	肥前	―	17c後～	
	34	SD1	陶器	鉢	―	―	―	暗赤褐	2.5YR3/3	鉄釉	外面胴部上位・内面施釉	焦茶	8YR2.5/1.5	波文	三島手（白土象嵌）	―	肥前	―	―	
	35	SD1	陶器	向付	8	―	―	灰白	5Y8/1	透明釉	総釉	(内)シルバーグレイ(外)オイスター	N7.5, 5Y7.5/1.0	草花文	鉄絵	―	志野?	―	17c～?	
16	36	SD1	陶器	碗	13.3	5.3	6.55	黄	2.5Y7/8	黄飴釉	総釉	ゴールド	2Y5.5/10.5	―	蛇の目釉剥ぎ	畳付釉剥ぎ	薩摩	龍門司	17c後～	初期龍門司
	37	SD1	陶器	碗	13.4	4.8	5.9	灰白	2.5Y8/1	黄飴釉	総釉	ゴールド	2Y5.5/10.5	―	蛇の目釉剥ぎ	畳付釉剥ぎ	薩摩	龍門司	17c後～	初期龍門司
	38	SD1	陶器	筒形碗	8.6	5	7.7	灰白	N8/	茶飴釉	口縁部釉剥ぎ	黒柿色	4R2.0/1.5	―	―	畳付釉剥ぎ・砂付着	薩摩	龍門司	17c中～	初期龍門司
	39	SD1	陶器	小壺	7.3	―	―	灰白	N8/	黄飴釉	内面口縁部のみ露胎	(内)ラセットゴールド(外)ゴールド	2Y4.0/5.5 2Y5.5/10.5	轆轤目	―	―	薩摩	龍門司	17c後～	
	40	SD1	陶器	仏花瓶	―	7	―	灰白	2.5Y8/1	茶飴釉	内外面施釉。底部露胎。	焦茶	8YR2.5/1.5	轆轤目	―	―	薩摩	元立院	17c中～	
	41	SD1	陶器	鉢	15.6	8.6	10.6	灰黄褐	10YR6/2	灰釉	口縁部釉剥ぎ	シダーグリーン	5Y2.5/1.5	―	外面：タタキ痕，内面：当て具痕	―	薩摩	堂平	17c後～	
	42	SD1	陶器	鉢	21.4	―	―	暗赤褐	5YR3/2	灰釉	口縁部釉剥ぎ	モスグリーン	3GY5.5/5.5	―	口唇部貝目，内面：当て具痕	―	薩摩	堂平	17c後～	
	43	SD1/SD2	陶器	鉢	31.4	26.6	8.45	橙	2.5YR6/6	灰釉	口縁部釉剥ぎ	(内)シルバーグレイ(外)シルバーグレイ・シダーグリーン	N7.5 N7.5・ 5Y2.5/1.5	―	口唇部貝目	底部貝目痕	薩摩	堂平	17c後～	
	44	SD1	陶器	鉢	30	19	6.8	灰赤	2.5YR4/2	灰釉	口縁部釉剥ぎ	エボニー	5Y3.0/0.5	―	口唇部貝目	―	薩摩	堂平	17c後～	
	45	SD1	陶器	片口鉢	22	―	―	灰赤	7.5R4/2	灰釉	口縁部釉剥ぎ	憲房	5Y2.0/0.5	―	―	―	薩摩	堂平	17c後～	
17	46	SD1	陶器	甕	44	―	―	明赤褐	2.5YR5/6	灰釉	口縁部釉剥ぎ	オイスター・エボニー	5Y7.5/1.0 5Y3.0/0.5	縄状突帯	口唇部貝目	―	薩摩	堂平	17c後～	
	47	SD1	陶器	甕	38.6	―	―	にぶい赤褐	5YR5/4	灰釉	口縁部釉剥ぎ	オリーブドラブ	5Y4.5/2.0	―	口唇部貝目	―	薩摩	堂平	17c後～	
	48	SD1	陶器	甕	46.2	―	―	にぶい赤褐	5YR5/3	灰釉	口縁部釉剥ぎ	―	―	―	口唇部貝目，内面：当て具痕	―	薩摩	堂平	17c後～	
	49	SD1	陶器	甕	32.4	―	―	赤褐	10YR5/4	灰釉	口縁部釉剥ぎ	(内)シルバーグレイ(外)アイビイグレイ	N7.5, 3G3.0/0.5	―	口唇部貝目	―	薩摩	堂平	17c後～	内面二次焼成
	50	SD1	陶器	壺	15	―	―	褐灰	5YR5/1	灰釉	口縁部釉剥ぎ	トープ	4YR3.0/1.0	―	―	―	薩摩	堂平	17c後～	
	51	SD1	陶器	徳利	―	11.3	―	褐灰	10YR6/1	灰釉	総釉	憲房	5Y2.0/0.5	―	内面：当て具痕	―	薩摩	堂平	17c後～	
27	95	SD2	磁器	碗	―	4.5	―	灰白	N8/	透明釉	総釉	ブルーウォッシュ	3PB8.5/1.0	草花文	―	饅頭心	中国	景徳鎮	17c～	銘款：福？
	96	SD2	磁器	稜花皿	―	―	―	灰白	N8/	透明釉	総釉	濃藍・ブルーウオッシュ	3PB2.0/5.0・ 3PB8.5/1.0	草花文	―	―	中国	景徳鎮	17c～	
	97	SD2	磁器	皿	13.6	6.4	3.5	灰白	N8/	透明釉	総釉	シルバーグレイ	N7.5	草花文	―	畳付釉剥ぎ	肥前	初期伊万里	17c～	二次焼成。
	98	SD2	磁器	蓋	10	庇径11.4	4.1	灰白	N8/	透明釉	庇露胎	藍白	5B8.5/2.0	唐草文・獅子文	―	―	中国？	―	17c～？	
	99	SD2	磁器	壺	―	6.1	-	灰白	N8/	透明釉	内面下半露胎	パールホワイト	N8.5	草花文？	―	畳付釉剥ぎ	肥前	―	17c～	
	100	SD2	陶器	中皿	21.6	―	(2.3)	灰白	5Y7/1	銅緑釉・鉄釉	総釉。口縁部銅緑釉	オリーブグリーン˜サックスブルー・焦茶・キャメル	3GY3.5/5.0 ～5B5.5/5.0 8YR2.5/1.5 4YR5.5/6.5	内面鉄釉刷毛目文	―	―	肥前	武雄	17c～	
	101	SD2	陶器	皿	―	―	(3.7)	灰白	2.5Y8/1	銅緑釉	内面：銅釉, 外面：灰釉。胴部下位露胎。	(内)オリーブグリーン(外)鳥の子色	3GY3.5/5.0 5Y9.0/2.0	―	蛇の目釉剥ぎ	―	肥前	内野山	17c中～	
	102	SD2	陶器	植木鉢	―	―	―	にぶい赤褐	5YR5/3	鉄釉	総釉	焦茶	8YR2.5/1.5	胴部草花沈線文	―	―	肥前	―	17c中～	
	103	SD2	陶器	碗	11.3	4.5	5.85	灰白	2.5Y8/1	透明釉	総釉	オイスター	5Y7.5/1.0	―	貫入	畳付釉剥ぎ	薩摩	竪野	17c後～	

第5表　近世の遺物２（陶磁器）

挿図番号	掲載番号	遺構層	種別	器種	法量			胎土色調		釉調		施釉色調		装飾等	技法/特徴	高台/底部	産地	窯	年代	備考
					口径	底径	器高	色名	マンセル	釉調	施釉	色名	マンセル							
27	104	SD2	陶器	碗	7.9	4	5	灰白	5Y8/1	透明釉	総釉	アイボリーホワイト	5Y9.0/1.0	千鳥文	―	畳付釉剥ぎ	薩摩	竪野	18c～	千鳥文定形前？
	105	SD2	陶器	碗	9.4	―	―	灰白	2.5Y8/1	透明釉	総釉。口縁部内面釉剥ぎ。	アイボリーホワイト	5Y9.0/1.0	千鳥文？	貫入	―	薩摩	竪野	17c中～	千鳥文定形前？
	106	SD2	陶器	皿	10.2	6.2	2.6	灰白	7.5Y8/1	透明釉	総釉。口唇部鉄釉	パールホワイト	N8.5	―	―	―	薩摩	竪野	17c中～	
	107	SD2	陶器	碗	11	5.2	6.4	灰白	5Y8/1	灰釉	総釉	オイスター	5Y7.5/1.0	轆轤目	―	畳付釉剥ぎ	薩摩	山元・龍門司	17c中～	陶質磁器
	108	SD2	陶器	碗	―	4.4	―	灰白	5Y8/1	茶飴釉	総釉	アンテックブラウン～黒柿	4YR3.0/6.0 ～4R2.0/1.5	轆轤目	目跡	畳付目跡	薩摩	山元？	17c中～	胎土精緻。焼成良。鉄分微粒極少含む
	109	SD2	陶器	碗	10.4	4.6	6.0	灰白	2.5Y8/2	茶飴釉	高台露胎	ブロンズ¨コーヒーブラウン	5Y4.0/5.5 ～8YR3.5/6.0	轆轤目	目跡	畳付～内面露胎	薩摩	山元	17c中～	二次焼成。鉄分微粒極少含む
	110	SD2	陶器	碗	10.4	3.8	4.9	にぶい黄橙	10YR5/3	茶飴釉	高台露胎	(内)コーヒーブラウン(外)アンテックブラウン	8YR3.5/6.0 4YR3.0/6.0	―	蛇の目釉剥ぎ	畳付～内面露胎	薩摩	龍門司	18c前～	鉄分微粒含む。
	111	SD2	陶器	皿	10	4.4	2.6	にぶい褐	7.5YR6/3	茶飴釉	胴部～底部露胎	コーヒーブラウン～焦茶	8YR3.5/6.0 ～8YR2.5/1.5	―	目跡	胴部～底部目跡。糸切底	薩摩	龍門司	17c中～	二次焼成。外面煤付着。轆轤右回転。
28	112	SD2	陶器	筒形碗	8.1	3.8	6.5	浅黄橙	10YR8/3	黄飴釉	総釉	ラセットゴールド	2Y4.0/5.5	轆轤目	―	畳付釉剥ぎ	薩摩	山元	17c中～	
	113	SD2	陶器	鉢	25.8	―	―	灰白	10YR8/1	白化粧土・透明釉	総釉	オイスター	5Y7.5/1.0	轆轤目	蛇の目釉剥ぎ	―	薩摩	龍門司	17c中～	初期龍門司。P086と形態類似。
	114	SD2	陶器	壺	10.4	―	―	灰白	10YR7/1	黄飴釉	総釉	ラセットゴールド～焦茶	2Y4.0/5.5 ～8YR2.5/1.5	轆轤目	口唇部釉剥ぎ	―	薩摩	山元	17c中～	
	115	SD2	陶器	風炉	―	8.2	―	浅黄橙	7.5YR8/3	黄飴釉	総釉。底部掻き取り。	―	―	轆轤目	―	糸切底。砂付着。	薩摩	山元	17c中～	轆轤右回転。
	116	SD2	陶器	灯立	―	―	―	灰	2.5YR8/2	黄飴釉	外面総釉。内面露胎	(内)ゴールド(外)ゴールド～からし色	2Y5.5/10.5 2Y5.5/10.5 ～5Y6.0/10.5	轆轤目	―	―	薩摩	山元	17c中～	
	117	SD2	陶器	灯立	―	8.6	―	灰白	10YR8/1	黄飴釉	外面総釉。内面露胎	コーヒーブラウン	8YR3.5/6.0	轆轤目	―	畳付露胎。砂付着	薩摩	山元	17c中～	
30	126	SD3	磁器	碗	9.7	3.6	5	灰白	N8/	透明釉	総釉	ブルーウォッシュ	3PB8.5/1.0	界線。見込み「太〇太〇」	―	畳付釉剥ぎ	中国?	景徳鎮？	17c後～	銘款：太〇
	127	SD2	磁器	碗	―	3.2	―	灰白	N8/	透明釉	総釉	ブルーウォッシュ·濃藍	3PB8.5/1.0 3PB2.0/5.0	外面草花文？	―	畳付釉剥ぎ	中国	景徳鎮	17c後～	銘款：太明
	128	SD2	磁器	皿	―	4	―	灰白	N8/	透明釉	総釉・畳付釉剥ぎ	藍白・濃藍	5B8.5/2.0 3PB2.0/5.0	内面：大明成	―	―	中国	景徳鎮	17c中～	銘款：大明成化年製
	129	SD2	磁器	皿	16.6	―	―	灰白	2.5Y8/1	透明釉	総釉	サロー	5Y7.5/2.0	―	―	―	肥前	―	17c後～	
	130	SD3	陶器	碗	18	5.1	4.15	淡黄	2.5Y8/3	透明釉	総釉	ベージュ	8YR7.5/2.5	―	―	―	肥前	―	17c後～	
	131	SD3	磁器	香合	7.8	3.6	3.3	灰白	2.5Y8/2	透明釉	受け部・高台：露胎	油色	5Y6.0/6.0	―	―	高台畳付～内面露胎	薩摩	竪野	17c後～	
	132	SD3	磁器	筒形碗	10.2	5.6	7.3	灰白	5Y8/1	透明釉	総釉	鳥の子色	5Y9.0/2.0	―	―	畳付釉剥ぎ	薩摩	竪野	17c後～	
	133	SD3	磁器	煎茶碗	7.8	3.8	4.8	灰白	5Y8/1	透明釉	総釉	パールホワイト	N8.5	―	―	畳付釉剥ぎ	薩摩	竪野	18c後半～	
	134	SD3	磁器	碗	―	4.1	―	灰白	N7/	透明釉	総釉	フロスティグレイ	3G7.5/1.0	―	見込み目跡	畳付釉剥ぎ	薩摩	山元	17c後～	
	135	SD3	陶器	擂鉢	―	―	―	灰褐	7.5YR4/2	鉄釉	外面～内面口縁部施釉。内面胴部露胎	シダーグリーン	5Y2.5/1.5	―	―	―	肥前	―	17c後～	
	136	SD3	陶器	擂鉢	―	―	―	にぶい赤褐	5YR5/4	鉄釉	外面～内面口縁部施釉。内面胴部露胎	焦茶	8YR2.5/1.5	―	―	―	肥前	―	17c後～	
	137	SD3	陶器	皿	15.3	4.8	3.8	灰白	2.5Y8/1	透明釉	総釉	ハニースイート	2Y7.5/6.0	―	見込み目跡	畳付砂目	肥前	―	17c中～	
	138	SD3	陶器	碗	12.8	4.8	5.95	浅黄橙	7.5YR8/3	黄飴釉	総釉	ラセットゴールド	2Y4.0/5.5	―	蛇の目釉剥ぎ	畳付釉剥ぎ	薩摩	龍門司	17c後～	
	139	SD3	陶器	小碗	9	4.2	4.5	にぶい橙	7.5YR7/4	黄飴釉	総釉	ラセットゴールド	2Y4.0/5.5	―	蛇の目釉剥ぎ	畳付釉剥ぎ	薩摩	龍門司	17c後～	
	140	SD3	陶器	碗	11	4.4	6.65	橙	5YR7/6	鉄釉	腰部～高台露胎	黒柿色	4R2.0/1.5	―	見込み砂付着	露胎	薩摩	龍門司	18c～	
	141	SD3	陶器	碗	12.6	6.4	6.8	灰	5Y6/1	鉄砂釉	高台露胎	コーヒーブラウン	8YR3.5/6.0	―	見込み砂付着	露胎	薩摩	龍門司	18c～	
	142	SD3	陶器	香炉	8.6	3.9	3.5	浅黄橙	10YR8/3	茶飴釉	腰部～高台露胎。内面露胎。	ラセットゴールド	2Y4.0/5.5	―	―	露胎	薩摩	山元	17c後～	
31	143	SD3	陶器	皿	9.6	4.5	2.3	灰	6/N	黄飴釉	胴部以下露胎	ブロンズ	5Y4.0/5.5	―	目跡	底部目跡	薩摩	初期龍門司	17c後～	
	144	SD3	陶器	擂鉢	36	―	―	灰褐	7.5YR4/2	鉄釉	口唇部露胎・貝目。	焦茶	8YR2.5/1.5	―	目跡	―	薩摩	堂平	17c後～	
	145	SD3/SD3	陶器	蓋	38.6	―	―	明赤褐	2.5YR5/6	灰釉	内外面施釉。口唇部露胎・貝目。	シルバーグレイ	―	把手	―	―	薩摩	堂平	17c後～	
37	163	SX2	磁器	碗	10.3	3.8	5.1	灰白	5Y8/1	透明釉	総釉・畳付釉剥ぎ	リリーホワイト・濃藍	3G9.0/1.0 3PB2.0/5.0	外面：格子文、内面：虫文	―	―	薩摩	弥勒	19c～	
	164	SX2/SX1/SX4	陶器	碗	11.6	5	6.9	灰白	7.5Y8/1	透明釉	総釉・畳付釉剥ぎ	オイスター	5Y7.5/1.0	―	―	―	薩摩	竪野	17c後～	
	165	SX2	陶器	碗	10.4	4.7	5.8	灰白	2.5Y8/1	黄飴釉	畳付露胎	ゴールド	2Y5.5/10.5	―	―	―	薩摩	初期龍門司	17c中～	
	166	SX2/Ⅰ	陶器	鉢	23.6	8.2	11.5	浅黄橙	7.5YR8/3	黄飴釉	畳付露胎	(内)ゴールド(外)枯れ葉	2Y5.5/10.5, 8YR4.5/6.0	轆轤目	蛇の目釉剥ぎ＋目跡	―	薩摩	初期龍門司	17c中～	
	167	SX2	陶器	小壺	3.2	―	―	淡黄	2.5Y8/3	鉄釉	内面露胎	焦茶	8YR2.5/1.5	―	―	―	薩摩	初期龍門司	17c中～	
	168	SX2	陶器	壺	12	―	―	黄灰	2.5Y4/1	灰釉	総釉	シダーグリーン	5Y2.5/1.5	―	―	―	薩摩	堂平	17c後～	

第6表　近世の遺物３（陶磁器）

挿図番号	掲載番号	遺構層	種別	器種	法量			胎土色調		釉調		施釉色調		装飾等	技法/特徴	高台/底部	産地	窯	年代	備考
					口径	底径	器高	色名	マンセル	釉調	施釉	色名	マンセル							
	169	SX2	陶器	植木鉢	－	－	－	褐灰	5YR5/1	無釉	－	－	－	外面：花スタンプ文＋櫛目文	－	－	薩摩	堂平	17c後～	
37	171	SX4	磁器	稜花碗	10.4	－	－	灰白	N8/	透明釉	総釉	フロスティグレイ・濃藍	3G7.5/1.0 3PB2.0/5.0	外面：馬文，内面：印花文	－	－	中国	景徳鎮	17ｃ～	
	172	SX4	陶器	蓋	30.7	－	5.2	灰褐	5YR6/2	灰釉	口縁部釉剥ぎ	焦茶	8YR2.5/1.5	－	口唇部貝目	－	薩摩	堂平	17c後～	
	175	SX５/SD2	陶器	壺	11	－	－	黄灰	2.5Y5/1	鉄釉	総釉	シダーグリーン	5Y2.5/1.5	－	内面：同心円当て具痕	－	薩摩	堂平	17c後～	堂平2期。
38	176	SX7	磁器	碗	17.6	7.9	8.7	灰白	N8/	透明釉	総釉・畳付釉剥ぎ	シルバーグレイ	N7.5	－	－	割高台	薩摩	竪野	17c後～	
	177	SX7	陶器	擂鉢	18.6	7.1	9	にぶい橙	5YR7/3	鉄釉	口縁部内外面施釉	シダーグリーン	5Y2.5/1.5	－	－	－	肥前	－	17c後～？	植木鉢転用
	180	SX10	陶器	碗	14.2	5.2	5.9	灰白	2.5Y8/2	透明釉	総釉・畳付釉剥ぎ	ハニースイート	2Y7.5/6.0	－	貫入	－	肥前	－	17c後～？	
	181	SX10	陶器	碗	－	5	－	灰白	10YR8/1	黄飴釉	総釉・畳付釉剥ぎ	コーヒーブラウン	8YR3.5/6.0	－	蛇の目釉剥ぎ	－	薩摩	龍門司	17c後～	
	182	SX10	陶器	碗	－	4.4	－	黄灰	2.5Y6/1	黄飴釉	総釉	ラセットゴールド	2Y4.0/5.5	－	内面：目跡	畳付：砂目	薩摩	山元	17c中～	
	184	SX11	磁器	皿	－	2.8	－	灰白	N8/	透明釉	総釉・底部釉剥ぎ	鉄紺	5B2.5/4.5	外：芭蕉文，内面：草花文＋鳥	－	碁笥底	中国	景徳鎮？	15c～	
39	185	SX11	磁器	角皿	－	－	－	灰白	N8/	透明釉	総釉	ムーンライトブルー	3PB8.0/2.0	内面：雲文	－	－	中国	景徳鎮	17c～	
	186	SX11	磁器	瓶	－	3.8	－	灰白	N8/	透明釉	外面：施釉，内面：釉垂れ	(内)シルバーグレイ(外)ブルーウオッシュ	N7.5 3PB8.5/1.0	外：草花文	－	－	中国	景徳鎮	17c～	
	187	SX11	磁器	小瓶	3.1	－	－	灰白	N8/	透明釉	外面：施釉，内面：露胎	スノウホワイト	N9.5	外面：赤絵	－	－	中国？	景徳鎮？	17c～？	
	188	SX11	陶器	壺	10.4	－	－	灰白	5Y7/1	鉄釉	外面：施釉，内面：釉垂れ	焦茶	8YR2.5/1.5	－	－	－	薩摩	龍門司	17c後～	
	193	SX12	陶器	鉢？	29.4	－	－	橙	2.5YR6/6	灰釉	口縁部釉剥ぎ	オイスター	5Y7.5/1.0	－	口唇部：貝目	－	薩摩	堂平	17c後～	二次焼成
	202	Ⅴ	磁器	皿	－	8	－	灰白	N8/	透明釉	総釉	フロスティグレイ	3G7.5/1.0	内：草花文？	－	畳付釉剥ぎ	中国	景徳鎮	17c中～	
	203	Ⅴ	磁器	皿	－	8.4	－	灰白	5Y8/1	透明釉	総釉	フロスティグレイ	3G7.5/1.0	内：印花文	－	畳付釉剥ぎ	中国	景徳鎮	17c中～	
	204	Ⅴ	磁器	蓋	6.1	庇径7.8	2.6	灰白	N8/	透明釉	庇露胎	スノウホワイト	N9.5	外：草花文	－	－	－	－	－	
42	205	Ⅴ/Ⅱ	磁器	蓋	11.6	庇径13.8	－	灰白	N8/	透明釉	庇露胎	藍白	5B8.5/2.0	外：草花文	－	－	肥前？	－	17c後～	
	206	Ⅴ	磁器	大鉢	40.0	18.5	19	灰白	5Y7/1	透明釉	総釉	ストレートグリーン	3G4.0/2.0	外：草花文	－	砂付着	薩摩	竪野？	17c後半～	
	207	Ⅴ	磁器	稜花皿	－	－	－	黄灰	2.5Y6/1	透明釉	総釉	ストレートグリーン	3G4.0/2.0	－	－	－	中国	龍泉窯系	15c～	
	208	Ⅴ	磁器	碗	－	－	－	灰白	N8/1	透明釉	総釉	油色	5Y6.0/6.0	－	－	－	中国	龍泉窯系	15c～	上田E類
	209	Ⅴ	陶器	壺	17.2	－	－	灰白	2.5Y7/1	灰釉	外面：施釉，内面：釉垂れ	鳶色・焦茶	4YR4.0/2.0 8YR2.5/1.5	－	－	－	薩摩	堂平	17c中～	堂平2期。
	213	Ⅳ	磁器	碗	－	7.2	－	灰白	N8/	透明釉	総釉	リリーホワイト・濃藍	3G9.0/1.0 3PB2.0/5.0	外：草花文	－	畳付釉剥	肥前	－	17c後～	
	214	Ⅳ	陶器	碗	－	4.5	－	灰白	5Y8/1	銅緑釉	高台以外総釉	(内)ゴールド(外)さびあさぎ	2Y5.5/10.5 5BG4.5/5.0	－	－	高台露胎	肥前	内野山	17c後～	内：黄色釉
	215	Ⅳ	陶器	碗	－	4.2	－	灰白	N7/	銅緑釉	総釉	(内)サロー(外)わすれなぐさ	5Y7.5/2.0 3PB6.5/5.5	－	－	高台内露胎	肥前	内野山	17c後～	内：透明釉
	216	Ⅳ	陶器	鉢	－	6.8	－	灰白	5Y8/1	銅緑釉	総釉	(内)納戸色～モスグリーン(外)サロー	5B4.0/5.0～3GY5.5/5.5 5Y7.5/2.0	－	蛇の目釉剥ぎ	高台内露胎	肥前	内野山	17c後～	外：透明釉
	217	Ⅳ	陶器	鉢	－	－	－	にぶい赤褐	2.5YR4/4	鉄釉	総釉	(内)モスグリーン～ボトルグリーン(外)焦茶	3GY5.5/5.5～3G3.0/4.5, 8YR2.5/1.5	白化粧土・銅緑釉・松文	－	－	肥前	武雄	17c後～	
43	218	Ⅳ	陶器	鉢	－	－	－	褐白	5YR6/1	銅緑釉鉄釉	胴部下半露胎	(内)サロー~油色＋白泥(外)油色	5Y7.5/2.0～5Y6.0/6.0, 5Y6.0/6.0	白化粧土	－	－	肥前	武雄	17c後～	
	219	Ⅳ	陶器	碗	－	5	－	灰白	7.5Y8/1	透明釉	総釉	アイボリホワイト	5Y9.0/1.0	－	－	畳付釉剥	薩摩	竪野	17c中～	
	220	Ⅳ	陶器	碗	9.8	4.2	5.6	淡黄橙	10YR8/3	黄飴釉	総釉	ラセットゴールド	2Y4.0/5.5	－	蛇の目釉剥ぎ	畳付釉剥	薩摩	龍門司	17c後～	
	221	Ⅳ	陶器	碗	－	5.2	－	浅黄橙	10YR8/4	茶飴釉	総釉	－	－	轆轤目	蛇の目釉剥ぎ	畳付釉剥	薩摩	龍門司	17c後～	
	222	Ⅳ	陶器	碗	－	7	－	にぶい黄橙	10YR7/2	鉄釉	総釉	焦茶	8YR2.5/1.5	－	蛇の目釉剥ぎ	畳付釉剥	薩摩	龍門司	17c後～	
	223	Ⅳ	陶器	筒形碗	7.6	－	－	灰白	N8/	黄飴釉	総釉	ゴールド	2Y5.5/10.5	轆轤目	－	－	薩摩	山元	17c中～	
	224	Ⅳ	陶器	皿	9.6	3.8	2.9	にぶい赤褐	2.5YR4/3	茶飴釉	外面：露胎，内面：施釉	鳶色	4YR4.0/2.0	－	－	糸切底	薩摩	龍門司	17c後～	轆轤右回転。
	225	Ⅳ	陶器	サヤ	16.2	15.7	7.3	褐灰	7.5YR5/1	－	－	アンティークブラウン	4YR3.0/6.0	－	－	－	－	－	－	
	226	Ⅳ	陶器	擂鉢	－	－	－	明赤褐	2.5YR5/6	鉄釉	口縁部内外のみ	茶ねずみ	4YR5.0/1.0	－	胎土に白色粒多く含む	－	－	山元	17c中～	
	251	Ⅱ	磁器	蓋	10.4	11.6	－	灰白	7.5Y8/1	透明釉	庇露胎	パールホワイト	N8.5	草花文	－	－	中国？	－	17c後～	
	252	Ⅱ	磁器	小壺	3.6	－	－	灰白	7.5Y8/1	透明釉	外面施釉	フロスティグレイ	3G7.5/1.0	－	－	－	中国	－	17c中～	
	253	Ⅱ	陶器	壺	－	－	－	灰白	2.5Y8/1	黄飴釉	口縁部内面露胎	ゴールド	2Y5.5./10.5	轆轤目	－	－	薩摩	山元	17c中～	
47	254	Ⅱ	陶器	鉢	－	－	－	灰	N4/	灰釉	白化粧土・三島手	(内)鳥の子色～シダーグリーン(外)シダーグリーン	5Y9.0/2.0～5Y2.5/1.5, 5Y2.5/1.5	格子・波文	－	－	肥前	唐津	17c後～	
	255	Ⅱ	陶器	鉢	－	－	－	赤	10R5/6	鉄釉	総釉	マホガニー	4R2.5/6.0	波状文	－	－	肥前	－	17c後～	
	256	Ⅱ	陶器	瓶	－	－	－	灰白	5Y8/1	呂宋釉	外面施釉・内面露胎	(外)ボトルグリーン～鳥の子色	3G3.0/4.5～5Y9.0/2.0	獅子把手	－	－	瀬戸	－	18ｃ～	
	257	Ⅱ	陶器	甕	32	－	－	灰赤	2.5YR4/2	灰釉	口縁部釉剥ぎ	焦茶	8YR2.5/1.5	－	口唇部貝目	－	薩摩	堂平	17c中～	

第7表　近世の遺物４（陶磁器）

挿図番号	掲載番号	遺構層	種別	器種	法量			胎土色調		釉調		施釉色調		装飾等	技法/特徴	高台/底部	産地	窯	年代	備考
					口径	底径	器高	色名	マンセル	釉調	施釉	色名	マンセル							
47	258	Ⅱ	陶器	甕	40	―	―	灰褐	7.5R5/2	灰釉	口縁部釉剥ぎ	焦茶	8YR2.5/1.5	―	―	―	薩摩	堂平	17c中～	
49	275	Ⅰ	磁器	稜花皿	―	―	―	灰白	5Y7/1	透明釉	総釉	ブロンズ	5Y4.0/5.5	内外面：草花文	―	―	中国	龍泉窯系	15c～？	青磁
	276	Ⅰ	磁器	壺？	5	―	―	灰白	5Y7/1	透明釉	総釉	モスグリーン	3GY5.5/5.5	―	―	―	中国	龍泉窯系	15c～？	青磁
	277	Ⅰ/Ⅴ	磁器	香炉	―	8.6	―	灰白	7.5YR8/1	透明釉	総釉	白緑	3G8.5/2.0	―	―	露胎・赤色化	中国	龍泉窯系	15c～？	青磁
	278	Ⅰ	磁器	盤	―	―	―	灰白	7.5Y7/1	透明釉	総釉	ミストグリーン	3GY7.5/2.0	―	―	―	中国	龍泉窯系	15c～	青磁。二次焼成
	279	Ⅰ	磁器	碗	―	5.6	―	灰白	5Y8/1	透明釉	総釉・高台釉剥	フロスティグレイ	3G7.5/1.0	内外面：草花文	―	高台釉剥	中国	景徳鎮	16c後～	
	280	Ⅰ	磁器	皿	―	3.2	―	灰白	2.5Y8/1	透明釉	総釉・底部釉剥	フロスティグレイ	3G7.5/1.0	内面：草花文	蓴筍底	底部釉剥	中国	―	16c～	
	281	Ⅰ	磁器	碗	12.6	―	―	灰白	N8/	透明釉	総釉	フロスティグレイ	3G7.5/1.0	―	―	―	中国	景徳鎮	17c～	
	282	Ⅰ	磁器	碗	―	4.6	―	灰白	N8/	透明釉	総釉・高台釉剥	フロスティグレイ	3G7.5/1.0	外面：草花文	―	高台釉剥・砂付着	中国	景徳鎮	17c～	
	283	Ⅰ	磁器	皿	―	6.8	―	灰白	N8/	透明釉	総釉	ブルーウオッシュ	3PB8.5/1.0	内面：草花文	―	畳付釉剥	中国	―	16c後～	
	284	Ⅰ	磁器	皿	―	4.2	―	灰白	2.5Y8/1	透明釉	―	(内)パールホワイト(外)フロスティグレイ	N8.5 3G7.5/1.0	○明成○年製	―	畳付釉剥	中国	―	17ｃ中～	銘款：大明成化年製
	285	Ⅰ	磁器	角皿	7.6	4	2.45	灰白	2.5Y8/1	透明釉	総釉	濃藍・フロスティグレイ	3PB2.0/5.0 3G7.5/1.0	印花文	―	畳付釉剥	肥前	―	19c～	
	286	Ⅰ	磁器	長頸壺	―	―	―	灰白	N8/	透明釉	総釉	フロスティグレイ	3G7.5/1.0	草花文	―	―	中国	景徳鎮	17c後～	
	287	Ⅰ	磁器	蓋	8.8	庇径10.4	―	灰白	N8/	透明釉	庇露胎	パールホワイト・濃藍	N8.5 3PB2.0/5.0	松文	―	―	中国？	―	17c後～	
	288	Ⅰ	磁器	蓋	11.8	庇径12.9	―	灰白	5Y8/1	透明釉	庇露胎	ブルーウオッシュ	3PB8.5/1.0	草花文	―	―	中国？	―	17c後～	
	289	Ⅰ	磁器	蓋	11.0	―	―	灰白	N8/	透明釉	内面下位釉剥ぎ	パールホワイト	N8.5	草花文	―	―	肥前	―	18c～	
	290	Ⅰ	陶器	蓋	14	庇径15.7	―	灰白	N7/	透明釉	庇露胎	(内)オイスター(外)オイスター～黒緑	5Y7.5/1.0, 5Y7.5/1.0 ～3G2.0/1.5	鉄絵格子文	―	―	タイ	―	17c～	宋胡
	291	Ⅰ	陶器	便器	―	―	―	灰白	2.5Y7/1	透明釉	総釉	―	―	雷文・唐草文	―	―	瀬戸	―	18c～	
	292	Ⅰ	陶器	鉢	28.0	10.3	8.4	橙	2.5YR6/6	銅緑釉	総釉	(内)ボトルグリーン～フォレストグリーン(外)ローズストーン	3G3.0/4.5 ～9G2.5/4.5, 4R4.0/2.0	―	―	畳付釉剥	肥前	武雄	17c後～	
50	293	Ⅰ	陶器	碗	―	4.8	―	灰白	2.5Y8/2	銅緑釉	総釉	(内)さびあさぎ(外)オリーブグリーン	5BG4.5/5.0 3GY3.5/5.0	―	―	畳付砂目	肥前	内野山	17c中～	
	294	Ⅰ	陶器	擂鉢	―	―	―	にぶい橙	2.5YR6/4	無釉	全面露胎	ハバナローズ	4R4.5/6.5	―	―	―	備前	―	17c中～	備前2期
	295	Ⅰ	陶器	碗	11	5.4	6	灰白	2.5Y7/1	透明釉	総釉	オイスター	5R7.5/1.0	―	―	畳付釉剥	薩摩	竪野	18ｃ～	
	296	Ⅰ	陶器	碗	―	4	―	灰白	5Y8/1	透明釉	総釉	鳥の子色	5Y9.0/2.0	―	―	畳付釉剥	薩摩	竪野	18ｃ～	千鳥文
	297	Ⅰ	陶器	小坏	3.5	1.2	3.5	灰白	5Y8/1	透明釉	口唇部～内面露胎	メロンイエロー	8Y7.5/5.5	「立の」	―	―	薩摩	竪野	17c中～	
	298	Ⅰ	陶器	碗	―	4.4	―	灰白	2.5Y8/1	黄飴釉	総釉	ゴールド	2Y5.5/10.5	―	目跡	畳付釉剥ぎ	薩摩	山元	17c中～	
	299	Ⅰ	陶器	小碗	―	3.4	―	灰白	10YR8/2	黄飴釉	総釉	ゴールド	2Y5.5/10.5	―	目跡	畳付釉剥ぎ	薩摩	山元	17c中～	
	300	Ⅰ	陶器	碗	―	6.0	―	浅黄橙	10YR8/4	黄飴釉	総釉	アンティークブラウン	4YR3.0/6.0	―	目跡	畳付釉剥ぎ。目跡	薩摩	山元	17c中～	
	301	Ⅰ	陶器	碗	―	4.7	―	灰白・橙	2.5Y7/ 7.5YR6/6	茶飴釉	総釉	セラットゴールド	2Y4.0/5.5	―	蛇の目釉剥ぎ＋目跡痕	畳付釉剥	薩摩	龍門司	17c後～	初期龍門司
	302	Ⅰ	陶器	碗	12.6	5	6.1	灰白	7.5YR8/2	黄飴釉	総釉	ゴールド	2Y5.5/10.5	―	蛇の目釉剥ぎ	畳付釉剥・砂付着	薩摩	龍門司	17c後～	初期龍門司
	303	Ⅰ	陶器	碗	―	4.6	―	灰白	7.5Y8/1	黄飴釉	総釉	コーヒーブラウン	8YR3.5/6.0	―	蛇の目釉剥ぎ	畳付釉剥・砂付着	薩摩	龍門司	17c後～	
	304	Ⅰ	陶器	碗	11.3	4.8	4.65	にぶい橙	2.5YR6/4	鉄釉	総釉	黒柿色	4R2.0/1.5	―	蛇の目釉剥ぎ	高台露胎	薩摩	龍門司	18ｃ～	
	305	Ⅰ	陶器	皿	13	4.2	3.1	灰白	N8/	黄飴釉	総釉	コーヒーブラウン	8YR3.5/6.0	―	―	畳付釉剥	薩摩	龍門司	17c後～	
	306	Ⅰ	陶器	皿	13.8	4.8	4	灰白	2.5Y8/2	黄飴釉	総釉	枯葉色	8YR4.5/6.0	―	蛇の目釉剥ぎ	畳付釉剥・砂付着	薩摩	龍門司	17c後～	
	307	Ⅰ	陶器	壺	―	7	―	灰白	N8/	鉄釉	外面白化粧土・鉄釉	トープ	4YR3.0/1.0	白化粧土刷毛	―	高台露胎	薩摩	龍門司	19c～	
	308	Ⅰ	陶器	蓋	5.7	庇径7.6	3	にぶい赤橙	10R6/3	茶飴釉	庇～内面露胎	ラセットゴールド	2Y4.0/5.5	―	―	―	薩摩	龍門司	18c中～	
	309	Ⅰ	陶器	蓋	9	庇径12.6	―	にぶい赤褐	5YR5/4	灰釉	庇～内面露胎	コーヒーブラウン	8YR3.5/6.0	―	―	―	薩摩	苗代川	18c中～	
	310	Ⅰ	陶器	徳利	4.6	―	―	褐灰	5YR5/1	灰釉	総釉	灰汁色	5Y5.0/1.0	―	―	―	薩摩	堂平	17c中～	
	311	Ⅰ	陶器	片口鉢	―	―	―	黄灰	2.5Y5/1	灰釉	総釉	油色	5Y6.0/6.0	―	―	―	薩摩	堂平	17c前～	堂平1期
	312	Ⅰ	陶器	水注	―	―	―	にぶい褐	7.5YR5/3	茶飴釉	総釉	アンテックブラウン	4YR3.0/6.0	―	―	―	薩摩	堂平？龍門司？	17c後～	
51	313	Ⅰ	陶器	擂鉢	32.2	9	13.7	明赤褐	2.5YR5/6	灰釉	口唇部露胎	茶ねずみ	4YR5.0/1.0	―	口唇部貝目	―	薩摩	堂平	17c中～	
	314	Ⅰ	陶器	擂鉢	24	10	11.4	にぶい赤褐	2.5YR4/4	灰釉	口唇部露胎	茶ねずみ	4YR5.0/1.0	―	口唇部貝目	―	薩摩	堂平	17c中～	
	315	Ⅰ	陶器	擂鉢	28	―	―	にぶい赤褐	2.5YR5/3	灰釉	口唇部露胎	焦茶	8YR2.5/1.5	―	―	―	薩摩	苗代川	18c中～	
	316	Ⅰ	陶器	擂鉢	―	―	―	にぶい赤褐	2.5YR5/4	灰釉	口唇部露胎	焦茶	8YR2.5/1.5	―	―	―	薩摩	苗代川	18c中～	
	317	Ⅰ	陶器	植木鉢	―	―	―	にぶい赤褐	5YR5/3	灰釉	総釉	シダーグリーン	5Y2.5/1.5	―	―	―	薩摩	堂平	17c中～	
	318	Ⅰ	陶器	壺	17.3	―	―	灰褐	7.5YR5/2	灰釉	総釉	ラセットゴールド	2Y4.0/5.5	―	口唇部貝目	―	薩摩	堂平	17c中～	

第8表　近世の遺物５（陶磁器）

挿図番号	掲載番号	遺構層	種別	器種	法量			胎土色調		釉調		施釉色調		装飾等	技法/特徴	高台/底部	産地	窯	年代	備考
					口径	底径	器高	色名	マンセル	釉調	施釉	色名	マンセル							
51	319	Ⅰ	陶器	土管	7	−	−	明赤褐	2.5YR5/6	灰釉	外面施釉・内面露胎	ラセットゴールド 焦茶	2Y4.0/5.5 8YR2.5/1.5	−	−	−	薩摩	苗代川	19c〜	
	320	Ⅰ	陶器	植木鉢	−	9.5	−	暗灰	N3/3	灰釉	外面：施釉, 内面・底部：露胎	アンテックブラウン	4YR3.0/6.0	−	−	−	薩摩	龍門司？	18c中〜	

第9表　近世の遺物６（土師器・瓦質土器）

挿図番号	掲載番号	遺構層	種別	器種	法量			胎土色調	
					口径	底径	器高	色名	マンセル
13	20	P5	瓦質土器	坏	13.6	10	2.65	橙	7.5YR6/6
17	52	SD1	瓦質土器	焙烙	22	16	4.15	にぶい橙	5YR7/4
	53	SD1	土師器	皿	15.4	9.2	2.5	にぶい橙	7.5YR7/3
	54	SD1	土師器	皿	14	7	2.55	灰白	7.5YR8/2
	55	SD1	土師器	皿	13.7	8.4	3.15	灰白	10YR8/1
	56	SD1	土師器	皿	12.2	9	2.3	灰黄褐	10YR6/2
	57	SD1	土師器	蓋	9.4	−	3.5	灰褐	7.5YR5/2
28	118	SD2	瓦質土器	焙烙	19.6	14.5	4.7	にぶい黄橙	10YR7/2
	119	SD2	瓦質土器	火入	14.5	−	−	浅黄橙	10YR8/3
	120	SD2	瓦質土器	香炉	14.4	10.6	6.8	橙	7.5YR7/6
	121	SD2	土師器	皿	11.8	8.3	2.9	灰黄	2.5Y7/2
	122	SD2	土師器	皿	10.6	7.2	2.5	褐灰	10YR4/1
	123	SD2	土師器	皿	9.4	7.3	2.4	浅黄橙	10YR8/3
31	146	SD3	土師器	皿	10.9	8.8	2.15	にぶい橙	7.5YR7/3
	147	SD3	土師器	皿	12	9.4	2.05	橙	5YR7/6
36	156	SX1	土師器	皿	11	8.2	2.45	灰白	10YR8/1
39	189	SX11	土師器	皿	12	9	2.4	浅黄橙	10YR8/3
43	227	Ⅴ	瓦質土器	五徳	20	−	−	にぶい黄橙	10YR7/4
	228	Ⅳ	土師器	皿	12.4	8.2	2.3	浅黄橙	10YR8/3
	229	Ⅳ	土師器	皿	10	6.8	2.2	淡黄	2.5Y8/3
	230	Ⅳ	土師器	皿	14.3	8.8	3	(内) 黒 (外) 浅黄橙	10YR1.7/1, 10YR8/3
	231	Ⅳ	土師器	皿	9.4	7.5	2.5	浅黄橙	10YR8/3
47	259	Ⅱ	土師器	皿	11.6	7.2	2.2	浅黄橙	10YR8/3
	260	Ⅱ	土師器	皿	11.6	8	2.4	浅黄橙	10YR8/3
	261	Ⅱ	土師器	皿	8.6	5.4	2.5	浅黄橙	10YR8/3
	262	Ⅱ	土師器	皿	4.7	3.1	1.7	灰白	10YR7/1
51	321	Ⅰ	瓦質土器	五徳	9.7	−	−	浅黄橙	10YR8/4
	322	Ⅰ	土師器	坏	16.2	9.4	3	灰白	7.5YR8/2
	323	Ⅰ	土師器	坏	14.4	8.6	2.65	浅黄橙	10YR8/3
	324	Ⅰ	土師器	坏	13.6	8.6	2.4	浅黄橙	10YR8/3
	325	Ⅰ	土師器	坏	14	9.5	2.7	浅黄橙	10YR8/4
	326	Ⅰ	土師器	坏	13.6	9.3	3.15	灰白	10YR8/2
	327	Ⅰ	土師器	皿	10.4	7.6	2.6	灰白	10YR8/2
	328	Ⅰ	土師器	皿	10.2	6.4	2.9	浅黄橙	10YR8/3

第10表　近世の遺物７（金属製品・石製品）

挿図番号	掲載番号	遺構層	種別	器種	法量（cm）			備考
					長さ	幅	厚さ	
17	58	SD1	金属製品	キセル	8.7	0.7	0.05	
	59	SD1	金属製品	キセル	6.2	1.0	0.05	
31	148	SD3	鉄製品	キセル	5.4	0.8	0.1	
51	329	Ⅰ	鉄製品	砲弾	2.6	1.5	0.1	
52	330	Ⅰ	石製品	硯	14.0	6.3	1.7	
	331	Ⅰ	石製品	硯	9.3	4.0	0.8	

第11表　近世の遺物８（木製品）

挿図番号	掲載番号	遺構層	種別	長さ（cm）	a		b		c	
					幅	厚さ	幅	厚さ	幅	厚さ
8	3	Ⅶ層杭	杭	27.9	4.1	3.2	2.6	2.3	−	−
	4	Ⅶ層杭	杭	28.8	2.6	2.6	1.6	1.7	−	−
	5	Ⅶ層杭	杭	27	2.6	2.5	2	1.9	−	−
	6	Ⅶ層杭	杭	36	2.6	2.7	2.4	2.4	−	−
	7	Ⅶ層杭	杭	37.5	2.4	2.4	1.9	1.8	−	−
	8	Ⅶ層杭	杭	48	3.4	3.2	3.1	2.6	−	−
	9	Ⅶ層杭	杭	57.7	3	3.4	1.9	1.5	−	−
	10	Ⅶ層杭	杭	54.4	3.3	3	1.8	1.9	−	−
9	11	Ⅶ層杭	杭	63.6	2.8	2.6	1.9	2	−	−
	12	Ⅶ層杭	杭	61.5	2.2	2.2	1.3	1.7	−	−
	13	Ⅶ層杭	杭	59.5	3	2.9	2	1.8	−	−
	14	Ⅶ層杭	杭	61.9	3.7	4	2.7	1.7	−	−
	15	Ⅶ層杭	杭	75.4	3.1	2.7	1.7	1.7	−	−
21	72	SD1	杭	56.3	4.7	4.7	3.8	3.4	−	−
	73	SD1	杭	61	5.5	5.8	4.1	4	2.0	2.1
	74	SD1	杭	76.8	5.1	4.3	3.2	2.5	−	−
	75	SD1	杭	80.3	6.1	5.5	5.1	4.8	−	−
	76	SD1	杭	82.3	4.7	4	3.2	3.1	−	−
	77	SD1	杭	110	4.2	4.9	3.9	4	−	−
	78	SD1	部材	34.6	2.8	0.8	−	−	−	−
	79	SD1	部材	20.7	3.4	1.35	−	−	−	−
	80	SD1	部材	26.4	12.3	4.5	13.3	5.1	−	−
	81	SD1	閂	12	3.8	3.3	2.1	1.8	−	−
23	82	SD1	下駄	16.7	8	3	−	−	−	−
	83	SD1	下駄	19.4	9.1	3.6	−	−	−	−
	84	SD1	下駄	21.3	7.9	7.2	−	−	−	−
	85	SD1	下駄	21.1	8.8	2.7	−	−	−	−
	86	SD1	漆塗蓋	16.6	14.5	2.1	−	−	−	−
	87	SD1	黒漆碗	−	−	0.55	−	−	−	−
	88	SD1	黒漆碗	−	−	0.5	−	−	−	−
	89	SD1	黒漆碗	−	−	0.5	−	−	−	−
33	155	SK2	桶？	55.8	36	17	43.4	2	−	−

第12表　近世の遺物９（瓦）

挿図番号	掲載番号	遺構・層	種別	瓦種	長さ	幅	厚さ	瓦当：文様	連珠数	瓦当：直径	周縁幅	瓦当高	文様高	内径	文径	備考
13	16	P2	瓦	丸瓦	(9.3)	(7.5)	1.6	−	−	−	−	−	−	−	−	
	17	P4	瓦	平瓦	(21.8)	(16.0)	1.5	−	−	−	−	−	−	−	−	
	21	P5	瓦	平瓦	(14.2)	(11.3)	1.7	−	−	−	−	−	−	−	−	
	22	P5	瓦	丸瓦	(15.1)	(12.2)	2.1	−	−	−	−	−	−	−	−	
18	60	SD1	瓦	平瓦	(10.9)	(10.3)	1.7	−	−	−	−	−	−	−	−	
	61	SD1	瓦	平瓦	(13.4)	(7.9)	1.3	−	−	−	−	−	−	−	−	
	62	SD1	瓦	平瓦	(12.8)	(8.1)	1.5	−	−	−	−	−	−	−	−	
	63	SD1	瓦	平瓦	(17.4)	(15.4)	1.2	−	−	−	−	−	−	−	−	
	64	SD1	瓦	丸瓦	24.3	12.9	2.0	−	−	−	−	−	−	−	−	
	65	SD1	瓦	丸瓦	(10.0)	(8.0)	2.4	−	−	−	−	−	−	−	−	
	66	SD1	瓦	丸瓦	23.1	12.9	2.1	−	−	−	−	−	−	−	−	
19	67	SD1	瓦	丸瓦	(22.8)	(11.5)	1.6	−	−	−	−	−	−	−	−	
	68	SD1	瓦	丸瓦	(14.9)	(11.1)	2.4	−	−	−	−	−	−	−	−	
	69	SD1	瓦	軒丸瓦	-	-	1.6	橘文	(8)	13.0	1.8	−	−	10.0	6.4	
	70	SD1	瓦	軒丸瓦	-	-	2.2	草花文	−	−	−	−	−	−	−	
	71	SD1	瓦	軒平瓦	-	-	1.8	上向三葉文	−	−	−	3.8	2.3	−	−	
24	90	瓦溜1	瓦	丸瓦	(10.9)	(10.7)	2.1	−	−	−	−	−	−	−	−	
	91	瓦溜1	瓦	丸瓦	(15.5)	(10.2)	1.9	−	−	−	−	−	−	−	−	
	92	瓦溜1	瓦	丸瓦	(11.1)	(14.8)	2.3	−	−	−	−	−	−	−	−	
	93	瓦溜1	瓦	軒丸瓦	-	-	2.3	連珠三つ巴（右巻き）	15	15.4	2.5	−	−	6.3	10.2	
	94	瓦溜1	瓦	鬼瓦	(7.5)	(12.0)	(3.1)	−	−	−	−	−	−	−	−	
28	124	SD2	瓦	平瓦	(9.6)	(9.2)	2.0	−	−	−	−	−	−	−	−	
	125	SD2	瓦	丸瓦	(9.0)	(8.9)	1.5	−	−	−	−	−	−	−	−	
31	149	SD3	瓦	平瓦	(15.1)	(9.2)	1.8	−	−	−	−	−	−	−	−	
	150	SD3	瓦	平瓦	(11.6)	(8.3)	1.2	−	−	−	−	−	−	−	−	
	151	SD3	瓦	丸瓦	(14.6)	(9.3)	1.6	−	−	−	−	−	−	−	−	コビキA
	152	SD3	瓦	丸瓦	(12.5)	(12.0)	2.2	−	−	−	−	−	−	−	−	
	153	SD3	瓦	丸瓦	(16.2)	(13.4)	1.7	−	−	−	−	−	−	−	−	
	154	SD3	瓦	軒丸瓦	-	-	1.9	橘文	(5)	−	2.0	−	−	−	−	
36	157	SX3	瓦	平瓦	(10.2)	(13.6)	1.7	−	−	−	−	−	−	−	−	
	158	SX1	瓦	陶器平瓦	(8.2)	(6.0)	1.1	−	−	−	−	−	−	−	−	
	159	SX1	瓦	丸瓦	(12.5)	(8.2)	1.7	−	−	−	−	−	−	−	−	
	160	SX1	瓦	丸瓦	(11.3)	(10.4)	1.3	−	−	−	−	−	−	−	−	
	161	SX1	瓦	丸瓦	(14.3)	(9.0)	1.3	−	−	−	−	−	−	−	−	
	162	SX1	瓦	軒丸瓦	-	-	2.4	連珠三つ巴（左巻き）	12	18.2	2.7	−	−	8.3	13.0	
37	170	SX3	瓦	軒丸瓦	-	-	1.8	連珠三つ巴（不明）	(1)	−	2.3	−	−	−	−	
	173	SX4	瓦	平瓦	(8.8)	(6.0)	1.9	−	−	−	−	−	−	−	−	
	174	SX4	瓦	軒平瓦	-	-	2.3	不明	−	−	−	(3.4)	(2.3)	−	−	
38	178	SX7	瓦	丸瓦	(13.8)	(10.8)	1.7	−	−	−	−	−	−	−	−	
39	179	SX8	瓦	軒丸瓦	-	-	3.1	連珠三つ巴（右巻き）	(2)	−	1.6	−	−	−	−	
	183	SX10	瓦	陶器平瓦	(6.3)	(7.5)	1.5	−	−	−	−	−	−	−	−	
	190	SX11	瓦	陶器丸瓦	(5.2)	(5.4)	1.3	−	−	−	−	−	−	−	−	
	191	SX11	瓦	軒丸瓦	-	-	2.4	連珠三つ巴（左巻き）	(7)	18.8	3	−	−	8.5	13.7	
	192	SX11	瓦	軒丸瓦	-	-	1.4	橘文	(3)	−	2.1	−	−	−	−	
40	194	瓦溜2	瓦	陶器平瓦	(10.5)	(14.4)	1.7	−	−	−	−	−	−	−	−	田之浦窯
	195	瓦溜2	瓦	丸瓦	(15.9)	(13.4)	1.8	−	−	−	−	−	−	−	−	
	196	瓦溜2	瓦	丸瓦	(22.3)	(13.2)	2.6	−	−	−	−	−	−	−	−	コビキA
	197	瓦溜2	瓦	丸瓦	(20.6)	(11.1)	1.4	−	−	−	−	−	−	−	−	
41	198	瓦溜2	瓦	丸瓦	(16.4)	14.5	1.8	−	−	−	−	−	−	−	−	コビキB
	199	瓦溜2	瓦	丸瓦	(14.0)	(12.4)	1.6	−	−	−	−	−	−	−	−	
	200	瓦溜2	瓦	軒丸瓦	-	-	1.2	連珠三つ巴（左巻き）	(4)	−	2.5	−	−	−	−	
	201	瓦溜2	瓦	軒丸瓦	-	-	1.5	連珠三つ巴（右巻き）	(5)	−	2.2	−	−	−	−	
42	210	V	瓦	丸瓦	(11.3)	(7.7)	1.2	−	−	−	−	−	−	−	−	

第13表　近世の遺物10（瓦）

挿図番号	掲載番号	遺構・層	種別	瓦種	長さ	幅	厚さ	瓦当：文様	連珠数	瓦当：直径	周縁幅	瓦当高	文様高	内径	文径	備考
42	211	Ⅴ	瓦	丸瓦	(11.2)	(8.8)	1.2	－	－	－	－	－	－	－	－	
	212	Ⅴ	瓦	陶器丸瓦	(6.8)	(6.5)	0.8	－	－	－	－	－	－	－	－	
44	232	Ⅳ	瓦	平瓦	(17.1)	(16.0)	1.6	－	－	－	－	－	－	－	－	スタンプ
	233	Ⅳ	瓦	平瓦	(9.2)	(11.0)	1.6	－	－	－	－	－	－	－	－	
	234	Ⅳ	瓦	陶器平瓦	(7.7)	(11.3)	1.2	－	－	－	－	－	－	－	－	
	235	Ⅳ	瓦	陶器平瓦	(6.2)	(6.7)	1.5	－	－	－	－	－	－	－	－	
	236	Ⅳ	瓦	陶器丸瓦	(16.7)	(10.0)	2.4	－	－	－	－	－	－	－	－	
	237	Ⅳ	瓦	陶器丸瓦	(10.0)	(9.7)	2.2	－	－	－	－	－	－	－	－	
	238	Ⅳ	瓦	陶器丸瓦	(8.2)	(9.1)	1.6	－	－	－	－	－	－	－	－	
	239	Ⅳ	瓦	丸瓦	(5.8)	(5.8)	1.4	－	－	－	－	－	－	－	－	
	240	Ⅳ	瓦	丸瓦	(8.1)	(6.1)	1.4	－	－	－	－	－	－	－	－	
	241	Ⅳ	瓦	陶器丸瓦	(7.2)	(8.0)	2.3	－	－	－	－	－	－	－	－	
	242	Ⅳ	瓦	陶器軒丸	-	-	2.0	－	－	－	2.4	－	－	－	－	
	243	Ⅳ	瓦	陶器軒丸	-	-	2.0	－	－	－	2.6	－	－	－	－	
	244	Ⅳ	瓦	海鼠瓦	(10.7)	(7.5)	2.0	－	－	－	－	－	－	－	－	
46	245	Ⅲ	瓦	平瓦	(8.3)	(7.9)	1.9	－	－	－	－	－	－	－	－	スタンプ
	246	Ⅲ	瓦	丸瓦	(8.8)	(8.0)	2.5	－	－	－	－	－	－	－	－	
	247	Ⅲ	瓦	軒丸瓦	-	-	(2.2)	－	(2)	－	1.6	－	－	－	－	
	248	Ⅲ	瓦	軒平瓦	-	-	1.9	上向三葉文	－	－	－	4.7	3.2	－	－	
	249	Ⅲ	瓦	鬼瓦	(12.0)	(8.8)	1.9	－	－	－	－	－	－	－	－	
	250	Ⅲ	瓦	鬼瓦	(18.3)	(11.9)	2.5	－	－	－	－	－	－	－	－	
48	263	Ⅱ	瓦	丸瓦	(15.6)	(9.3)	1.8	－	－	－	－	－	－	－	－	
	264	Ⅱ	瓦	丸瓦	(18.6)	(6.2)	2.0	－	－	－	－	－	－	－	－	
	265	Ⅱ	瓦	陶器丸瓦	(11.9)	(12.9)	1.7	－	－	－	－	－	－	－	－	
	266	Ⅱ	瓦	丸瓦	(9.5)	(11.3)	1.8	－	－	－	－	－	－	－	－	スタンプ
	267	Ⅱ	瓦	陶器丸瓦	(5.0)	(5.8)	0.9	－	－	－	－	－	－	－	－	
	268	Ⅱ	瓦	軒丸瓦	-	-	3.0	牡丹文	－	16.0	1.5	－	－	12.2	11.0	
	269	Ⅱ	瓦	軒丸瓦	-	-	2.9	牡丹文	－	－	2.0	－	－	－	－	
	270	Ⅱ	瓦	軒丸瓦	-	-	2.9	連珠三つ巴（右巻き）	13	15.8	2.2	－	－	10.5	5.8	
	271	Ⅱ	瓦	軒平瓦	-	-	－	－	－	－	－	－	－	－	－	
	272	Ⅱ	瓦	軒桟瓦	-	-	2.1	連珠三つ巴（右巻き）	10	9.0	1.5	－	－	6.1	3.0	
	273	Ⅱ	瓦	小菊瓦	-	-	2.0	菊文	－	9.1	0.8	－	－	7.5	5.8	
	274	Ⅱ	瓦	鬼瓦	-	-	2.3	鬼瓦雲	－	－	－	－	－	－	－	
52	332	Ⅰ	瓦	平瓦	(8.7)	(8.3)	2.8	－	－	－	－	－	－	－	－	スタンプ
	333	Ⅰ	瓦	平瓦	(20.0)	(21.5)	1.9	－	－	－	－	－	－	－	－	スタンプ
	334	Ⅰ	瓦	陶器平瓦	(5.8)	(6.9)	1.2	－	－	－	－	－	－	－	－	
	335	Ⅰ	瓦	陶器平瓦	(6.2)	(7.6)	1.4	－	－	－	－	－	－	－	－	
	336	Ⅰ	瓦	陶器丸瓦	(5.9)	(9.0)	1.5	－	－	－	－	－	－	－	－	
	337	Ⅰ	瓦	丸瓦	(16.3)	(9.4)	2.3	－	－	－	－	－	－	－	－	
	338	Ⅰ	瓦	陶器丸瓦	(11.5)	(7.4)	1.5	－	－	－	－	－	－	－	－	
53	339	Ⅰ	瓦	丸瓦	(14.0)	(8.3)	1.4	－	－	－	－	－	－	－	－	
	340	Ⅰ	瓦	丸瓦	(9.5)	(8.2)	1.9	－	－	－	－	－	－	－	－	スタンプ
	341	Ⅰ	瓦	丸瓦	(9.5)	(12.5)	1.8	－	－	－	－	－	－	－	－	スタンプ
	342	Ⅰ	瓦	軒丸瓦	-	-	2.4	連珠三つ巴（左巻き）	(4)	－	2.5	－	－	－	－	
	343	Ⅰ	瓦	軒丸瓦	-	-	2.6	連珠三つ巴（右巻き）	(6)	－	1.6	－	－	－	－	
	344	Ⅰ	瓦	軒丸瓦	-	-	2.5	連珠三つ巴（右巻き）	(4)	－	2.2	－	－	－	－	
	345	Ⅰ	瓦	軒丸瓦	-	-	2.0	菊文	－	－	1.8	－	－	－	－	
	346	Ⅰ	瓦	軒平瓦	-	-	1.5	上向三葉異形唐草	－	－	－	4.2	2.4	－	－	
	347	Ⅰ	瓦	軒平瓦	-	-	1.1	唐草	－	－	－	4	2.6	－	－	
	348	Ⅰ	瓦	軒平瓦	-	-	－	－	－	－	－	－	－	－	－	
	349	Ⅰ	瓦	軒平瓦	-	-	2.3	異形唐草	－	－	－	－	－	－	－	
	350	Ⅰ	瓦	鬼瓦	7.0	10.3	3.3	－	－	－	－	－	－	－	－	
	351	Ⅰ	瓦	輪違瓦	15.0	13.0	2.1	－	－	－	－	－	－	－	－	

第Ⅳ章　自然科学分析

1　鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）出土木製品の樹種

東都文化財研究所

はじめに

鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）から出土した木製品について，用材選択を明らかにするための樹種同定を実施した。以下，結果について報告する。

1　試料

試料は，出土した木製品５点である。

2　分析方法

資料の木取りや破損状況等を観察した上で，剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し，プレパラートとする。プレパラートは，生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し，その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して分類群を同定する。

なお，木材組織の名称や特徴は，島地・伊東(1982), Wheeler他(1998)，Richter他(2006)を参考にする。また，日本産木材の組織配列は，林(1991)や伊東(1995，1996，1997，1998，1999)を参考にする。

3　結果

樹種同定結果を第14表・第54・55図に示す。木製品は，針葉樹3分類群(ヒノキ，アスナロ，スギ)と広葉樹1分類群(ヌルデ)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・ヒノキ Chamaecyparis obtusa (Sieb. et Zucc.)Endlcher　**ヒノキ科ヒノキ属**

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で，晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で，1分野に1～3個。放射組織は単列，1～10細胞高。

・アスナロ Thujopsis dolabrata Sieb. et Zucc.　**ヒノキ科アスナロ属**

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで，晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され，内壁には茶褐色の樹脂が顕著に認められる。分野壁孔はヒノキ型で，1分野に1～4個。放射組織は単列，1～10細胞高。

第14表　鹿児島城跡（火除地）の樹種同定結果

分析番号	掲載番号	種別	樹種
K036	86	漆塗蓋	アスナロ
K033	85	差歯下駄（露卯）	ヒノキ
K034	84	連歯下駄	スギ
K035	82	連歯下駄	ヌルデ
K040	83	連歯下駄	スギ

・スギ Cryptomeria japonica (L. f.) D. Don　**ヒノキ科スギ属**

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で，晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で，1分野に2～4個。放射組織は単列，1～10細胞高。

・ヌルデ　Rhus javanica L. var chinensis (Mill.) T. Yamaz.　**ウルシ科ヌルデ属**

環孔材。孔圏部は4～5列，孔圏外への移行は緩やかで，晩材部では2～4個が塊状に複合して配列する。道管の穿孔板は単穿孔板，壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性，1～3細胞幅，1～30細胞高。

引用文献

林　昭三,1991,日本産木材　顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所.66-176.

伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.

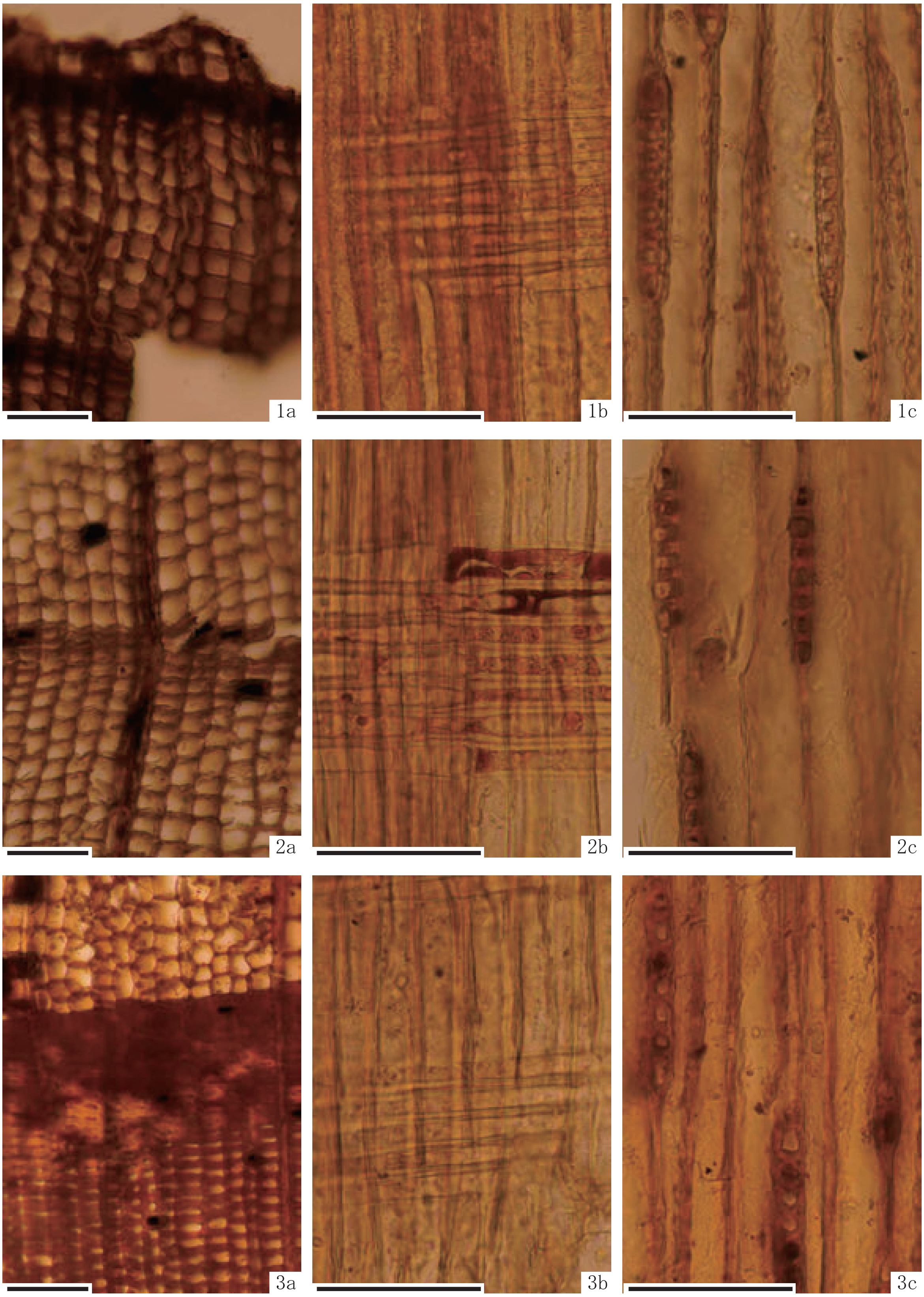
伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.

伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006,針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修）,海青社,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.

島地　謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.

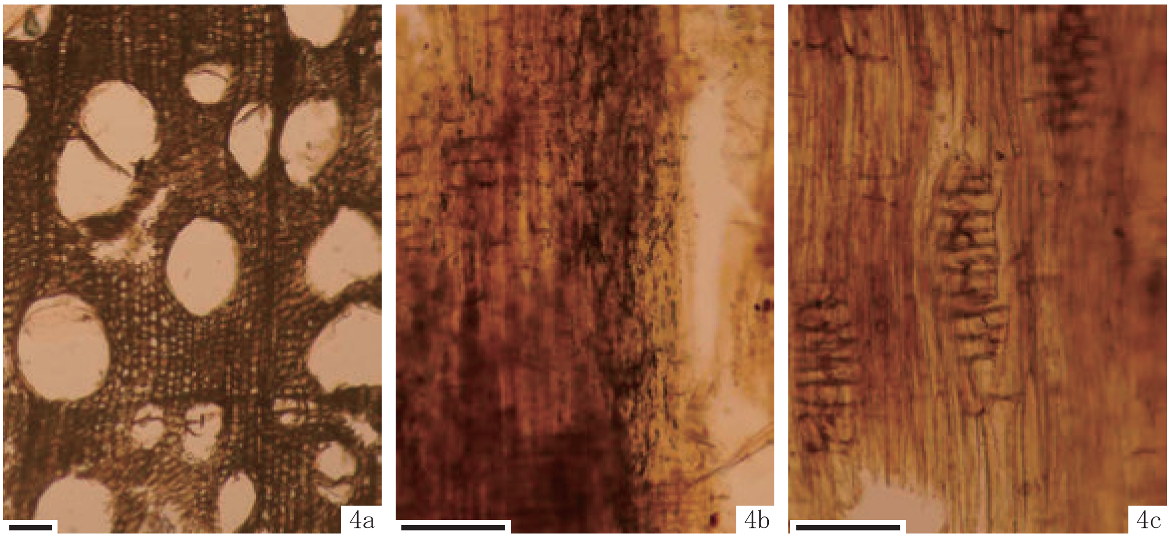
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998,広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）,海青社,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.



1. ヒノキ(K033)
2. アスナロ(K036)
3. スギ(K034)
　a：木口，b：柾目，c：板目

各写真のスケールは0.1mm

第54図　鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）の木材１



4. ヌルデ(K035)
a：木口，b：柾目，c：板目

各写真のスケールは0.1㎜

第55図　鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）の木材2

２　鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）出土試料の自然科学分析

株式会社 古環境研究センター

Ⅰ．自然科学分析の概要

鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）から出土した木製品17点について自然科学分析を行った。分析内容は，樹種同定（17点）および放射性炭素年代測定（８点）である。以下に，各分析項目ごとに試料の詳細，分析方法，分析結果および考察
・所見を記載する。

Ⅱ．樹種同定

１．はじめに

木材は，セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり，解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから，比較的近隣の森林植生の推定が可能であり，遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

２．試料と方法

第15表に試料の詳細を示し，以下の手順で樹種同定を行った。
1）試料を洗浄して付着した異物を除去
2）カミソリで木材の基本的三断面（横断面：木口，放射断面：柾目，接線断面：板目）の切片を作成
3）生物顕微鏡（40～1000倍）で観察し，木材の解剖学的形質や現生標本との対比で樹種を同定

３．結果

第14表に同定結果を示し，第58・59図に各分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった木材構造の特徴を記す。

1）モミ属　Abies　マツ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で１分野に１～４個存在する。放射柔細胞の壁が厚く，数珠状末端壁が見られる。放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からモミ属に同定される。日本に自生するモミ属は５種であり，モミ以外は亜寒帯種である。常緑高木で高さ45m，径1.5mに達する。

2）マツ属複維管束亜属　Pinus　subgen.　Diploxylon　マツ科

仮道管，放射柔細胞，放射仮道管および垂直，水平樹脂道などから構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は急な箇所と緩やかな箇所があり，垂直樹脂道が見られる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状で，放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。接線断面では，放射組織が単列の同性放射組織型であるが，水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の特徴からマツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属にはクロマツとアカマツがあり，どちらも北海道南部，本州，四国，九州に分布する常緑高木である。

3）スギ　Cryptomeria　japonica　D.Don　スギ科

仮道管，樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で，晩材

部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で，１分野に２個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で１～14細胞高である。

以上の特徴からスギに同定される。スギは本州，四国，九州，屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で高さ40m，径２mに達する。

４）クマシデ属クマシデ節 *Carpinus* sect. *Distegocarpus* カバノキ科

小型で丸い道管が単独あるいは数個放射方向に複合し，全体として放射方向の帯状に配列する放射孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔であり，階段の数は少なく10本ぐらいまでで，１本１本の間隔が広い。放射組織はほとんど同性であるが，上下の縁辺部のみときおり方形細胞が見られることがある。接戦断面では放射組織はほぼ同性で１～２細胞幅である。

以上の特徴からクマシデ属に同定される。クマシデ属は落葉の高木または大型の低木で，北海道，本州，四国，九州に分布する。

５）クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

年輪のはじめに大型の道管が数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて，道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からクリに同定される。クリは北海道の西南部，本州，四国，九州に分布する。落葉の高木で，通常高さ20m，径40cmぐらいであるが，大きいものは高さ30m，径２mに達する。

６）クスノキ科 Lauraceae

中型から小型の道管が単独および２～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。道管の穿孔は単穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であり，上下の縁辺部のみ直立細胞からなる異性放射組織型で１～３細胞幅である。

以上の特徴からクスノキ科に同定される。クスノキ科には，クスノキ，ヤブニッケイ，タブノキ，カゴノキ，シロダモなどがあり，道管径の大きさ，多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無などで細分できるが，今回の試料は道管径以外の点が不明瞭なため，クスノキ科の同定にとどめた。

４．所見

鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）から出土した木製品（17点）について樹種同定を行った。その結果，マツ属複維管束亜属６点，スギ３点，クスノキ科３点，クリ２点，クマシデ属クマシデ節２点，モミ属１点が同定された。Ⅶ層杭列の６点（K005，K007，K008，K011，K012，K013）は，いずれもマツ属複維管束亜属である。また，SD１杭のうち３点（K017，K018，K020）はクスノキ科，２点（K014，K021）はクマシデ属クマシデ節，閂（K024）とSD1部材（K038，K039）はスギ，SK２桶（K032）はモミ属，SD１部材（K037）とP6柱（K041）はクリである。

マツ属複維管束亜属には二次林を形成するアカマツと海岸林を形成するクロマツがあり，いずれも水湿によく耐える材である。クスノキ科は概して強さ中庸で，柱などの建築部材や井戸側板などに利用される。クスノキ科には耐朽性が比較的高いクスノキやタブノキも含まれ，杭にも適材であったと考えられる。クマシデ属クマシデ節は弾力性に富む強さ中庸の材であり，家具や器具，建築材に用いられる。スギは木理直通で加工工作が容易であり，建築部材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。クリは重硬で耐朽性が高く水湿によく耐え，保存性の極めて高い材である。タンニンが多くカビを防ぐ効果もあり，柱材などの建築部材として比較的よく利用される。モミ属は温帯性のモミと考えられ，材は耐朽・保存性は低いが，軽軟なため加工が容易である。

いずれも温帯から温帯下部の暖温帯に分布する樹木であり，当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能であったと考えられる。

Ⅲ．放射性炭素年代測定

１．はじめに

放射性炭素年代測定は，光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（14C）の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体，骨，貝殻，土器付着炭化物などが測定対象となり，約５万年前までの年代測定が可能である（中村，2003）。

２．試料と方法

第16表に試料の詳細，前処理・調整法，測定法を示す。有機溶剤処理はアセトンを使用した。AAA処理は酸-アルカリ-酸処理，AMS法は加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）である。

３．測定結果

AMS法によって得られた14C濃度について同位体分別効果の補正を行い，放射性炭素（14C）年代および暦年代（較正年代）を算出した。第16表にこれらの結果を示し，第56図に各試料の暦年較正結果（較正曲線），第57図に暦年較正年代マルチプロット図を示す。

（１）デルタδ13C測定値

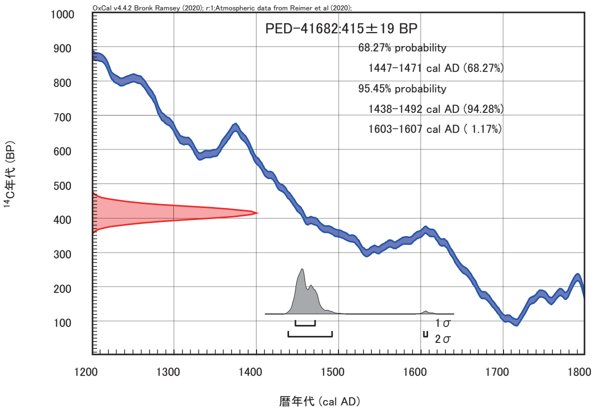
試料の測定14C/12C比を補正するための炭素安定同

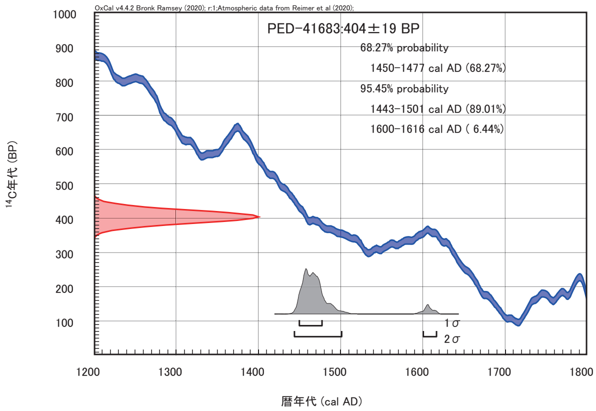
第15表　鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）における樹種同定結果

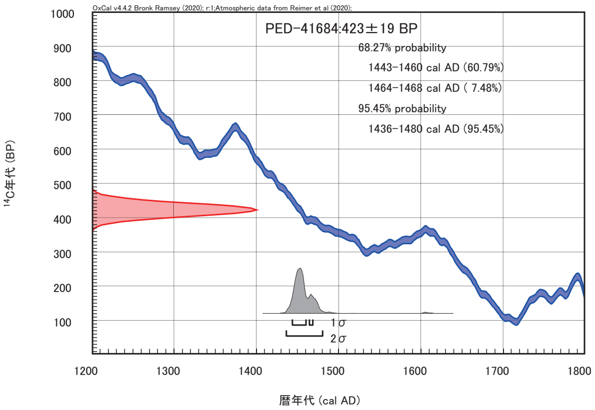
試料No.	掲載番号	種類	結果（学名／和名）	
K005	10	Ⅶ層杭列	Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属
K007	5	Ⅶ層杭列	Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属
K008	9	Ⅶ層杭列	Pinaceae	マツ属複維管束亜属
K011	8	Ⅶ層杭列	Pinaceae	マツ属複維管束亜属
K012	14	Ⅶ層杭列	Pinaceae	マツ属複維管束亜属
K009	13	Ⅶ層杭列	Pinaceae	マツ属複維管束亜属
K014	77	SD1杭	Carpinus sect. Distegocarpus	クマシデ属クマシデ節
K017	75	SD1杭	Lauraceae	クスノキ科
K018	73	SD1杭	Lauraceae	クスノキ科
K020	74	SD1杭	Lauraceae	クスノキ科
K021	76	SD1杭	Carpinus sect. Distegocarpus	クマシデ属クマシデ節
K024	81	SD1門	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
K032	155	SK２桶	Abies	モミ属
K037	80	SD1部材	Castanea crenata Sieb. et Zucc.	クリ
K038	78	SD1部材	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
K039	79	SD1部材	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
K041	−	P6柱	Castanea crenata Sieb. et Zucc.	クリ

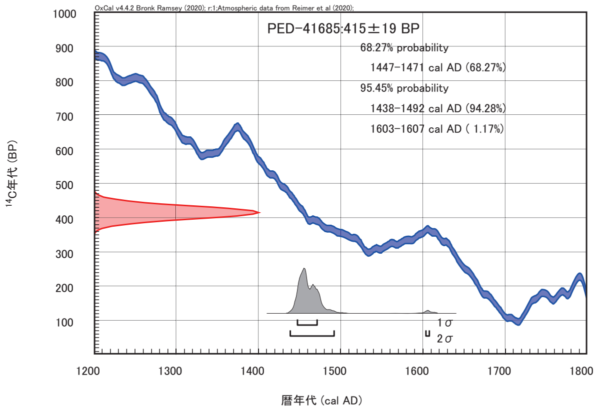
第16表　鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）における放射性炭素年代測定結果

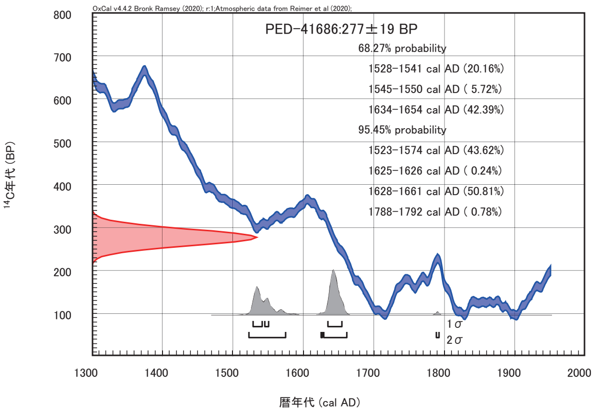
試料No.	掲載番号	測定No. PED-	試料の詳細	種類	前処理 測定法	δ13C (‰)	14C年代 (年BP)	暦年較正用年代(年BP)	暦年代（較正年代） 1σ（68.2%確率）	 2σ（95.4%確率）
K005	10	41682	Ⅶ層杭列	樹木	超音波洗浄　有機溶剤処理 AAA処理　AMS法	-29.51±0.26	415±20	415±19	cal AD 1447-1471 (68.27%)	cal AD 1438-1492 (94.28%) cal AD 1603-1607 (1.17%)
K007	5	41683	Ⅶ層杭列	樹木	超音波洗浄　有機溶剤処理 AAA処理　AMS法	-27.74±0.23	405±20	404±19	cal AD 1450-1477 (68.27%)	cal AD 1443-1501 (89.01%) cal AD 1600-1616 (6.44%)
K008	9	41684	Ⅶ層杭列	樹木	超音波洗浄　有機溶剤処理 AAA処理　AMS法	-27.96±0.20	425±20	423±19	cal AD 1443-1460 (60.79%) cal AD 1464-1468 (7.48%)	cal AD 1436-1480 (95.45%)
K012	14	41685	Ⅶ層杭列	樹木	超音波洗浄　有機溶剤処理 AAA処理　AMS法	-25.08±0.26	415±20	415±19	cal AD 1447-1471 (68.27%)	cal AD 1438-1492 (94.28%) cal AD 1603-1607 (1.17%)
K014	77	41686	SD1杭	樹木	超音波洗浄　有機溶剤処理 AAA処理　AMS法	-27.10±0.21	275±20	277±19	cal AD 1528-1541 (20.16%) cal AD 1545-1550 (5.72%) cal AD 1634-1654 (42.39%)	cal AD 1523-1574 (43.62%) cal AD 1625-1626 (0.24%) cal AD 1628-1661 (50.81%) cal AD 1788-1792 (0.78%)
K017	75	41687	SD1杭	樹木	超音波洗浄　有機溶剤処理 AAA処理　AMS法	-27.20±0.21	295±20	295±18	cal AD 1525-1558 (49.34%) cal AD 1632-1644 (18.93%)	cal AD 1519-1589 (68.40%) cal AD 1621-1650 (27.05%)
K021	76	41688	SD1杭	樹木	超音波洗浄　有機溶剤処理 AAA処理　AMS法	-29.80±0.20	370±20	370±19	cal AD 1461-1463 (0.94%) cal AD 1469-1508 (41.81%) cal AD 1594-1618 (25.52%)	cal AD 1456-1523 (58.48%) cal AD 1574-1629 (36.97%)
K041	−	41689	P6柱	樹木	超音波洗浄　有機溶剤処理 AAA処理　AMS法	-27.46±0.19	295±20	293±19	cal AD 1525-1558 (47.71%) cal AD 1632-1646 (20.56%)	cal AD 1519-1590 (66.50%) cal AD 1621-1653 (28.95%)

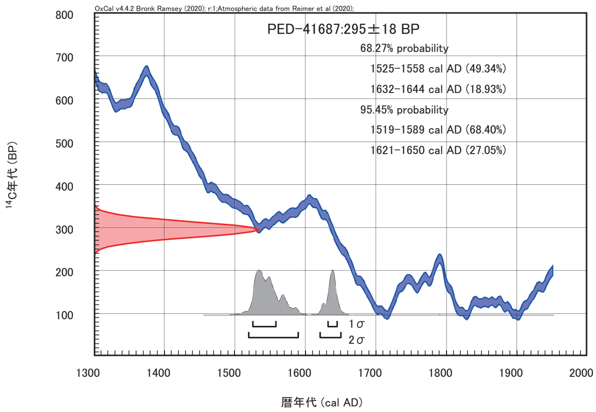

OxCal v4.4.2 Bronk Ramsey (2020); r:1;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PED-41682:415±19 BP
68.27% probability
1447-1471 cal AD (68.27%)
95.45% probability
1438-1492 cal AD (94.28%)
1603-1607 cal AD (1.17%)
1σ
2σ
¹⁴C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)

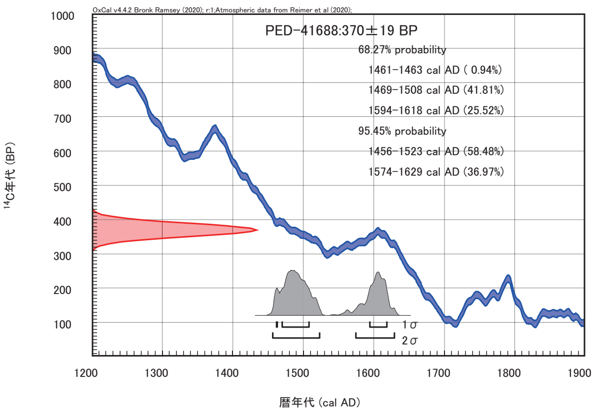

OxCal v4.4.2 Bronk Ramsey (2020); r:1;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PED-41683:404±19 BP
68.27% probability
1450-1477 cal AD (68.27%)
95.45% probability
1443-1501 cal AD (89.01%)
1600-1616 cal AD (6.44%)
1σ
2σ
¹⁴C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)

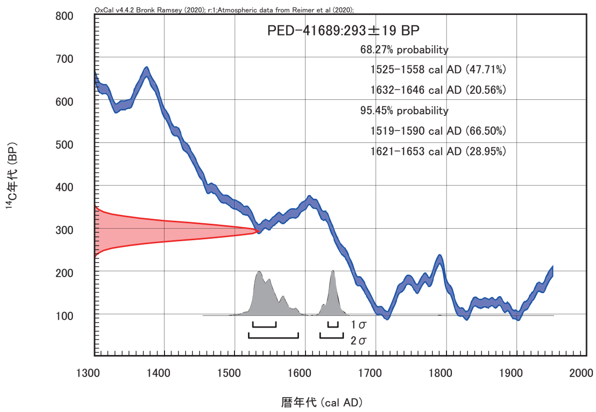

OxCal v4.4.2 Bronk Ramsey (2020); r:1;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PED-41684:423±19 BP
68.27% probability
1443-1460 cal AD (60.79%)
1464-1468 cal AD (7.48%)
95.45% probability
1436-1480 cal AD (95.45%)
1σ
2σ
¹⁴C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)


OxCal v4.4.2 Bronk Ramsey (2020); r:1;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PED-41685:415±19 BP
68.27% probability
1447-1471 cal AD (68.27%)
95.45% probability
1438-1492 cal AD (94.28%)
1603-1607 cal AD (1.17%)
1σ
2σ
¹⁴C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)


OxCal v4.4.2 Bronk Ramsey (2020); r:1;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PED-41686:277±19 BP
68.27% probability
1528-1541 cal AD (20.16%)
1545-1550 cal AD (5.72%)
1634-1654 cal AD (42.39%)
95.45% probability
1523-1574 cal AD (43.62%)
1625-1626 cal AD (0.24%)
1628-1661 cal AD (50.81%)
1788-1792 cal AD (0.78%)
1σ
2σ
¹⁴C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)


OxCal v4.4.2 Bronk Ramsey (2020); r:1;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PED-41687:295±18 BP
68.27% probability
1525-1558 cal AD (49.34%)
1632-1644 cal AD (18.93%)
95.45% probability
1519-1589 cal AD (68.40%)
1621-1650 cal AD (27.05%)
1σ
2σ
¹⁴C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)


OxCal v4.4.2 Bronk Ramsey (2020); r:1;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PED-41688:370±19 BP
68.27% probability
1461-1463 cal AD (0.94%)
1469-1508 cal AD (41.81%)
1594-1618 cal AD (25.52%)
95.45% probability
1456-1523 cal AD (58.48%)
1574-1629 cal AD (36.97%)
1σ
2σ
¹⁴C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)


OxCal v4.4.2 Bronk Ramsey (2020); r:1;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PED-41689:293±19 BP
68.27% probability
1525-1558 cal AD (47.71%)
1632-1646 cal AD (20.56%)
95.45% probability
1519-1590 cal AD (66.50%)
1621-1653 cal AD (28.95%)
1σ
2σ
¹⁴C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)

第56図　年代測定結果

位体比（13C/12C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料のδ13C値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正している。

（2）放射性炭素（14C）年代測定値

試料の14C/12C比から，現在（AD 1950年基点）から何年前かを計算した値。14Cの半減期は5730年であるが，国際的慣例によりLibbyの5568年を使用している。付記した統計誤差（±）は１シグマσ（68.2%確率）である。14C年代値は下１桁を丸めて表記するのが慣例であるが，暦年較正曲線が更新された場合のために下１桁を丸めない暦年較正用年代値を併記した。

（3）暦年代（Calendar Years）

放射性炭素（14C）年代をより実際の年代値に近づけるために，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中14C濃度の変動および14Cの半減期の違いを較正している。暦年代較正には，年代既知の樹木年輪の詳細な14C測定値，福井県水月湖の年縞堆積物データ，サンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と14C年代の比較などにより作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 20，較正プログラムはOxCal 4.3である。

暦年代（較正年代）は，14C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し，OxCalの確率法により１シグマσ（68.2%確率）と２σ（95.4%確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では，複数の1σ・２σ値が表記される場合もある。（）内の%表示は，その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は14C年代の確率分布，二重曲線は暦年較正曲線を示す。

４．所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果，K005（10）では415±20年BP（２σの暦年代でAD 1438～1492, 1603～1607年），K007（５）では405±20年BP（AD 1443～1501, 1600～1616年），K008（９）では425±20年BP（AD 1436～1480年），K012（14）では415±20年BP（AD 1438～1492, 1603～1607年），K014（77）では275±20年BP（AD 1523～1574, 1625～1626, 1628～1661, 1788～1792年），K017（75）では295±20年BP（AD 1519～1589, 1621～1650年），K021（76）では370±20年BP（AD 1456～1523, 1574～1629年），K041（P6）では295±20年BP（AD 1519～1590, 1621～1653年）の年代値が得られた。

このうち，Ⅶ層杭列の４点（K005（10），K007（５），K008（９），K012（14））は，暦年代がAD 1440～1480年前後の範囲で重複しており，ほぼ同一時期と考えられる（第57図）。また，SD１杭（K014, K017）とP6柱（K041）は，暦年代がAD 1520～1580およびAD 1620～1650年前後の範囲で重複している。

なお，樹木による年代測定結果は，樹木の伐採年もしくはそれより以前の年代を示しており，樹木の心材に近い部分や転用材が利用されていた場合は，考古学的所見よりも古い年代値となることがある。

文献

伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学．出土木製品用材データベース．海青社，449p.

島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造．文永堂出版，290p.

島地 謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．雄山閣，296p.

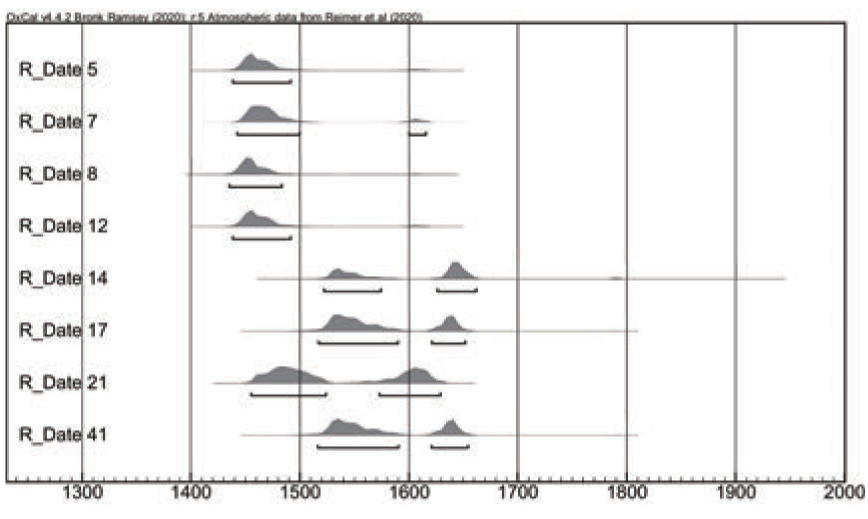
中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」．日本第四紀学会，p.3-20.

中村俊夫（2003）放射性炭素年代測定法と暦年代較正．環境考古学マニュアル．同成社，p.301-322.

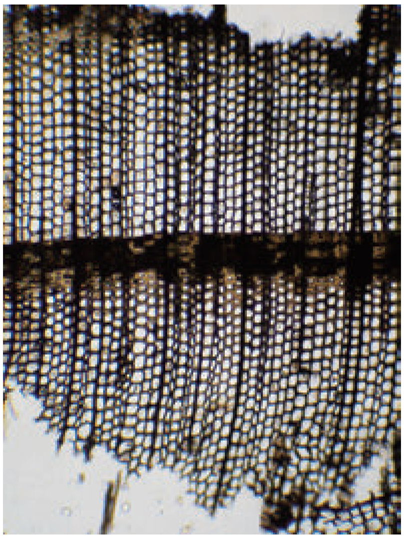
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史．植生史研究特別１号．植生史研究会，242p.

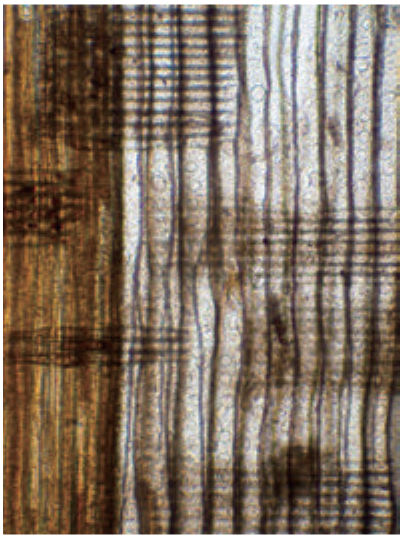
Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

Paula J Reimer et al., (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 kcal BP). Radiocarbon, 62(4), p.1-33,



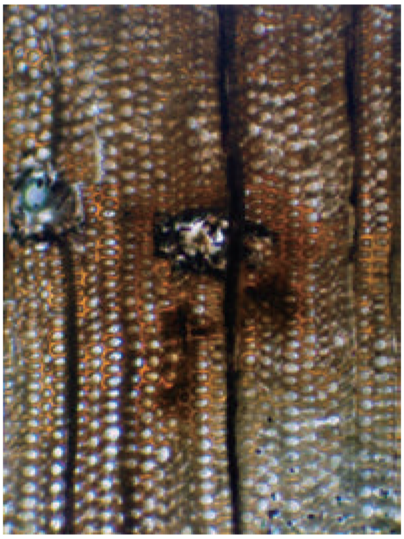
第57図　暦年較正年代マルチプロット図

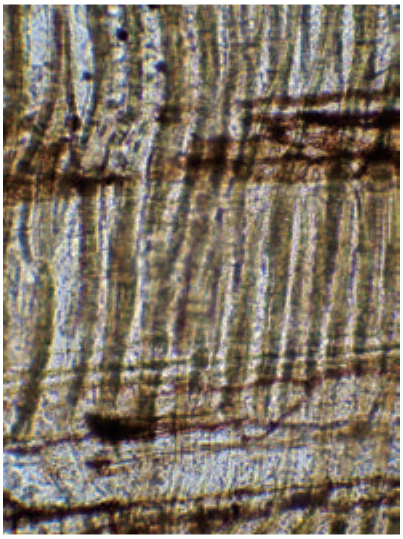




横断面　0. 1mm　放射断面　0. 1mm　接線断面　0. 1mm

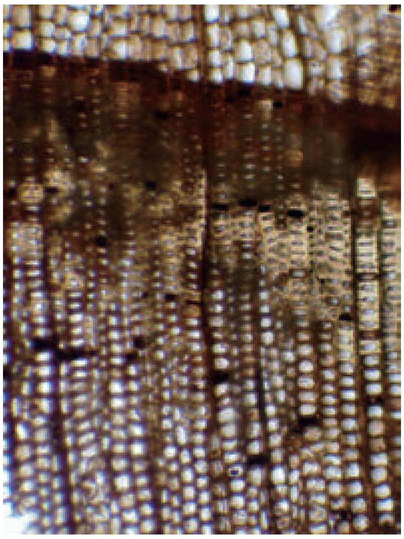
モミ属 K032 SX4･SX8桶

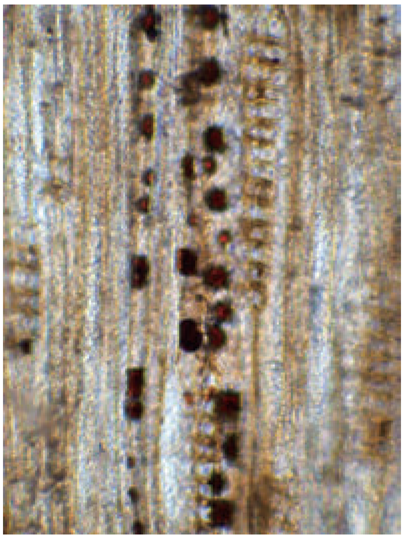




横断面　0. 1mm　放射断面　0. 1mm　接線断面　0. 1mm

マツ属複維管束亜属 K005 Ⅶ層杭列

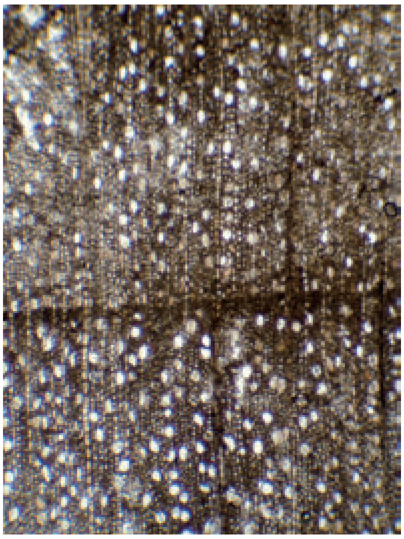
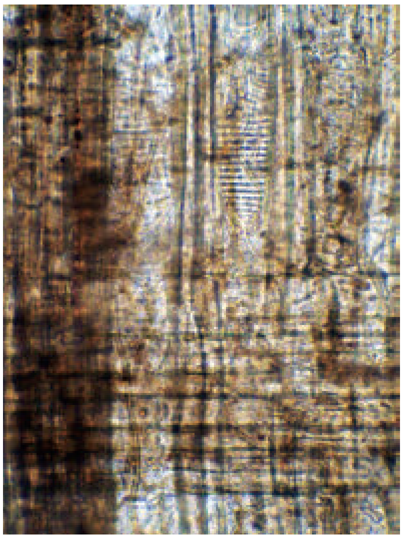
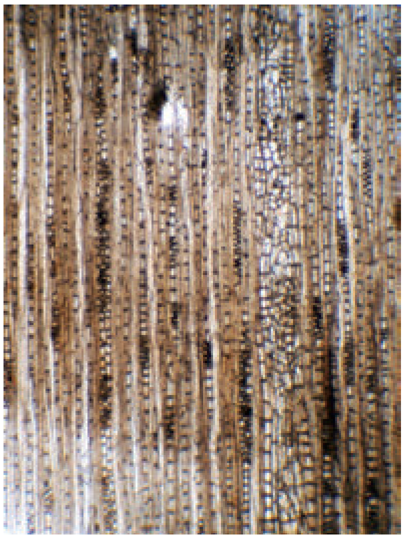




横断面　0. 1mm　放射断面　0. 1mm　接線断面　0. 1mm

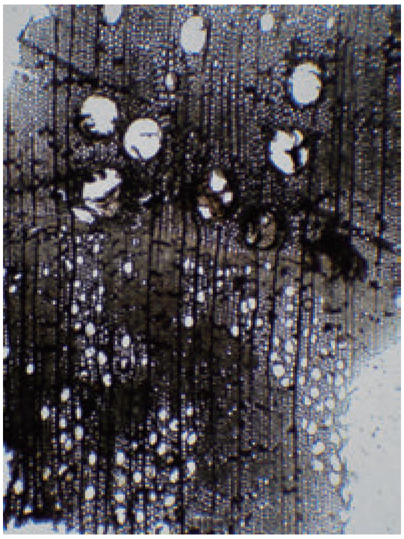
スギ K024 SX4門

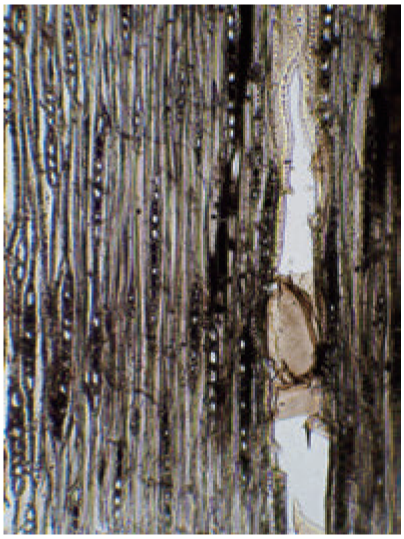
第58図　鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）の木材Ⅰ

横断面 0. 1mm 放射断面 0. 1mm 接線断面 0. 1mm

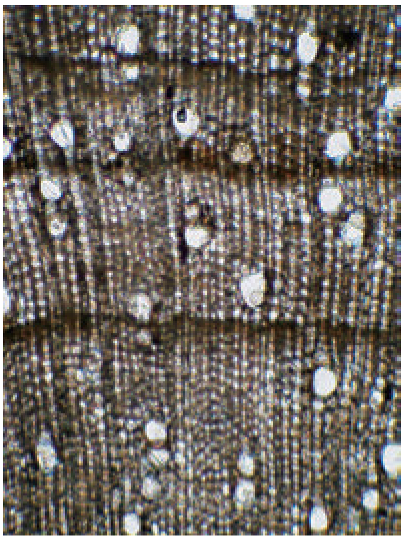
クマシデ属クマシデ節 K021 SD3杭

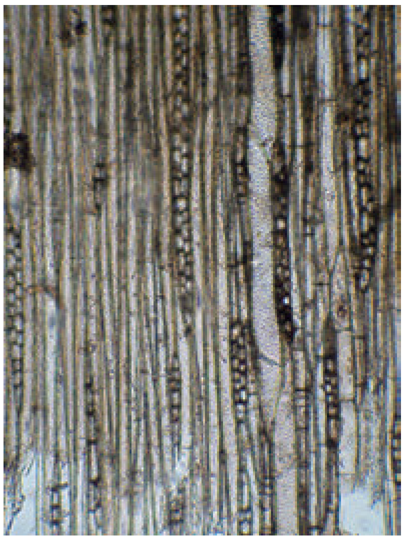




横断面 0. 1mm 放射断面 0. 1mm 接線断面 0. 1mm

クリ K041 P36柱





横断面 0. 1mm 放射断面 0. 1mm 接線断面 0. 1mm

クスノキ科 K018 SD3杭

第59図 鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）の木材Ⅱ

第Ⅴ章　総括

第１節　調査の成果

１　中世の成果

中世相当層と考えられるⅦ層からは，調査西側で南北方向に延びる杭列と少量の遺物が出土した。32本検出された杭は，長さ約60㎝の杭が中心で，樹種はマツ属であった。

Ⅶ層面では杭列以外の遺構は確認されなかったことやⅦ層が湧水する砂層で地盤的に脆弱層であったことから，粗朶のような役割をもった杭列であった可能性が高いと考えられる。

また，Ⅶ層は出土遺物（青磁碗Ⅱ類，備前擂鉢）や杭の年代測定結果から15世紀代に相当するものと考えられる。この時期は鹿児島城築城以前であり，築城以前は湧水する砂層が広がる低地であったと考えられる。

２　近世の成果

本遺跡で残存していた近世相当層はⅢ～Ⅵ層で，４面あることが確認された。各層攪乱などもあったが，調査区内で地形的な勾配はなく，平坦に堆積していた。

近世最下層のⅥ層は約20㎝堆積しており，やや水分を含む硬質層で，木柱が残存している柱穴（Ｐ１～７）や杭列を伴う溝状遺構（ＳＤ１）が検出された。特に，ＳＤ１内からは中国製磁器，肥前系磁器（古伊万里）や始良・加治木系陶器（山元・元立院・初期龍門司窯），堂平窯陶器，瓦など概ね17世紀後半～18世紀前半に相当する遺物が出土している。

ＳＤ１に伴う調査区北壁に沿って出土した六角形状の杭は，約40～50㎝間隔で打たれていた。いずれも完形ではなかったが，欠損部が燃えて炭化しているものが多かった。この杭は，犬追物馬場に関連する杭列の可能性が高いと考えられる（詳細は後述）。

また，Ⅵ層では木製品も多く出土しており，ＳＤ１内で下駄や部材，漆製品，瓦溜１では木片の他，棕櫚縄が多く出土した。

Ⅴ層では最も多くの近世遺構が検出された。溝状遺構（ＳＤ２・３）や溝状の不明遺構（ＳＸ1～12），瓦溜２，柱穴群等が確認された。遺構内・包含層では中国製磁器，肥前系陶磁器（内野山・唐津・武雄等），堅野窯磁器，始良・加治木系陶器（山元・元立院・初期龍門司窯），堂平窯陶器のほか，平・丸瓦，陶製瓦等が出土しており，Ⅵ層と同様17世紀後半～18世紀前半相当する遺物が出土している。

Ⅳ層は，焼土・炭化物・漆喰が多量に混じる硬質層であり，火事による処理層（造成面）と考えられる。遺構等は確認されなかった。本層からは，肥前系磁器・陶器のほか，加治木・始良系陶器（山元・初期龍門司），堂平窯陶製瓦，陶製瓦（田之浦窯か）等が出土している。

この火事処理層（Ⅳ層）は，①Ⅳ層以下が17世紀後半～18世紀前半の遺物・遺構が出土していること，②鹿児島城を含めた御楼門前の区画が火災に見舞われたのは元禄９（1696）年の大火であること，③元禄の大火後，正徳３（1713）に本丸・二之丸前の土地を明地とし，火除地としたことから，Ⅳ層は元禄の大火後に造成された処理層の可能性が高く，さらには正徳３（1713）年に設置された明地（火除地）に相当する造成層であったと考えられる。

Ⅳ層直上のⅢ層は海砂のような砂層であった。調査区全体で確認されたが，自然堆積層ではなく客土（砂）による造成面と考えられる。Ⅲ層からはＴ２で18世紀後半の瓦と陶磁器片が出土した。なお，近代相当のⅡ層からは18世紀後半以降の近世遺物が多く出土している。

このような成果から，近世期はⅣ層を境に，下位（Ⅴ・Ⅵ層）が17～18世紀前半，上位（Ⅲ層）が18世紀後半以降に分かれることが層堆積・遺構・遺物から確認された。

特にⅣ・Ⅵ層は前述したように，①Ⅳ層は火除地として利用するために明地に造成した際の面であること，②Ⅵ層は検出された杭列が元禄大火以前にあったとされる犬追物馬場に関連する柵列の可能性が高いことが明らかとなったことは大きな成果である。

近世層が良好に残存していたのは，犬追物馬場と利用された以降，近代の学校校舎が設置されるまで，恒常的な建物が長期に渡り建てられなかったことが一因と考えられる。

以上のことから，鹿児島城御楼門正面に位置する土地の利用変遷が考古学的に重層的に明らかにできたことは重要な成果といえよう（詳細は後述）。

３　近代の成果

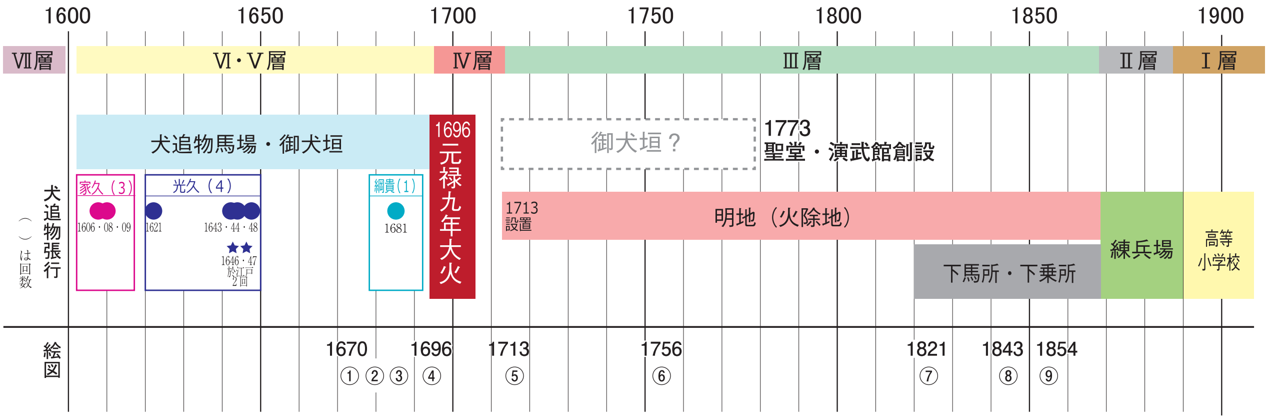
近代相当層はⅡ層で，焼土・炭化物・漆喰を多く含んだ硬質層であった。Ⅱ層では凝灰岩の方形の布地業が検出された。焼土・炭化物を含んだ層はⅣ層と同様火災による処理層の可能性が考えられる。Ⅱ層では，二次焼成を受けた18世紀後半以降の遺物が多く出土している点や鹿児島城の瓦と考えられる牡丹文の軒丸瓦・鬼瓦等が出土していることから，明治６（1873）年の鹿児島城本丸・御楼門が焼失した火災の際の処理層（造成層）と想定される。

この造成面は練兵場として利用された後，西南戦争を経て，明治27（1894）年に高等小学校が設置される。Ⅱ層で検出した布地業はこの校舎の基礎と考えられる。

第２節　近世の遺物

１　始良・加治木系陶器，堂平窯系陶器

本遺跡で出土量が多く，主体であったのは17世紀後半～18世紀前半の陶磁器である。特に加治木・始良系陶磁



絵図対応　①寛文十年「薩藩御城下絵図」,②常信筆「薩陽御城下ノ景」,③久保之英「見聞秘記」,④元禄九年「鹿児島城絵図控」,
⑤正徳三年「正徳三年御城下絵図」,⑥宝暦六年「薩摩国鹿児島城絵図」,⑦文政４年「鹿児島御城下明細図」
⑧天保十四年「天保年間鹿児島城下絵図」,⑨嘉永７年「府城南面屋形前之圖」『西陲畫帖』

第60図　土地利用変遷図

器が非常に多く出土したことは本遺跡の特徴の一つである。総釉の黄飴釉が施釉され，器壁が薄く，轆轤目を明瞭に残す。

碗等は内面見込みに目跡が残る山元窯や胎土が灰黒色で黒色粒を含み，鉄釉が施釉される元立院窯のもの等が出土している。

その中でも山元窯の特徴（轆轤目や薄手の器壁，釉調等）を持ちつつも，蛇の目釉剥ぎをもつ初期龍門司窯と考えられる遺物が目立つ。これらは龍門司古窯の最下層遺物（始良市教委2018）に類似するが，それらよりも山元窯の特徴が強く，より古相のものと考えられる。

特にＳＸ２出土の166やⅠ層出土の301は内面見込みに蛇の目釉剥ぎと目跡を残すもので，焼成技法が同時並存していたことが窺える資料である。龍門司古窯の最下層遺物はいずれも蛇の目釉剥ぎであることから，本遺跡の資料は山元窯から龍門司窯への移行期の資料であると考えられる。

また，褐色の胎土で，白色粒を多く含む山元窯の擂鉢（Ⅳ層出土：226）はこれまで窯跡のみでしか出土例がなく，消費地遺跡での出土は本遺跡が初例である。

以上のことから，初期の始良・加治木系陶器が本遺跡のような消費地遺跡でまとまって出土する事例は，本県ではなく，陶磁器の流通を示す好例といえる。

そのほか堂平窯の大型貯蔵具（甕や鉢）等の出土も多い。器壁が薄く，内面に当て具痕を明瞭に残すもので，堂平窯１期のものも散見されるが，２期が多い傾向にある。Ⅳ層より上位のⅠ～Ⅲ層からは，18世紀後半以降の龍門司の化粧土・二彩等，薩摩磁器，苗代川窯，肥前陶磁器等が多く出土している。ˆ

２　瓦

陶磁器と同様，瓦も多量に出土した。Ⅰ～Ⅲ層は，18世紀後半以降の瓦が主体で，平・丸瓦，軒丸・軒平瓦のほか，海鼠瓦や鬼瓦などが出土している。軒平・軒丸瓦も比較的サイズも大きく，巴文や牡丹文があり，鹿児島城本丸や御楼門で葺かれていた瓦の可能性が高い。

Ⅳ～Ⅵ層から出土した瓦は，17世紀後半～18世紀前半が主体と考えられる。丸瓦は長さ約23cm，幅約13cm，厚さ約２cmで小型で薄手である。内面には布痕と斜め方向の切り離し痕（コビキＡ・Ｂ）や縄目痕が明瞭に残る（コビキAは類似するものもあるが，典型的なものとは言いがたい）。玉縁長もやや長く，内面の縁辺部の面取りを斜めにする（断面三角形状）特徴が見られる。

また，Ⅰ～Ⅲ層でも17世紀後半～18世紀前半の瓦も混在しており，346のような細線の上向三葉文をもつ軒平瓦等は長崎県長崎奉公所跡出土のものと非常に類似しており，長崎瓦の可能性がある。長崎瓦の編年観では17世紀後半に相当する。同じ特徴をもつ瓦は，鹿児島城本丸（瓦分類D-005，鹿県埋セ2020）でも出土している。

そのほか，陶器瓦の出土量が多いことも本遺跡の特徴である。完形はないが，平・丸瓦・軒丸瓦が確認された。平・丸瓦には釉薬が施釉されており，釉尻がハート形に施釉される（194や238）いわゆる田之浦窯の陶器瓦がある。軒丸瓦には瓦当に草花文をもつ堂平窯のものと考えられる。陶器瓦は隣接する名山遺跡や鹿児島城（本丸・二之丸・御厩跡）などでも出土している。

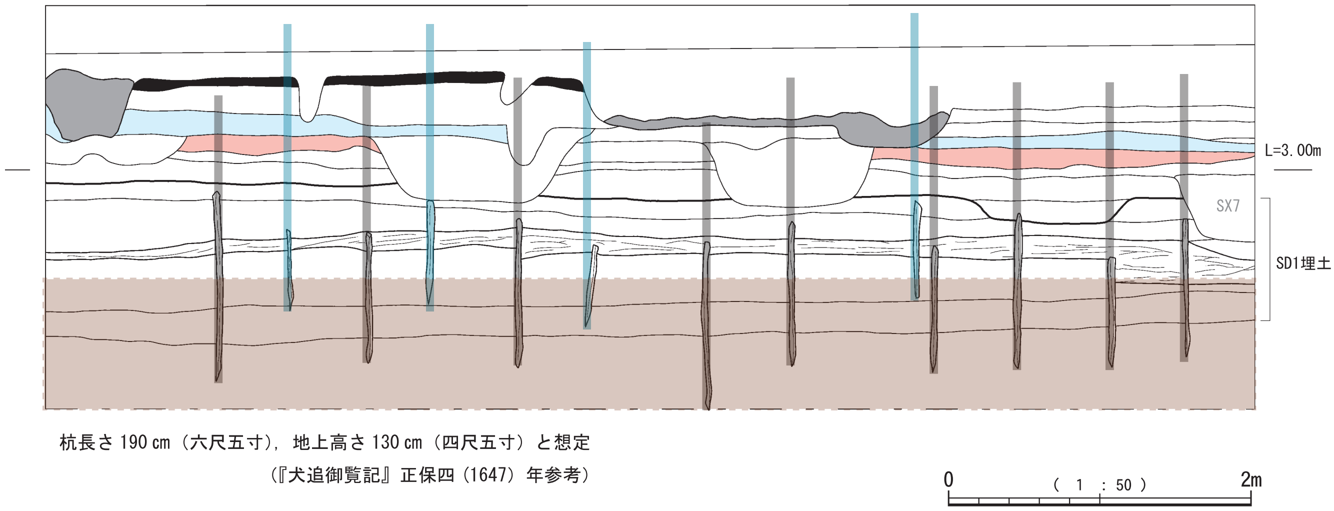
鹿児島城内における瓦の変遷は，鹿児島城（本丸）と，その他の鹿児島城内（垂水・宮之城島津家屋敷跡や名山遺跡，演武館など）の瓦は概ね同じ変遷を辿ると考えられるが，瓦が付随する建物の役割などに差異があるため考慮する必要があり，変遷については今後の課題である。

しかしながら，本遺跡の成果は17世紀後半という比較的古手の瓦が出土していることから，瓦の変遷を考える重要な成果であると考えられる。

第３節　犬追物馬場

１　馬場の規模

寛文10（1670）年『薩摩御城下絵図』や『常信筆薩陽



第61図　SD1杭列復元推定図

御城下ノ景』，『見聞秘記付図』では，犬追物馬場を囲う杭の表現がみられる。犬追物の馬場の規模は，流派や規模によって異なったようだが，正保４（1674）年の光久の王子原の張行では，北に桟敷を構え，東西42間×南北40間（76m×73m）の馬場を設けている（『犬追物御覧記』）。

また，後世のものになるが島津家の犬追物故実をまとめた『松平豊後守斉宣家伝来犬追物太概』（尚古集成館所蔵）では，馬場は「竪40丈（弦を外した弓の長さを一丈とする）（80m），横42丈（92.4m），艮に桟敷を構，是を竪と言う，其所に応し丈間定る故実あり」と記されている（松尾1988）。

鹿児島城御楼門前の敷地では，『常信筆薩陽御城下ノ景』では御楼門前に橋前から柵があり，『見聞秘記付図』では本丸と二之丸境の堀を境（現検察庁・名山小学校の境）の北側に柵が描かれている。寛文10年『薩摩御城下絵図』ではやや二之丸前寄りの敷地に柵が描かれているが，当時の地割では，その敷地には侍屋敷（喜入氏他屋敷）があった区画であり，本来は北側の区画に犬追物馬場があったと想定される。

以上のことから，鹿児島城前の犬追物馬場の規模は幅約70mに近く，縦も同様の長さのあった可能性が高く，約70m四方の馬場があった可能性が高いと考えられる。

２　馬場の柵

犬追物馬場を巡らす柵は竹垣に囲まれ，３か所の明戸（射手や犬の出入口）が設けられた。竹垣は杭列の間を埋めるように囲っている。

柵の高さは『犬追物御覧記』によれば，「埒高四尺五寸（高さ1.3m），杭の長さ六尺五寸（1.9m），横一尺五寸（50㎝）」と記されている。

Ⅵ層で検出された杭列は，杭間が約50㎝，太さが約５㎝で，先端が欠損していたため全長は不明だが，最も良好に残存していた77は110㎝あったことから，全長はより長かったと想定され，『犬追物御覧記』に記された規格と概ね一致する。

杭は数本を除き，ほぼ同じ高さに打ち込まれており，杭の長さを1.9mと仮定すると，杭頭は標高約3.6mの高さになる。杭の地表高さが1.3mに統一されていたとすると，当時の地表面は標高2.2mの高さにあったと考えられる。また，それらより打ち込まれた高さが高い４本（水色）は修繕等で打ち込み直したものと推測される。

出土した杭は六角形に面取りしてあり，建材等の杭とは異なり，装飾性があり，非常に視覚性が高い。明らかに魅せるための杭であり，犬追物の馬場の柵として利用されていたと推測できる。

本来であれば，馬場の柵は杭の間に竹垣をするが，竹垣自体は出土していないため詳細は不明だが，ＳＤ１の埋土内には竹片も多く出土していることから，竹垣があった可能性も考えられる。

３　馬場の期間

前述した調査成果と文献との対応から，杭列が犬追物の馬場の柵であった可能性が高いと考えられる。

競技上，馬場内には中央に二重の円（大縄・小縄）が設置される以外は何もない状態が通常であり，Ⅵ層面で柱穴以外の遺構は確認されていない状況は，馬場の本来の状況と一致する。なお，遺物の出土も調査区南側からの出土は少なく，大半は北側の出土であった。このことから，Ⅵ層は硬質で締まった層であり，調査区南側が何もない状況から，馬場の整地層であったと考えられる。

この馬場がどの段階で設置されたかは不明だが，寛文10（1670）年の絵図には「犬追物馬場」が描かれていることからも，それ以前には馬場が設置されていた可能性が高いと推測される。

『見聞秘記』でも「御犬垣」と記された二之丸前の地割・屋敷配置図に「慶長年間より正徳之始まで此所に有之」とあり，慶長年間にも家久が張行を催していること

から，慶長～元禄年間まで，馬場が設置されていた可能性が考えられる。

その上のⅤ層面からは遺構が全面に検出された。Ⅴ層も硬く締まった層で造成面であると考えられる。溝状遺構（ＳＤ２・３）や不明遺構（ＳＸ１～12）等は，整地層を掘りこんでいる。それらの遺構内遺物は17世紀後半～18世紀前半のもので，鹿骨等も出土している。鹿骨は下顎骨や肩甲骨などもあるが，脚の骨が多い傾向にあり，おそらく犬の餌であった可能性も考えられる。

馬場の整地層であったⅤ層面が，馬場としての役割を持たなくなった後，人為的に遺構が作られた可能性が高い。犬追物馬場の張行も光久以降は頻度が減り，元和元（1681）年10月に綱貴の張行を最後に行われなくなる。馬場としての利用が無くなった時期とⅤ層の時期は概ね一致する。Ⅴ層は元禄の大火（1696）の処理層（Ⅳ層）にパックされているため，その年代はおおよそ正徳３（1713）年の明地設置までの期間に収まると考えられる。

なお，Ⅲ層の砂層は犬追物馬場用に敷かれた砂と考えることもできるが，安永４（1775）に演武館で犬追物が催されるまで行われておらず，馬場として利用した痕跡については調査・文献からは確認できなかった。

このことから，Ⅴ・Ⅵ層は犬追物馬場の整地層であり，遺構・遺物や文献などから，おそらく慶長年間の鹿児島城の築城プランでは本丸前の地割に犬追物馬場を設置することが組み込まれていたと考えられる。

屋形の前に馬場を設置するのは，中世城館の在り方であり，近世期の城郭で本丸前に犬追物馬場を設置する城郭は鹿児島城しかない。そもそも犬追物を近世期にも継続させているのは薩摩藩しかないため，鹿児島城が中世の伝統を色濃く引き継いだ近世城郭であったことが，この犬追物馬場の設置から読み解くことができる。

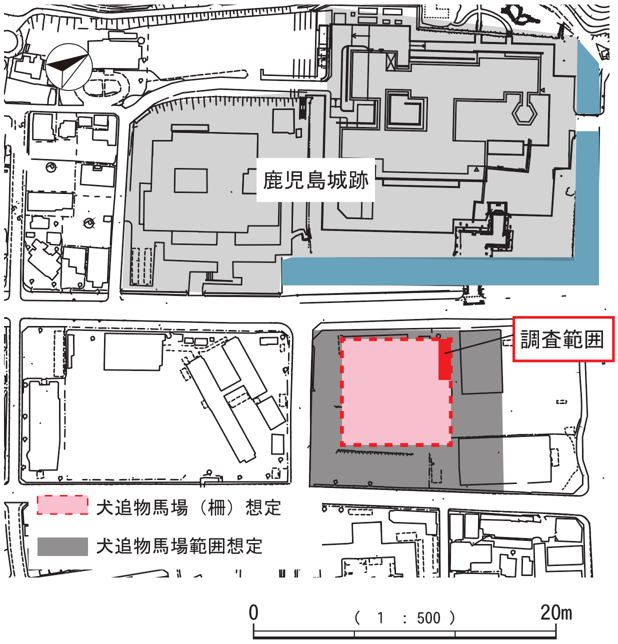
第３節　明地（火除地）

１　明地の設置

前述した調査成果と文献との対応から,Ⅳ層が元禄の大火の処理層の可能性を示した。元禄の大火による被災状況は大きく，元禄９（1696）年５月には石垣の築直し，楼門の新築，塀，橋の作事が許されている。

宝永４（1707）年には，鹿児島（鶴丸）本丸再建工事終了し，御座所を御下屋敷より本丸へ移している。約10年かけて，修繕作業を行っているが，本丸・二之丸前の敷地は，屋敷群が大きな被害を受けたため，正徳３（1713）年には，二之丸前の下屋敷（現中央公園から～名山小学校）が火除けのため，家来屋敷の建て直しの願いにより，火除のための明地となった。

犬追物馬場も明地となっており，正徳３年以降は絵図などにも「犬追物馬場」の記載はなく，空白または明地という記載がみられることから，隣地の旧下屋敷跡同様に，土地の役割としては火除地であったと考えられる。



第62図　遺跡残存範囲

２　明地の利用－火除地・下馬所・下乗所－

正徳３（1713）年以降，本丸前の明地は火除地として機能することになるが，当初火除地として設定された二え丸前の旧下屋敷の明地は，聖堂・講堂・医学院・造士館・演武館の創設により再開発が行われ，火除地としての役割を持たなくなり，本丸前の明地がその機能をもつ敷地となった。

絵図等には明地のほかには下馬所・下乗所と記されており，「府城南面屋形前之圖」『西陲畫帖』では建物等がない草地となっている。明地の状態で，下馬所・下乗所として利用されていたことがわかり，Ⅲ層で遺構等が確認されなかったことからも，鹿児島城存城期は，恒常的な建物を建てない土地として意図的に利用されていたことが窺える。

第４節　遺跡の残存状況

鹿児島城（犬追物馬場・火除地）は，鹿児島城内の本丸正面という良好な立地に位置している。本報告書の成果から，犬追物馬場と考えられる柵列が確認されたことで，馬場の広さ等が推測可能となった。また，近世の包含層が４面確認されたことで，元禄の大火の処理層や鹿児島城築城以前の中世層の残存等，層位的に非常に良好な状態で残存していることが明らかとなった。

この重層的な成果は，鹿児島城内の変遷や土地利用等を考える上で重要な成果であるといえよう。

調査範囲は極狭であったが，その周辺は良好な状態で残存している可能性が高く，鹿児島城内であることを十分に考慮し，今度取り扱いに十分注意する必要がある。

写真図版

①遺跡全景（写真中心が調査区。手前が鹿児島城御楼門）　②遺跡全景（奥が鹿児島城跡・城山）　③調査区１　Ⅱ層検出近代・近現代建物基礎
④調査区１　Ⅱ層検出近代建物基礎（凝灰岩地業）　⑤調査区２　Ⅱ層検出近代・近現代建物基礎

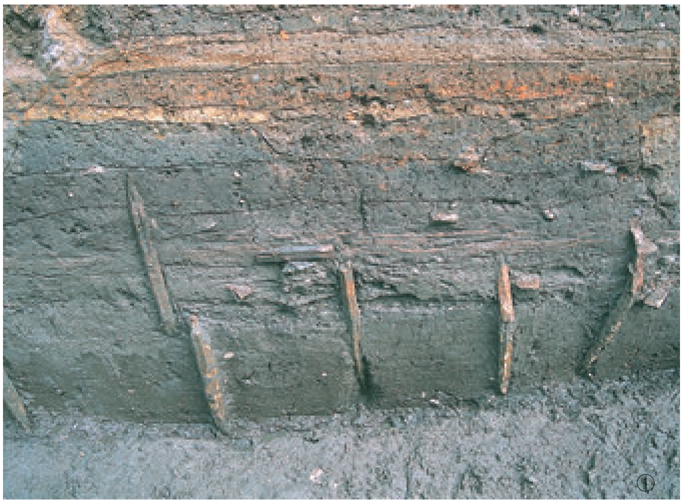
図版2

①調査区１　Ⅳ層遺構検出状況　②調査区２　Ⅳ層遺構検出状況　③SD2検出状況　④SK１埋土断面　⑤SX７埋土断面　⑥SX３埋土断面
⑦SX４埋土断面　⑧SX８埋土断面

①SX６獣歯（鹿）出土状況　②SK2底板出土状況　③調査区２　Ⅳ層瓦溜2検出状況　④調査区１　Ⅳ層遺構完掘状況　⑤調査区１　Ｖ層遺構検出状況　⑥調査区２　Ｖ層遺構検出状況　⑦SD1木板出土状況　⑧SD1検出状況

図版4

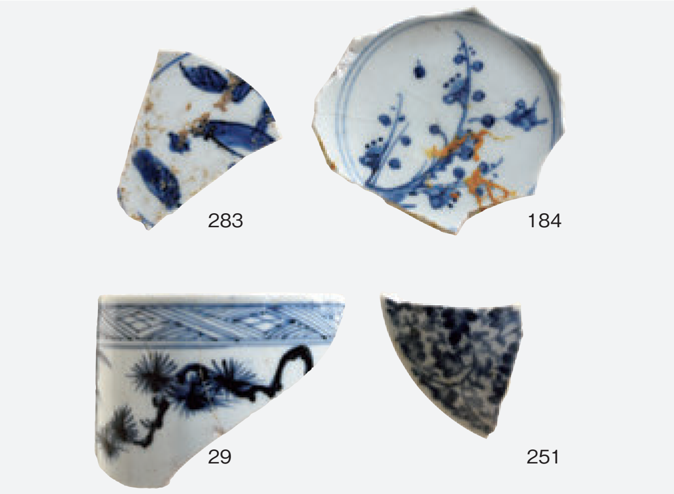
①・②SD1　木片出土状況　③SD1調査状況　④SD1埋土内下駄出土状況　⑤SD1埋土内丸瓦出土状況　⑥・⑦SD1木杭列出土状況



①SD1木杭列・木板　出土状況　②SD1埋土断面　③調査区２　Ⅴ層遺構調査状況　④P1木柱出土状況　⑤P2木柱出土状況　⑥P4木柱出土状況
⑦P7木柱出土状況　⑧土層断面（北壁）

図版6

①調査区１　土層断面（北・東壁）　②調査区１　土層断面（東・南壁）　③調査区２　土層断面（西・南壁）④調査区２　土層断面（北壁）
⑤～⑦Ⅶ層検出木杭列


283 184 29 251


291


215 293 216


33 135 136


177


137


295


177


31

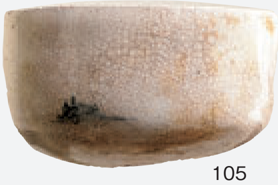

176

近世遺物 1

図版8


104


296


105


297


134


107


117


116


115

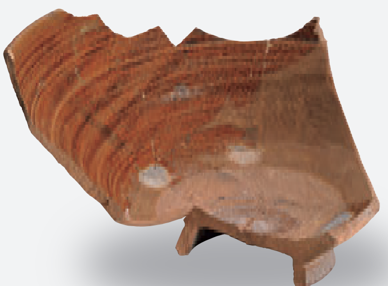

109


36


166


109


36


166

近世遺物２


142
112
223
39
114
253

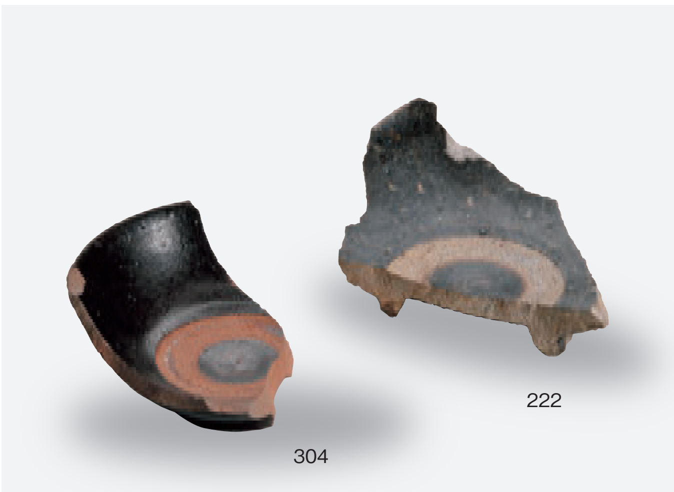

224
111


40
18


182
108
301


113


306
305


222
304

近世遺物３

図版10


51


175


43

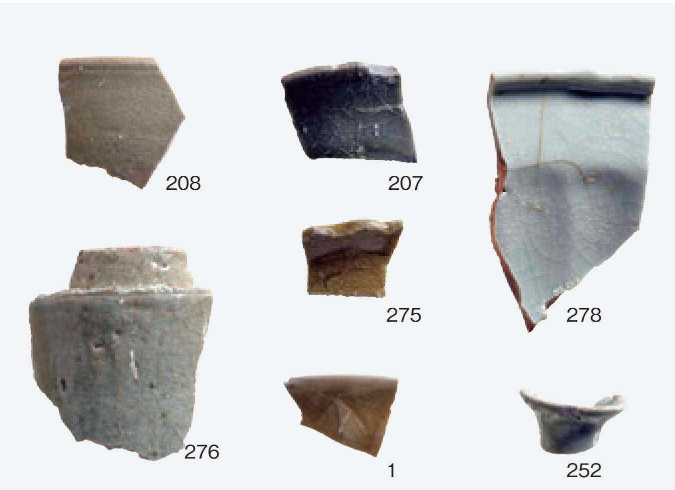

42


167


43


48


46


208 207 278 276 275 1 252


277

近世遺物４


230
121
57
327
229
123
231

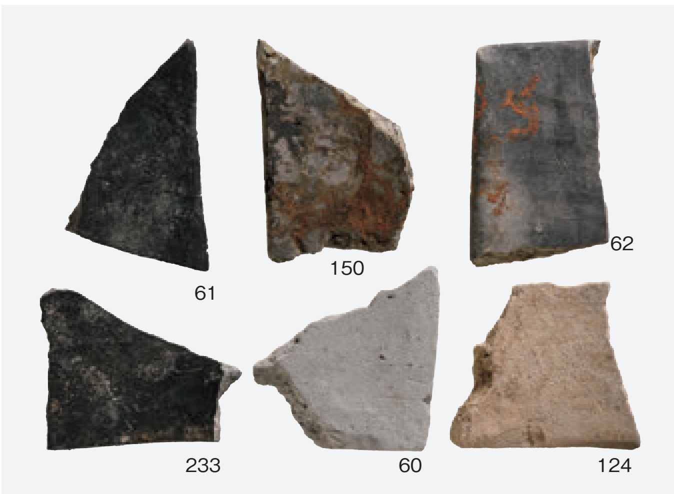

119
226
321
120


59
58
148
329
ＳＤ１出土
碁石


330
331


SD1
シカ上腕骨（R）
SD3
シカ脛骨（L）
SD1
シカ脛骨（L）
SD3
シカ尺骨（R）
SX7
シカ脛骨
SX5出土シカ歯
SD1
シカ椎骨
SX7
シカ肩甲骨


244
274
351
350
94
249
250


61
150
62
233
60
124

近世遺物５


269
Ⅳ層出土
268
69
273
70
162
270
191


271
272
248
349
174
348
346
71
347

近世遺物6


67
196
64
66
337
153
198


242
239
190
238
243
338
212
240
241
336
335
234
267
158
235
265
334
183
194

近世遺物7

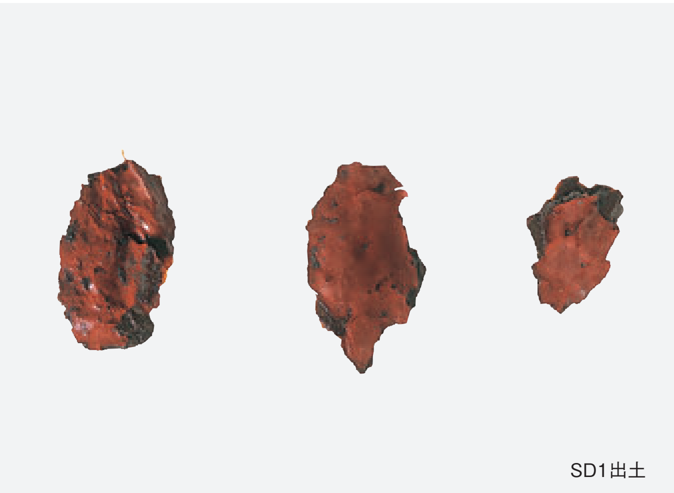

15
11
14
13
12
9
10
8
7
6
3
72
77
76
75
73

82 85

84 83

86

88 89 87



SD1出土

155

81 79 80 78

瓦溜１出土

近世遺物9

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（211）

鹿児島第３合同庁舎整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）

発行年月日	2021 年３月
編集・発行	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	〒899－4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
	TEL　0995-48-5811
印　　　刷	株式会社　トライ社
	〒892－0834
	鹿児島市南林寺町 12－6
	TEL　099-226-0815　　FAX　099-225-7933